

ゆか



目次

「ゆかり」巻頭言	小仲信孝	3
地域交流活動の再興とその新しい形態		
—2024年度 跡見学園女子大学の地域交流活動の概況—	土居洋平	4
跡見学園女子大学との地域連携活動と跡見生に期待すること	那須晴吾	8
「行こうよ！ 文京浴場♨ ～学生プロジェクト～」		
文京区浴場組合と跡見学園女子大学、跡見大学生の連携に期待する事	岡嶋良太	10
静岡県東伊豆町 跡見学園女子大学の学生との取り組みについて	太田裕介	12
「跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて」		
——TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）活動報告	照沼 愛	15
跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について		
—2024年度の活動状況と課題の分析—	川副早央里	21
特集 2024年度の地域交流活動	跡見学園女子大学地域交流センター	31
インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究 —障害児と健常児と一緒に遊べる空間を目指して—	赤松瑞枝	32
防災フェスタブース出展による研究成果報告 —継続研究ならではの困難を越えて—	赤松瑞枝	36
2024年度自治体の男女共同参画審議会等における活動報告	石崎裕子	39
食品専門スーパーマーケットとの産学連携による商品開発プロジェクト（第2弾）	石渡尚子	42
食育出張授業「バナナうんちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」2024年度活動報告	石渡尚子	45
文京ハッピーベジタブルフェスタ2024の出展	石渡尚子	47
ゼミ活動における地域イベント（スミファ）のSNS広報	許 伸江	49
在日グルド人を対象とした日本語ボランティアの実践報告	斎藤敬太	52
文京区エリアスタディ（社会調査実習）	佐野美智子	55
令和6（2024）年度 静岡県東伊豆町の地域活性化事業に関する塩月ゼミでの取組み		
—サッポロビールおよびポーラ（POLA）との産官学連携事業活動をめぐって—	塩月亮子・山信田葵	57
文京区学生と創るアグリイノベーション事業 令和6年度事業報告		
..... 篠崎健司・板垣青来・川嶋美月・長谷川ひなた・赤間珠希・辻本弥音・戸ヶ崎愛香・樋口由菜		64
2024年度 大井沢地域活性化協議会 農山漁村発イノベーション対策事業への協力について	土居洋平	67
2024年「文京まちたいわフェス」への協力・本学での実施について	土居洋平	69
みんなのわこらぼまつり2024への協力について	土居洋平	71
文京ダイバーシティ・ユネスコ協会への協力と本学での設立記念イベントの実施について	土居洋平	73
マンガならではの表現を体験する講座 ——現代テキスト表現ゼミの学生とともに	西原麻里	75
障害福祉サービス事業所におけるボランティア活動	松井理恵	78
2つの地域貢献を通して	宮崎圭子	80
新潟県胎内市への視察訪問と取組提案 2024年度の活動	守屋邦彦	83
銭湯からつなげる地域の輪	古澤実怜・石田結菜・川副早央里・小林咲葵	86

第5回「 ^{ふみ みやこ} 文の京書道展」開催報告	横田恭三	89
菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(5)		
..... 川副早央里・新井美鈴・大迫陽毬・黒木真悠・小玉采奈・小山凧咲・佐藤葵・ 鈴木未來・鈴木みづき・津島誇乃佳・土田芽依・弘真生・増田えみり・松井優花		93
旧伊勢屋質店特別企画展 「質屋と女性～一葉も通った伊勢屋質店～」開催の記録		
..... 小玉采奈・川副早央里・津島誇乃佳・新井美鈴・大迫陽毬・大屋恵実子・黒木真悠・ 小山凧咲・佐藤葵・清水菜摘・鈴木未來・鈴木みづき・長根旭美・西川綾菜・松井優花		97
2024年度菊坂子ども歴史探検隊「どうやって質屋を守る!? 防災の秘密を探してみよう!」開催報告		
..... 川副早央里・小玉采奈・小山凧咲・磯田みずき・鈴木みづき・津島誇乃佳・増田えみり		108
菊坂跡見塾における企画展の生涯学習効果に関する考察		
—2023年度企画展参加者アンケートの分析—	川副早央里	113
メディアで紹介された旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)〈紹介日順〉	地域交流センター	121
2024年度の地域交流関連活動記録	地域交流センター	122
跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程		139

【表紙】

- ・山形県西村山郡西川町大井沢：岩魚のつかみどりイベント「川じゃぼ～ん」参加メンバー(右上)
- ・旧伊勢屋質店で開催した特別企画展「質屋と女性～一葉も通った旧伊勢屋質店」の子ども向けワークショップ「質屋ごっこ」の様子(右下)
- ・簸川神社例大祭で「銭湯山車」を巡行した「行こうよ文京浴場」学生プロジェクトメンバーと地域の方々(左)

「ゆかり」巻頭言

学長 小仲信孝

令和6年9月28日、地域交流センター主催のワークショップ&シンポジウム「赤ちゃん和妈妈を守る避難所づくり」が開催された。

本学は平成24年、災害時に「妊産婦・乳児救護所」を開設するべく「災害時における母子救護所の提供に関する協定」を文京区との間で締結した。それ以来、毎年、救護所開設訓練を実施してきたが、コロナ禍によって休止状態が続いていた。

ところがここへ来て、状況が大きく動いた。1月1日の能登半島地震に始まり、台風・大雨など自然災害が多く発生していたが、折しも8月8日には日向灘地震に端を発し、「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」が発表され、防災への関心が一気に高まっていたこともあったろう、4年ぶりの今回は約120名の参加者を得ることができた。

ワークショップ&シンポジウムに参加して学んだことが多くあった。その中でも特に記憶に留めたのは、「正常化の偏見」についてである。「なぜ人は備えないのか」。ワークショップの進行役を務めてくれたまちづくり学科の鍵屋一教授によると、自分は大丈夫だと思って危険を軽視する心理、「正常化の偏見」が働くからであるという。自分自身を顧みて、この畏にもの見事にハマっていると納得させられた。

これに関連して、もうひとつ気づいたことがあった。それは、私たちが情報化社会の落とし穴にハマっているのではないか、ということである。身の回りには情報が溢れている。さまざまなメディアによってもたらされる情報の洪水を日々生きることによって、災害に関しても、たくさんの情報を持っているから、知っているから大丈夫、と危機に対してマヒしているところはないだろうか。

災害に際しては、情報より経験がものを言うだろう。いくら耳学問を積み重ねても、経験に裏打ちされない情報ではおそらく役立たない。ワークショップに参加したお母さんたちの避難所に関する心配は、実際の切実なものばかり。そうした心配に答える産婦人科医、助産師のみなさんのアドバイスが、豊富な現場体験に基づいたものであったからこそ、参加者たちの納得が得られていたのであろう。

災害時には何が大事か。体験することで見えてくることがある。というより、体験しなければわからないことばかり、それが災害の厄介なところではないだろうか。いざ、という時、どうすればいいのか？専門家のアドバイスをともに、命を守るための意見交換をする参加者たち。危機管理の必要性が高まっている現在、体験すること、そして人がつながることの重要性を再認識させられた。

地域交流活動の再興とその新しい形態

—2024年度 跡見学園女子大学の地域交流活動の概況—

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

2024年度の本学の地域交流活動は、形式・内容・分量ともにコロナ禍前の水準まで回復するに至ったと言えるであろう。もちろん、昨年度の段階でも、多くの活動がコロナ禍前の形式にて実施できるようになっていた。とはいえ、昨年度の本報告書にも記されているように、2024年の1月の段階では、コロナ禍の懸念は依然として払拭されきってはいなかった（土居、2024、p.4）。それが2025年1月現在、コロナのみならずインフルエンザも流行している一方で、その扱いはコロナもインフルエンザも殆ど変わりはない。また、感染拡大によって移動や行動が制限されるような事態にはなっていない。コロナ禍がはじまり5年経ち、その扱いは季節性インフルエンザとほぼ同様のものになっているように見受けられる。

一方で、地域交流活動の形式・内容・分量がコロナ禍前の水準に回復しているとはいえ、それはコロナ禍以前と同じ活動が同じやり方で行われているということは意味しない。これは、コロナ禍での活動休止期間中に学生の入れ替えも進み、そもそも以前の手法の継承が断絶したということもあるが、それ以外にも、休止を機に手法が大幅に見直されたものもある。また、休止したまま再開しないものもある一方で、新たに始まった活動もある。結果として形式・内容・分量ともにコロナ禍前の水準に戻ったとはいえ、中身はコロナ禍前とは異なる新しい展開が見受けられるのだ。

本稿では、そうした本学の地域交流活動の新しい兆しを中心に、活動の概況を報告したい。

2. 2024年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の概況

2024年度の本学の地域交流活動は、もはやコロナ禍に策定した「跡見学園女子大学教室外の活動に関わる指針」（以下、「指針」と略す）を意識して行うことも少なくなり、感染対策の観点からの制約は殆どない形で実施をすることができた。「指針」上は現在もレベル「0.5」という状態であるから、全く感染対策を意識しなくても良いということではないが、実質的に、コロナ禍に設けられた制約は解消されたといえることができるだろう。

本学地域交流センターが直接関わっている活動でも、まず、5月25日（土）に開催された「みんなのわこらぼまつり2024」（埼玉県和光市）では、飲食ブースやキッチンカーの数もコロナ



写真1 文京朝顔・ほおずき市 本学ブースの様子

禍前の水準に戻っていた。昨年度から既にコロナ禍以前の賑わいを取り戻していたが、今年度は出店者数や内容もコロナ禍以前と同様の水準に戻っていた。また、7月20日(土)・21日(日)に文京区の傳通院・源覚寺等開催された文京朝顔・ほおずき市は、昨年度と同様の賑わいに恵まれ、昨年度は入荷数を抑えたことから二日目は早々に朝顔・ほおずき共に売り切れてしまったのが、今年度は入荷数をコロナ禍前の水準に戻したことから、二日目もイベント予定時間まで販売が続き、二日を通して盛況なイベントとなった。

また、7月31日(土)には、文京区に新たに設立された「文京ダイバーシティ・ユネスコ協会」の設立総会・交流会が、本学地域交流センターの協力の形式にて文京キャンパス3階にて実施され、100名以上の来場者で賑わった。詳細は本報告書の別稿(「文京ダイバーシティ・ユネスコ協会への協力と本学での設立記念イベントの実施について」)を参照頂ければと思うが、これまでの本学の地域交流活動で得られた関係性をもとに、区内の各種団体が企画する新しい地域交流関係のイベントが本学にて開催されるようになっているのである。

さらに、9月28日(土)には、今年度の地域交流センター主催ワークショップ&シンポジウム「赤ちゃん和妈妈を守る避難所づくり」が開催された。これは、文京区との「災害時における母子救護所の提供に関する協定」に基づき災害時には本学に「妊産婦・乳児救護所」が設立されることを背景に、災害時に妊婦や小さい子どもを抱える親子をどのように守るかを考えようという趣旨のワークショップとシンポジウムである(詳細は、本冊子とは別に刊行しているシンポジウム報告書を参照されたい)。コロナ



写真2 シンポジウム&ワークショップの様子

禍以前は同趣旨のワークショップを毎年実施しており、本学教職員や学生(特に音羽寮の学生)と区防災課はもちろん、警察、消防、助産師会、専門家、地域住民が参加し関係性を築いていたのであるが、コロナ禍以降は区職員と本学教職員による救護所の開設訓練のみを行う形となっていたため、この形式での開催は2019年度以来5年振りということになった。当然ではあるが、5年の間に災害時に実際に救護所を利用するであろう当事者は大幅に入れ替わっており、また、この間の各団体での人事異動等もあり、2019年度までに形成されていた救護所を実際に使う当事者・運営に際して協力し合う関係者のネットワークはかなり脆弱化していた。5年振りの開催にあたり、当日のイベントの成功はもちろん、ネットワークの再構築をテーマにイベントの企画と準備を進めたのであるが、実際、当イベントを通じて脆弱化していたネットワークが再構築され、文京区における防災レジリエンスの向上に役立つものになったと考えている。

11月3日(日)には、「文の京ゆかりの文化人顕彰事業 朗読コンテスト」の本選が、例年と同じく、本学文京キャンパスプロッサムホールで開催され、274名の応募のなかから選出された14名が朗読を披露した。なお、今年度が文京区と金沢市の友好交流都市協定締結5周年にあたることから、金沢市と文京区のゆかりの作家6名の作品が朗読の対象となった。

菊坂跡見塾(旧 伊勢屋質店)においても、文京区の委託事業としての年間60日間の一般開館業務を

例年通り実施したが、今年度は団体での見学等も増加し、コロナ禍後の観光の盛り上がりを感じられるところであった。また、今年度も「跡見「学芸員」in菊坂」のメンバーの企画による企画展「質屋と女性～一葉も通った伊勢屋質店～」を11月16日(土)～12月14日(土)の各土曜日5回にわたり開催し、370名の来場者を得ることができた。今年度は企画展にあわせて小学生向けのワークショップ「質屋ごっこ」を毎回午前中に開催したほか、11月23日の一葉忌には、伊藤氏貴 明治大学文学部教授をゲストに招いたトークセッション「女性職業作家誕生～なぜ樋口一葉は日本初の女性職業作家になれたのか」を開催し、どちらにも多くの参加者を得ることができた。

また、昨年同様、文京浴場組合・拓殖大学との協働プロジェクトである「行こうよ文京浴場～学生プロジェクト～」でも、キャンパス近隣の大黒湯でのイベントの実施等で本学学生が大いに活躍している。さらに、文京キャンパス近隣の小日向台町小学校での放課後学習支援および校庭開放の運営ボランティアを地域交流センターで募集・日程調整を行い実施している他、文京キャンパス近隣、新座キャンパス近隣の町会・自治会、社会福祉協議会、各種団体から依頼のあったボランティアの募集について地域交流センターで精査したのちに学生に募集をし、キャンパス近隣の各種活動に本学学生が参加するといったことも定着しつつある。

もちろん、地域交流センターを軸とした活動以外にも、各教員で行っている地域交流活動も、コロナ禍以前の水準に戻りつつある。まず、新座キャンパス近隣では、今年度新たに清瀬市との連携も始まったほか、昨年度に包括連携協定を締結した富士見市においては、協定の軸となった心理学部の教員・学生以外の活動が展開しつつある。また、文京キャンパス近隣では、町会活動への学生の参加が増加している他、大塚地域活動センターオープンスペースでの書道展の実施、文京花の五大まつりへの本学学生ボランティアの参加、文京区のSDGsへの取り組みにマネジメント学部生活環境マネジメント学科安藤ゼミが協力したり、文京区観光協会と連携した六義園におけるイベントの実施(本稿執筆時点では2月に実施予定)に観光コミュニティ学部観光デザイン学科三原ゼミが協力するなど、今年度も活動が大きく広がりとある。

遠方での活動についても、農林水産省の農山漁村イノベーション補助事業の関係で岩手県盛岡市と山形県西村山郡西川町に観光コミュニティ学部まちづくり学科(旧 コミュニティデザイン学科)の教員と学生がゼミ単位訪れ、それぞれの事業に協力をしているほか、静岡県賀茂郡東伊豆町、新潟県胎内市などで観光コミュニティ学部観光デザイン学科のゼミ単位での実践活動が展開している。

3. 2024年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の特徴

以上のように、2024年度の本学の地域交流活動は形式・内容・分量ともにコロナ禍以前の水準に回復した。しかし、上述したように、その活動は同じものが再び行われるようになったということではなく、形式が変わって継続したり新たに始まったものもある。もちろん、コロナ禍以前に開催されていた活動で再開していないものも多くある。

まず、コロナ禍の期間で、本学の学生団体の活動も制限される時期が続いたことで、かつて大きな人数が属していたような学生団体が弱体化し、いまだコロナ禍の水準にまで活動が戻ってきていない。なかには、長らく続いていた団体が活動休止等に追い込まれてしまっているものもある。また、学生団

体の場合は、5年の間でメンバーが完全に入れ替わることから、活動が継続していても、過去の経緯や手法が引き継がれにくいということもある。そうしたこともあり、地域交流センターが直接かかわる活動においても、例えば、文京朝顔・ほおずき市は、かつては一つの学生団体のイベント全体の運営支援、複数箇所への出店といった対応をしていたのだが、今年の場合は、開会式の運営支援のボランティアや観光協会の出店ブースの運営支援ボランティアは地域交流センターが直接ポータルで公募した学生が担い、イベントのチラシに掲載するキャラクターの図案や関係のパネル・看板等の作成は菊坂跡見塾(旧 伊勢屋質店)で活動し、そのパンフレット等の制作の実績のあった「跡見「学芸員」in 菊坂」のメンバーが担った。また、イベントでの子ども向けの体験ブースの出店は、観光コミュニティ学部まちづくり学科(旧 コミュニティデザイン学科)のゼミが企画から運営までを担っていた。

学内の各種学生生活活動の再始動は、まだ軌道に乗りつつあるところであり、今後も一定期間は規模の小さいグループの連携で、大きなイベントの運営協力等はする形が想定されるが、このことは特段問題があるということでもない、むしろ、複数の学生団体やポータル公募での学生が同じイベントに関わることで、学部や学科を超えた交流が進んだり、大学が組織として対応しているという評価が高まるといったこともある。こういった効果も踏まえながら、次年度以降の地域交流関連活動の実施を考えていきたい。

また、これに関連して、活動への参加を通じて各種学生団体内部の関係性が構築・深化し、その後の活動の展開につながるということもある。今回、地域交流センター主催のワークショップ&シンポジウムに合わせて午前実施した「妊産婦・乳児救護所」の開設訓練には、実際の発災を想定して、寮生にも訓練参加とその後のワークショップ・シンポジウムへの参加や運営の協力を依頼した。具体的には、寮長を通じて寮生会へと打診したのであるが、このイベントを通じて寮生同士の関係が形成されるということもあったようである。実際、地域交流活動の準備や運営は協働作業であることが多く、そのなかで自然と関係性も形成されるものである。今後は、この点についても意識しながら、地域交流関連活動を通じた学内の各種学生生活活動の振興ということも実践していきたいと考えている。

引用文献

- ・土居洋平、2024、「地域交流活動の新たな展開の模索—2023年度跡見学園女子大学の地域交流活動の概況—」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 5号』跡見学園女子大学、pp.4-6

跡見学園女子大学との地域連携活動と 跡見生に期待すること

大塚青少年健全育成会 会長 那須晴吾

1. 大塚青少年健全育成会（以下「大塚育成会」）について

文京区内には9つの青少年健全育成会があり、地区ごとに青少年のすこやかな成長を目的にボランティアとして活動しています。

地域の大人たち（町会、PTA、民生・児童委員、保護司、青少年委員、スポーツ推進委員等）が力を合わせ、キャンプやバスハイク、マラソン大会、スキー教室、おまつりなどのイベントを区や学校と協力し実施しています。また、九地区合同で「文の京こどもまつり」の実施や機関誌「やんぐ」の発行も行っています。

その中の1つである大塚育成会は、大塚地域活動センターを拠点に、21の町会、5つの小学校、3つの中学校からなる約100名の委員で構成され、主に小中学生を対象とした以下のようなイベントを実施しています。

- カプラで遊ぼう！

不思議な積み木「カプラ」を使用した様々なコーナーで楽しめます。

- 落語ワークショップ

プロの落語家を講師に招き落語や大喜利を通してコミュニケーション能力を育みます。

- 学校対抗ポッチャバトル

地区内5小学校、3中学校が「ポッチャ」で順位を競います。

- 中学生文化祭

地区内3中学校が合同で行い文化部の作品展示やゲームコーナーで盛り上げます。

他にも毎月の定例会では各校PTAや各関係団体間で行事や課題などを出し合い、地域子どもたちの為の情報を共有しています。

2. 跡見学園女子大学との連携の経緯

きっかけは、自身が地域学校協働本部のコーディネーターを務める小日向台町小学校で放課後学習教室を始めるにあたり、既の実施していた大塚小学校からのご紹介で土居先生にお声掛けさせていただいたことでした。

開催する曜日や時間帯、必要な学生さんの人数などを打ち合わせの中で、当時は副会長だった大塚

育成会のイベントもお手伝いしてほしい旨をお願いしたところご快諾くださり連携が始まりました。

その後は「カプラで遊ぼう!」や「中学生文化祭」、地区は異なりますが音羽育成会主催ながら小日向台町小学校で開催された「学校で肝だめし」などに多くの跡見生が参加くださりイベントを盛り上げてくださいました。

また、地域の各学校でも第一中学校で開催された「一中祭」でのボランティア、大塚小学校でも引き続き放課後学習教室を、小日向台町小学校では放課後学習教室に加え、土日に開催される校庭開放の「こどもひろば」、朝の読み聞かせの「図書ボラ」、漢字検定でのボランティアなど、多岐にわたるお手伝いをいただいています。

3. 跡見学園女子大学との地域連携活動と跡見生に期待すること

子どもたちにとって家族以外の大人と遊ぶ機会はそう多くありません。

大塚育成会では先述の通り、主に小中学生を対象としたイベントを実施していますが、子どもたちにとっては私たちのような年の離れた「遠い大人」より、大学生のような「近い大人」の方が親しみやすいのは明らかで、子どもたちはボランティア参加された大学生の手を気軽に握って「ねえねえ」と話しかけます。

その時の笑顔は私たちと接するそれより明るく親しみに満ちています。

跡見学園女子大学との連携によりイベントに参加する子どもたちの笑顔がより一層増えることを期待します。

跡見生に期待することは、まずはご自身が楽しんでいただきたい、ということ。

大人たちが子どもたちとのふれあいを楽しみ、イベント自体を楽しんでいる姿はそのまま子どもたちに伝わります。

そして、ボランティア活動で学んだことをこれからのご自身の人生にフィードバックしてください。

子どもたちの笑顔があふれる地域は必ず活性化します。これから皆さんがお住まいになる地域の子どもたちの笑顔が溢れるよう、ボランティア活動で培った経験を生かしていただけると幸いです。

今後も大塚育成会では跡見生のボランティアに期待しながら、子どもも大人も楽しめるイベントを企画して参りますので、積極的にお手伝いいただければと思います。

「行こうよ！ 文京浴場♨️ ～学生プロジェクト～」

文京区浴場組合と跡見学園女子大学、跡見大学生の連携に期待する事

文京浴場組合 岡嶋良太

1. 文京浴場組合について

文京浴場組合は正式名称を東京都公衆浴場業生活衛生同業組合文京支部と言います、いわゆる銭湯の経営者の集まりです。

組合加盟は2024年時点で435軒、文京区では、2000年頃には20軒ほどありましたが現在、大塚の大黒湯、千駄木のふくの湯、小石川の白山浴場、目白台の豊川浴泉の4軒になりました。

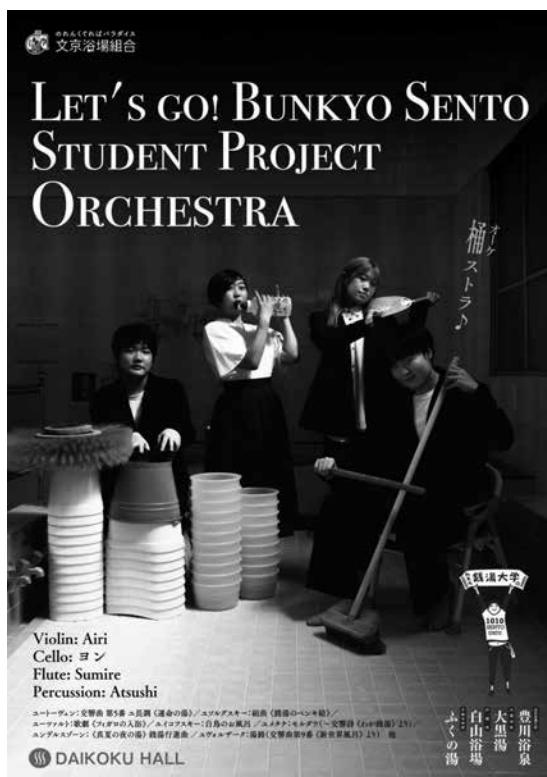
2. 連携までの経緯

文京区内4浴場の利用客の増加を図るべく、これまでに変わり湯、アートイベント、小学生を対象とした入浴体験イベント等、文京浴場組合独自のイベントを行ってきた中で、2022年文京区の森鷗外・没後100年記念事業にて「鷗外の湯」イベントを行う事となりました、それに際し今まで疎かになっていたSNSによる広報活動を拡充しようと計画している中で学生さんに手伝ってはもらえないかという話になり、跡見学園女子大学の学生と拓殖大学の学生に協力して頂けることになりました。

3. 活動内容について

2022年発足時はSNSを用いて各浴場の紹介や組合イベントの広報を行ってもらっていましたが、しかし、組合も外部との共同は初めての試みであったため、情報共有が上手くできず、活発な活動とは呼べないものでした、活動する学生も少なくなり、森鷗外の事業が終了すると共にプロジェクトも終了するかと思われましたが、学生からプロジェクトの継続を打診されました、翌年2023年はプロジェクトメンバーの役務を学生主体で見直し、SNSに挙げる情報も銭湯全体の情報に広げ、広報活動の他に銭湯を会場とした演奏会、子供向けゲーム大会など企画の立案と運営を行っていきました、2024年はこれらに加えて地域の祭りに文京建築ユース所有の銭湯山車を借りて参加したり、文京浴場組合が制作した広報ポスターにモデルとして出演して貰いました。





4. 学生に期待する事

当初のプロジェクトの目的はSNSを通じて銭湯の魅力を発信することが主目的でありましたが、年を経るごとに活動内容がネット上だけではなく浴場とその地域に密着した企画も増えている事がわかります、「銭湯は町に生かされている」と私たち経営者は常々思っていますが、家に入浴設備が無い時代は銭湯は生活の一部でありました、しかし家に浴槽がある家庭が一般となっている現在、銭湯は生活の一部とは言えず、それ故地域との関わりが薄くなってしまっているのではと思います、学生にはその薄くなった地域との関わりを補強してくれるような活動を期待し、また他大学にも同様の活動を行っている団体もあるので、他団体との積極的な交流を行い、よりプロジェクトの活動の幅を広げて欲しいと思います。

静岡県東伊豆町 跡見学園女子大学の学生との取り組みについて

東伊豆町観光産業課 太田裕介

1. 東伊豆町の概要

東伊豆町は伊豆半島東海岸の中央に位置し、東南は相模湾に面し、東北は伊東市に面しています。北西は天城連山を境に伊豆市に接し、南西は河津町に接しています。東西15.04km、南北13.78km、総面積は77.81km²です。

地形は主として岳陵をなし、海に面していくつかの平地が点在しています。町のほぼ中央には白田川が流れ、町を二分しています。

産業は観光を主とし、その他にも柑橘類を中心とした豊富な農産物、またブランド化している稲取キンメをはじめとした海産物が有名です。

都心から公共交通機関で約2時間半と、「手軽に行ける観光地」として親しまれています。

2. 連携・協力について

跡見学園女子大学と東伊豆町は、学術研究の発展及び施策の充実のための相互協力、人材の育成と地域社会の発展に寄与することを目的とし、2019年11月19日に包括連携協力協定を締結しました。

協定締結後は、協定の目的達成に向け、相互にアイデアを出し合い「学生の若い力」を十分に活かす方法を模索しながら、日々活動が続けています。

3. 東伊豆町との連携・協力内容

(1) 産官学連携を目的としたサッポロビール株式会社とのオリジナルカクテル事業

2022年より開始した本事業は、現在跡見学園女子大学との連携のメイン事業となっています。

きっかけは女性人材育成交流会^{*1}にてつながりができたサッポロビール株式会社との連携で実現したもので、町の特産品である柑橘「いずのはる」を使用したオリジナルカクテルの開発を町・企業・学生が共同で行うことで、宿泊客への特産品のPR効果や大手企業と連携したことによるPR効果により新規顧客の獲得、地産地消の定着を目指すことを目的としています。

直近の活動内容としては、オリジナルカクテルの宣伝用グラス、POPの作成、またオリジナルカクテル取り扱い施設の拡大を目標として、年に2回の東伊豆町フィールドワークを活用し、学生たちが施設に直接訪問し交渉を行っています。特にこの取り扱い施設の拡大については、東伊豆町内のホテル・旅館約40施設を対象として、学生たちが各施設の特徴を調査するところからスタートし、最終的には

3施設程に絞り込んでいきます。これも時間のない中で全て学生中心で行っており、リーダーをはじめとする学生たちのチームワークや努力の様子がうかがえます。

結果として、現在は事業スタート時の7施設から5施設拡大し、計12施設がいずれのはるオリジナルカクテルの販売・提供を開始しています。このカクテルは「いずれのはる」の出荷時期に合わせて提供を開始するため、提供期間が2月中旬～3月下旬と大変短くなっています。そのため十分なPRをするには、提供施設の拡大が大きなカギを握っているため、今後も学生たちの積極的な活動に期待したいです。

また、今年度においては学生たちのアイデアが多く、今後はノンアルコールの開発や跡見学園女子大学×東伊豆町×サッポロビール株式会社のロゴ入りグラスの開発、さらには公共交通機関、町内全域へのポスター・チラシの掲出等、いずれのはるオリジナルカクテルの多方面への情報発信のため、実現可能なものから徐々に取り組んでいけたらと思います。町としましても、学生たちの活発な取り組みを最大限に活かせるよう全力で後押ししていきたいと思っています。

※1 詳細は(3)のとおり



(2) 玉川高島屋S・Cでの雛のつるし飾りイベント

本事業は首都圏への観光PRを行う一環として、都内の中でも多くの富裕層が生活圏としている二子玉川で、50年以上の歴史を誇る玉川高島屋S・Cとコラボし、東伊豆町発祥の伝統工芸「雛のつるし飾り」をはじめ東伊豆町をPRすることにより認知度UPを計ることを目的としています。具体的には、連携大学の一つである昭和女子大学学生による雛のつるし飾り製作体験、当町の旅館女将の会と共同での東伊豆町産カーネーション及びパンフレットの配布、子供向けワークショップなど様々で、跡見学園女子大学の学生たちにもカーネーション配布イベントの補助をおこなっていただいています。

今年度についてはさらに株式会社POLAと跡見学園女子大学、昭和女子大学とがコラボし、化粧品から作った絵の具を使用した子供向けワークショップの実施、特別PRブースの設置と盛りだくさんで、学生間の交流や新規企業との繋がりを深める良い機会となることを期待しています。

(3) 女性人材育成交流会及び成果発表会

女性人材育成交流会とは、女性活躍を推進する民間企業を巻き込み、協定の協力事項でもある人材育成として将来を見据えた学生と、社会で活躍をする女性社員の方々との出会いの場を提供すること、また情報発信力のある若い女性と、影響力のある女性社員に東伊豆町の認知度を上げてもらうことを目的としています。昨年は玉川高島屋での雛のつるし飾りイベントに合わせ二子玉川にて実施し、跡見学園女子大学、昭和女子大学、杏林大学の学生、企業からはサッポロビール株式会社、温泉道場の社員が参加し交流を深めました。現場の様子として、実際に企業で働く女性を前に、多くの学生が目を輝かせていたこと、また学生から進んで質問を投げかけている姿がとても印象的でした。本交流会の

開催が、学生にとって将来のことを考えるきっかけの一つとなってもらえたら嬉しいです。

また、本交流会では第一部として各大学の一年間の成果発表を実施しています。これも学生が他大学の活動を知ることによって刺激を受ける良い機会と考えており、ただ単に発表の場として捉えるのではなく、色々な情報、意見を聞くことで視野を広げるきっかけとなることを目的としています。開催時期が年度末ということもあり、学生にとっては大変な時期となりますが、今後も積極的な参加をお願いしたいです。



昨年度の女性人材育成交流会の様子

4. 学生に期待すること

東伊豆町は現在少子高齢化により、とにかく「若い力」が不足しています。これは働き手だけの問題ではなく、外への情報発信や繋がりづくりという点でも同じです。

最近では町と学生との繋がりが実を結び、東伊豆町を第二の故郷として移住してくれる方、地域おこし協力隊として戻って来てくれる方など、町内は徐々に活気づいてきましたが、まだまだ活性化の余地はあります。現在の跡見学園女子大学の皆さんが実施してくださっている事業は、特に外への発信という意味ではとても期待しており、どう発展していくのだろうかというこのワクワク感は日々の私の楽しみでもあります。今後も本事業を継続することで、東伊豆町の活性化や学生の皆さん自身の成長、将来の活躍に繋がっていかれたらと思っていますので、引き続き学生の皆さんには自由な発想で楽しく活動が続けていただけたらと思います。

結びに、本事業に多大なご尽力をいただいております塩月亮子副学長、また学生をサポートしてくださっている教員の皆様に心よりお礼申し上げます。

「跡見学園女子大学における TJUP の取組みについて」

——TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）活動報告

地域交流課 照沼 愛

TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）は、地域活性化のために埼玉県東武東上線沿線および西武池袋線沿線の地域の大学・短期大学・自治体および企業が連携し、協働事業を展開するプラットフォームである。「地元で学び、地元で生きていく若い世代への支援」というビジョンのもと、現在23の自治体会員、20の大学・短期大学が加盟しているほか、地域の企業等が事業者等会員として参加している。

跡見学園女子大学はこのTJUPに2020年12月に加入して以来、地域の一員として様々な活動に参加し、地域活性化および地域貢献に努めている。

1. 2024年1月から2024年12月までの活動報告

日 付	活動名	学内参加者・対応者	活動内容その他
1月17日	第15回TJUP共同IR責任者会議	渡辺課長代理（庶務課）	2023年度第2回共同IR調査について 2024年度事業計画兼予算申請書について （オンライン）
1月17日	TJUPホームページグループ打合せ	房前職員（庶務課） 橋本職員（図書課）	2024年度事業計画について TJUPホームページのサーバ管理について （オンライン）
1月24日	外国籍児童生徒日本語学習支援プログラム（東松山モデル）	照沼課長（地域交流課）	外国籍児童生徒の日本語学習支援
1月25日	海外SD研修プロジェクトチーム会議	渡部職員（国際交流課）	2024年度事業計画兼予算申請書について （オンライン）
1月26日	第53回TJUP運営協議会	照沼課長（地域交流課）	定例会議（オンライン）
2月16日	第54回TJUP運営協議会	障子次長（入試課） 照沼課長（地域交流課）	定例会議（オンライン）
2月17日	TJUP教育支援共催事業 「親子食育講座 バナナうんちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」	講師・石渡教授（マネジメント学部）および石渡ゼミ生 福島主任（地域交流課） 渡部職員（地域交流課）	和光市南公民館での家庭教育支援事業
3月5日	第43回TJUP教育連携委員会	照沼課長（地域交流課）	2024年度の委員会運営体制について他
3月13日	TJUP共同FDSD 「これから始める教学アセスメント～IRデータを用いる体制構築～」	照沼課長（地域交流課） 渡辺課長代理（庶務課） 坪原教授（観光コミュニティ学部）	東京家政大学における教学アセスメントの 取組事例紹介講演
3月23日	TJUPランド～こどもフェスタ～	照沼課長（地域交流課）	活性化対象地域を中心とする子どもと保護者を対象とした企画の運営参加
3月25日	共同IR検討会	渡辺課長代理（庶務課） 板東教授（心理学部）	IR調査分析結果の総括および意見交換 （オンライン）

日 付	活動名	学内参加者・対応者	活動内容その他
3月28日	第16回共同IR責任者会議	渡辺課長代理(庶務課)	2023年度第2回共同IR調査報告書の確認について(オンライン)
3月29日	第55回TJUP運営協議会	土居教授(地域交流センター長) 障子次長(入試課) 照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	定例会議(オンライン)
4月10日	第44回TJUP教育連携委員会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	音楽を楽しもう2024事業計画案の一部修正について他
4月17日	第45回TJUP教育連携委員会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	社会人教育・専門教育ニーズ調査について他
4月18日	第57回TJUP幹事会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	定例会議(オンライン)
4月26日	第56回TJUP運営協議会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	定例会議(オンライン)
5月21日	第46回TJUP教育連携委員会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	社会人教育・専門教育ニーズ調査に関する協力要請について他
5月23日	第58回TJUP幹事会	照沼課長(地域交流課)	定例会議(オンライン)
5月24日	第57回TJUP運営協議会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	定例会議(オンライン)
5月24日～ 6月28日	TJUP社会人対象教育プログラム2024 ～空気圧・ファクトリーオートメーションセミナー	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	活性化対象地域の社会人を対象とした専門キャリアアップ講座
5月29日	業界セミナー 「オンライン合同企業説明会」	下田職員(就職課) 笹本職員(就職課)	埼玉県内27社が参加し各社PRおよび会社説明を実施(オンライン)
5月31日	第10回TJUP全体会	小仲学長 土居教授(地域交流センター長)	大東文化大学にて対面実施
6月1日	埼玉で学ぼう! 埼玉県内大学・短期大学 合同オンライン入試説明会・外国人向け合同オンライン入試説明会	小町課長代理(入試課)	高校生対象の合同入試説明会(オンライン)
6月15日	TJUP地域交流委員会オンライン公開講座	照沼課長(地域交流課)	テーマ:「住み続けられるまちづくりのために ～地域の資源をいかに活用するか～」(オンライン)
6月18日	第17回TJUP共同IR責任者会議	渡辺課長代理(庶務課)	2024年度共同IR責任者グループの体制及び役割分担について(オンライン)
6月20日	第59回TJUP幹事会	照沼課長(地域交流課)	定例会議(オンライン)
6月21日	第47回TJUP教育連携委員会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	社会人教育・専門教育ニーズ調査に関する企業ヒアリングについて(オンライン)
6月24日	Annual Reportグループ打合せ	照沼課長(地域交流課)	グループリーダー選出他(オンライン)
6月25日	TJUP HP・SNSグループ打合せ	木下職員(学生課) 横森職員(庶務課)	グループリーダー選出他(オンライン)
6月28日	第58回TJUP運営協議会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	定例会議(オンライン)
6月28日	第48回TJUP教育連携委員会	照沼課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	社会人教育・専門教育ニーズ調査に関する企業訪問報告及び今後の事業計画方針について(オンライン)
7月6日	TJUP共同FD・SD研修会	パネリスト・松寄教授(心理学部) 照沼課長(地域交流課)	テーマ:大学生における「ストレス」への理解と対応 ～上手に乗り越えていくために、教職員ができることとは～

日 付	活動名	学内参加者・対応者	活動内容その他
7月11日	TJUP共同FD・SD研修会	土居教授 (地域交流センター長)	テーマ：地域と学生をむすぶボランティア ～学生へのボランティア活動支援を考える～
7月12日	第49回TJUP教育連携委員会	照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	外国人労働者受検支援講座 必要度 (需要度) の確認方法等について他 (オンライン)
7月18日	第60回TJUP幹事会	照沼課長 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
7月23日 ～26日 8月19日 ～23日	鶴っ子サマースクール×大学生WINWIN 事業	本学学生ボランティア	鶴ヶ島市の児童・生徒の学習意欲向上や学 習習慣の定着を目指し、夏季休業中の大 学生による学習指導補助活動。
7月26日	第59回TJUP運営協議会	照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
7月29日	TJUP教育連携懇談会 「教育連携フォーラム2024」	照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	活性化対象地域自治体の教育委員会・産 業界・大学による懇談会 テーマ：TJUPに期待する小・中学校への 教育支援／外国籍児童生徒の就学支援 (東 松山モデル) 実施報告 他
8月22日	第61回TJUP幹事会	照沼課長 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
8月30日	第60回TJUP運営協議会	照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
9月3日～ 11月4日	TJUP公開講座 「武蔵国の19校を通じて埼玉の大学 を知る2024～名物先生大集合！～」	講師・西原准教授 (文学部)	テーマ：マンガ研究のおもしろさをジェン ダーの視点から考える！ (オンデマンド配 信) 講師：文学部 西原麻里 准教授
9月3日	第50回TJUP教育連携委員会	照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	「社会人教育・専門教育のニーズ調査」進 捗と今後の展開について (オンライン)
9月7日	TJUP公開講座 「魅力発見！埼玉～埼玉東上地域の 大学を知る～」	講師・安藤教授 (マネジメント学部)	テーマ：SDGsとその先の未来 講師：マネジメント学部 安藤生大 教授
9月9日～ 11月30日	TJUP主催 「大学・短期大学教職員のFD・SD研 修プログラム」	塩月副学長 土居教授 (地域交流センター長)	各校の取り組み紹介等のFD・SD研修プロ グラム テーマ：跡見学園女子大学の地域交流活動 の展開と事例紹介
9月12日	第62回TJUP幹事会	照沼課長 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
9月20日	第61回TJUP運営協議会	塩月副学長 照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
9月26日	TJUP学生募集活動推進グループ会議	小町課長代理 (入試課)	2025年度合同入試説明会実施について (オンライン)
9月26日	第51回TJUP教育連携委員会	照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	TJUP 第6期活動指標評価シート入力につ いて他 (オンライン)
9月27日	第18回TJUP共同IR責任者会議	渡辺課長代理 (庶務課)	2024年度第1回共同IR調査の集計・分析 について (オンライン)
10月10日	第52回TJUP教育連携委員会	照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	TJUP各委員会業務分担 (案) について
10月11日	オンラインディスカッション講座 “よいコミュニケーション”とは～自 己理解のためのはじめの一歩～	綿貫職員 (就職課)	ファシリテーター参加
10月17日	第63回TJUP幹事会	照沼課長 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
10月25日	第62回TJUP運営協議会	照沼課長 (地域交流課) 渡部職員 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)

日 付	活動名	学内参加者・対応者	活動内容その他
10月25日	第11回TJUP全体会	塩月副学長 大森事務局長 大坂事務局次長 照沼課長（地域交流課） 渡部職員（地域交流課）	TJUP会員校・自治体会員・事業者等会員による全体会（オンライン）
11月21日	第64回TJUP幹事会	照沼課長（地域交流課）	定例会議（オンライン）
11月29日	第63回TJUP運営協議会	照沼課長（地域交流課） 渡部職員（地域交流課）	定例会議（オンライン）
12月1日	TJUP教育文化支援講座 「音楽を楽しもう2024」	照沼課長（地域交流課） 渡部職員（地域交流課）	活性化対象地域の中学生を主対象とした教育文化支援講座として城西大学清光ホールにて音楽鑑賞会を開催
12月12日	第65回TJUP幹事会	照沼課長（地域交流課）	定例会議（オンライン）
12月20日	第64回TJUP運営協議会	塩月副学長 大森事務局長 大坂事務局次長 照沼課長（地域交流課） 渡部（地域交流課）	定例会議（オンライン）
12月25日	TJUPやさしい日本語研修会	照沼課長（地域交流課） 渡部職員（地域交流課）	「外国籍児童・生徒への就学支援事業」ボランティア学生育成を目的として、やさしい日本語研修会を実施

2. 本学教員が講師を務めた活動報告

1) 事業名：TJUP教育支援共催事業

テ ー マ：「親子食育講座 バナナうんちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」

講 師：マネジメント学部 生活環境マネジメント学科 石渡尚子 教授及び同学科学生4名

日 時：2024年2月17日（土）10：30～12：00

場 所：和光市南公民館

小学校低学年のうちから体の仕組みを知り、正しい生活習慣と生活リズムを身に着けることを目的として事業を行った。今回は「健康管理能力検定2級」および講師実技試験に合格した学生講師が中心となり、腸の長さを実感してもらうためのロープや、腸の活性化を促すダンスなどを取り入れて、楽しく「早寝早起き朝ごはん」の大切さを子供たちに伝えるための工夫を凝らした講義を実施した。また保護者に対しても、家庭での生活習慣作りの重要性を理解してもらうため、石渡教授によるレクチャーを合わせて実施した。

2) 事業名：TJUP公開講座「武蔵国の19校を通じて埼玉の大学を知る2024～名物先生大集合！～」

テ ー マ：マンガ研究のおもしろさをジェンダーの視点から考える！

講 師：文学部 現代文化表現学科 西原麻里 准教授

公開期間：2024年9月3日～11月4日

実施方法：YouTube オンデマンド公開講座

TJUP会員校19校がそれぞれの専門性を活かし、名物教員の研究を分かりやすく紹介することで、

気軽に埼玉の大学を知ってもらうことを目的として実施した。より気軽に、多くの方に参加してもらえようYouTubeにてオンデマンド形式で実施した。

本学が提供した講座は、全15講座の中で申込者数トップの人気講座となった。受講者からも「普段何気なく読んでいたマンガも、様々な視点で見ることができると知り大変興味深かった」という声が聞かれた。

3) 事業名：TJUP 公開講座「魅力発見！ 埼玉～埼玉東上地域の大学を知る～」

テ ー マ：SDGsとその先の未来

講 師：マネジメント学部 生活環境マネジメント学科 安藤生大 教授

日 時：2024年9月7日(土) 13:00～14:30

場 所：跡見学園女子大学 新座キャンパス

TJUP会員校19校が、それぞれの専門性を活かし、特定地域を中心とした埼玉県内の地域住民に向けリレー形式での講座を開催した。今回は会員校のことをより身近に感じてもらえるように、各大学の魅力を伝えることをテーマに実施した。

本学が実施した講座は、SDGsの成り立ち、世間で急速な広がりをみせた背景、そして2030年以降の展開について解説した。さらに、具体的な方法論として期待されている「サーキュラーエコノミー」について触れ、いくつかのビジネスモデルの紹介をおこなった。受講者からは「未来のカーボンニュートラル社会の実現について考えるきっかけになった」との声が寄せられた。

4) 事業名：TJUP主催「大学・短期大学教職員のFD・SD研修プログラム」

テ ー マ：跡見学園女子大学の地域交流活動の展開と事例紹介

講 師：塩月亮子 副学長・土居洋平 地域交流センター長

公開期間：2024年9月9日～11月30日

実施方法：YouTube オンデマンド形式

各校での取り組みや教職員の専門分野などをオンデマンド形式でのFD・SD研修プログラムとして用意し、TJUP会員校教職員の能力開発につなげることを目的として実施した。

各校の取組事例をもとに会員校同士がよい刺激を受けて学べる機会となり、オンデマンド形式であったことから利便性も含め前向きな回答が多く寄せられた。

3. 教育連携委員会の活動と今後の展開について

高等教育機関である大学は、地域経済・社会を支える地域の「核」として、地域ニーズを踏まえた質の高い高等教育の機会を提供し地域人材を育成する役割を担っている。TJUP中長期計画では「自大学の学生への教育だけではなく、社会人受け入れの推進、生涯学習機能など、社会連携・地域貢献の観点からも地域における教育活動に積極的に関わり、教育研究のみならず地域課題解決や産業の活性化を目指す」と謳っている。

本学が所属する教育連携委員会では、地域の若年層への教育支援のほか、社会人対象教育プログラ

ムの実施や、社会人教育・専門教育のニーズ調査を行い、地域の社会人に対する教育支援を推進するための様々な施策に取り組んでおり、令和6年度は本学が委員長校を務めた。

令和6年度はTJUP教育支援事業「外国籍児童生徒日本語学習支援プログラム（東松山モデル）」⁽¹⁾から着想を得て、埼玉県内でも急増する外国人労働者の雇用において企業がどのような教育プログラムを必要としているか、ニーズ調査（アンケート調査）を実施し、TJUPとしてどのような支援ができるのか検討を行った。その結果、最大の課題となっているのは外国人労働者の日本語能力の不足と、それによる社内でのコミュニケーションの問題であること、さらには外国人労働者本人に対する支援と同時に受け入れ側の日本人従業員に対する教育も必要とされていることがわかった。超少子高齢化に伴い、今後ますます加速する深刻な人手不足を補うためにも、貴重な戦力となる外国人労働者の受入れに際し、企業側でも外国人労働者がその能力を十分に発揮できるような受入れ体制を整えることは必須となっている。そこで、まずは「やさしい日本語研修会」をTJUP内で実施することとなった。外国人労働者だけが日本語習得に向けて努力するのではなく、周囲の日本人が「外国人にわかりやすい表現の日本語」を意識して使うことで、よりコミュニケーションを深める手法を学ぶための研修会である。

将来的にはこれを発展させ、各大学共通のリカレント教育プログラムや社会人向け講座・共通科目の開発に繋げていくことが想定されており、今回のニーズ調査および「やさしい日本語研修会」の実施はその第一歩となった。TJUPでは今後も多様な新しい教育を提供し、自治体、企業と連携して活性化対象地域が抱える課題の解決に寄与することを目指している。

注

(1) TJUP教育支援事業「東松山モデル」

東松山市教育委員会より、外国籍児童生徒の転入に際し支援を行うボランティアの派遣要請があり、TJUPとして支援を行っているもの。会員校の学生からボランティア（主に外国人留学生）を募り、身振り手振りを交えながら自身の日本語習得経験やノウハウを活かして日本語を教えるとともに、支援対象児童生徒の疑問や質問に対して適宜アドバイスをするなど、学校での生活上当面必要となる日本語の習得に向けたきめ細やかなサポートが行なわれている。

跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について

—2024年度の活動状況と課題の分析—

川副早央里

1. はじめに

本稿の目的は、今年度の跡見学園女子大学における地域交流活動の現状を明らかにすることにある。跡見学園女子大学地域交流センターでは、2019年度以降、毎年専任教員を対象として「地域交流関連活動に関わる調査」を実施し、学内の全学的な地域交流活動の実態を調査してきている。

2020年春頃から流行し始めた新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2020年度以降は地域交流活動数が減少していたが（金子2020、新垣2021、2022）、2022年度ころから「回復」の兆しが見られるようになり（新垣2023）、2023年5月には新型コロナウイルス感染症が第5類に移行されると、社会全体で社会・経済活動が再開され地域交流活動も同じように活性化した。2024年度においては、コロナ禍の影響はほとんど見られなくなっている。

本稿では、まず今年度実施した「2024年度地域交流関連活動に関わる調査」の概要を確認したうえで、調査結果をもとに今年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の状況と課題を経年変化とともに考察する。

2. 調査の概要

今年度実施した「2024年度学内の地域交流関連活動に関わる調査」は、学内情報システムである「Atomi Information Portal」の掲示登録機能を使用し、跡見学園女子大学全学部に所属する専任教員105名を対象に、2024年6月26日から7月31日に全数調査として実施した。

実施に際しては、Microsoft Formsを利用したインターネット上のアンケート調査を行った。調査では、まず「2024年度実施中・実施予定の地域交流活動の有無」を尋ね、そうした活動が「ある」と回答した場合には、「活動名称」「活動時期」「活動場所」「交流先組織」「助成の有無」「実施体制」「参加学生の数」「活動関係者の数」「課題」「工夫」「広報等の協力可否」「大学・地域交流センターへの要望」について尋ねた。

調査の結果、回答者数は44名（回答率42%）で、そのうち「2024年度実施中・実施予定の地域交流活動」があると回答した教員は19名であった。一人の教員が複数の活動を行っている場合もあり、回答教員数を上回る33件の活動報告があった。

本調査の回収率は42%に留まっており、活動の有無に関わらず、半数以上の教員からは回答を得られておらず、本調査の学内的な認知が低いことが明らかとなった。この調査が学内で行われている地域交流活動を把握するために開始されたことを鑑みると、この結果は調査の目的が十分果たされているとはいえない状況である。次節以降に考察する今年度の本学の地域交流活動の現状は、あくまで今回の調査で報告された活動に基づく分析であることに留意が必要である。

3. 2024年度の地域交流活動とその特徴

(1) 2024年度の地域交流活動

今回の調査で今年度実施されている地域交流活動として報告されたのは33件であった。具体的には、以下の表1に記載する通りである。

表1 2024年度の地域交流活動一覧

主な活動場所	活動名称	活動概要	活動時期	実施体制
文京区内	文京区エリアスタディ (社会調査実習)	観光コミュニティ学部社会調査士課程科目の「社会調査実習」(通年授業)佐野クラスでは、毎年、調査対象地域を文京区に設定、各年度の調査テーマに応じて、町会ほか、諸団体、事業所等の協力を得て、社会調査を実施している。年度末には調査協力者・団体等には社会調査実習成果報告書を配布するとともに、報告会を開催している。本年度の調査テーマは「地域の防災コミュニティ」。	4月から翌3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	文京区防災フェスタ への出展	東京都文京区防災課が主催する防災フェスタに、ゼミ3年生が参加する。「フェーズフリー」の考え方を来場者に啓発することを目的に、割り当てていただいたブースで研究結果の展示を行う。	2024年10月から 12月	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	文京区主催「ハッピー ベジタブルフェスタ 2024」出展	文京区民の野菜摂取量の向上を目指す	～9/25	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	文京シビックホール主 催 牧阿佐美バレエ団 『ロミオとジュリエット』公演前鑑賞講座、 およびバックステージ ツアー	講座講師、バックステージツアー案内	2024年6月29日	課外活動 (学科・サークルな ど)
文京区内	文京まちたいわとの 連携プロジェクト	文京区のまちづくり有志の活動との連携した取組を進め、都市部におけるまちづくり・コミュニティデザインの一端を体感するとともに、文京区内でのまちづくりネットワークの深化に貢献する。	2024年4月～ 2025年3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	文京ユネスコとの連 携活動	文京ユネスコの設立から活動立案・実施に関わることで、まちづくり活動の実践をその初動から学ぶとともに、文京エリアでのまちづくり活動に貢献する。	2024年8月～ 2025年3月	課外活動 (学生一般募集あり)
文京区内	行こうよ!文京浴場♨ ～学生プロジェクト～	“文京浴場組合”に加盟する4つの銭湯を中心に、周辺町会と連携した地域交流、子ども向けのイベント開催などを通じて、文京区の古き良き文化を盛り上げるプロジェクト。	3月、9月、10月 に大きなイベント を開催しており、 それに向けた活動 や地域との連携活 動を一年を通じて 活動している。	課外活動 (学生一般募集あり)
文京区内	跡見「学芸員」in 菊坂	菊坂跡見塾(旧伊勢屋質店)では、本学の有志学生で構成する跡見「学芸員」in 菊坂のメンバーで企画展、防災イベント、保育園との連携イベントを開催するほか、質屋に残る民具の調査や質物台帳の翻刻調査などを一年を通して行っている。	大きな企画展を11 月ごろ、防災イベ ントを1月に開催 しているが、各種 イベント開催や調 査、地域活動への 参加などを一年を 通して行っている。	課外活動 (学生一般募集あり)

主な活動場所	活動名称	活動概要	活動時期	実施体制
東京都内 (文京区外)	「クイーンズ伊勢丹」 との産学連携による 商品開発【第2弾】	昨年度に続き、高品位スーパー「クイーンズ伊勢丹」を中心にフードビジネスを展開する㈱エムアイフーズスタイル（三越伊勢丹グループ）と産学連携プロジェクトを実施する。学生は、クイーンズ伊勢丹のプライベート商品となる新たな食品の開発と販売促進活動を行う。	～2025年2月末	ゼミ・授業等 正規教育活動
東京都内 (文京区外)	小学校での食育出張 授業「バナナうんち で元気な子！～生活 リズムを整えよう～」	特定非営利活動法人 日本成人病予防協会では小学校低学年の生徒に健康的な排便習慣につながる食生活や運動の大切さを伝えるため、出張授業に取り組んでいる。この大学生講師になるため、「健康管理能力検定2級（後援：文部科学省）」の試験および講師実技試験に合格後、一定の研修期間を経て、都内小学校で出張授業を実施する	～2025年2月上旬	ゼミ・授業等正規 教育活動
東京都内 (文京区外)	スミファ（すみだファ クトリー巡り）のSNS 広報	墨田区のオープンファクトリーであるスミファ（11月開催）の参加企業を取材し、インスタグラムなどのSNSにてPRする役目をゼミ生が担う。イベントそのものの広報はもちろんのこと、小規模・零細企業の参加者が苦手なSNS広報を学生が担うことで、企業のPRにもつながる。	8月～11月末	ゼミ生（3年生） の有志
東京都内 (文京区外)	跡見ひきこもり等 地域支援事業	豊島区等で活動を展開するサンカクシャ等のひきこもり等地域支援団体との協同事業である。2019年3月より開始された「文京区ひきこもり等支援者連絡会」で検討を重ねてきた。「コミュニティ心理学」をテーマとした3・4年の板東ゼミ生を中心に、希望者が参加する。	主に水・木・土の 午後	ゼミ・授業等 正規教育活動
新座市内	新座市社会教育委員	新座市の教育活動全般において、新座市教育長及び教育委員会より説明を受け助言・指導等を行う。 埼玉県の社会教育委員としての研修活動に参加する。	年複数回の委員会 を実施	
新座市内	新座市就学支援委員 会 就学前相談 就 学相談 巡回カウン セラー（小中学校） NPO 法人 サンカク シャ		通年	教員のみの活動
埼玉県内 (新座市外)	和光市自立支援協議会	自立支援協議会は、「障害者が地域で当たり前のように生活できる」支援体制を整えるため、個別の相談支援の事例を通じて明らかになった地域の課題を共有し、その課題の解決に向けた取組みについて協議する場である。	令和6年4月～ 令和7年3月	教員のみの活動
埼玉県内 (新座市外)	インクルーシブ公園 の運営	埼玉県三郷市と共同開発したインクルーシブ公園「なかよしひろば」を、その設置目的通り、障害の有無を超えて様々な子どもたちに利用してもらえるようにするにはどうしたらよいか、検討することが目的。イベントを開催し、イベント時の遊び方観察や参加者の感想把握を通して、効果を分析する。	2024年7月～ 2024年11月	アカデミックイン ターンシップに おける課題解決型 実習
埼玉県内 (新座市外)	三郷市男女共同参画 審議会	委員として、三郷市男女共同参画審議会に出席する。	審議会の開催は年 2～3回。	教員のみの活動
埼玉県内 (新座市外)	鶴ヶ島市男女共同参 画推進委員会	委員として委員会に出席する。	委員会の開催は年 3～4回程度。	教員のみの活動
埼玉県内 (新座市外)	埼玉県性の多様性に 関する施策推進会議	委員として会議に出席する。	会議の開催は年2 ～3回程度。	教員のみの活動
埼玉県内 (新座市外)	和光市男女共同参画 アドバイザー	市民の公募により委嘱された「男女共同参画わこうプラン推進委員」（定員4名）による男女共同参画情報紙「おるご～る」（年1回、3月発行）の編集会議（年7回開催）に出席し、アドバイスをする。	「おるご～る」の 編集会議は年7回 開催。5月に第1 回の編集会議があ り、年度末の3月 の発行に向けて活 動する。	教員のみの活動

主な活動場所	活動名称	活動概要	活動時期	実施体制
埼玉県内 (新座市外)	富士見市 子ども文化芸術大学☆ふじみ	「富士見市 子ども文化芸術大学☆ふじみ」2024年度の活動として、第5回「マンガの技法を体験しよう!」というワークショップを担当する。富士見市の小学生20名程度が参加する予定で、マンガというメディアの特徴を学び、マンガの技法を活用した小さな作品制作をおこなう。そのために、本学西原のゼミ生5名に手伝っていただく。	2024年8月31日 (土) 10時～12時	教員+ゼミ生5名
埼玉県内 (新座市外)	在日クルド人向け日本語ボランティア	埼玉県在住の在日クルド人と直接交流することで、多文化共生に関する気付きを得させることを目的として実施した。	2024/7/21	課外活動 (学科・サークルなど)
埼玉県内 (新座市外)	みんなのわこらぼまつり協力	和光市役所が主導し、市民が中心となつて行う「みんなのわこらぼまつり」の運営に参加し、まちづくりを実践しながら、まちづくりへの理解を深め、また、実際のまちづくりに貢献する。	2024年2月～5月、 2025年2月～5月	課外活動 (学生一般募集あり)
北海道 上富良野町	かみふらの十勝岳観光協会との連携活動	上富良野町の地域活性化に向けて、地域情報の発達や地域に即したイベント等のあり方について、具体的な活動を通して実践的に学ぶ。	令和6年度 (昨年度より継続)	ゼミ・授業等 正規教育活動
静岡県 東伊豆町	静岡県東伊豆町地域活性化プロジェクト	静岡県東伊豆町における観光を通じた地域活性化事業。	2024年4月～ 2025年3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
千葉県 習志野市	障害福祉サービス事業所におけるボランティア活動	地域社会と障害のある人々の関係について学ぶために、障害福祉サービス事業所のイベントでボランティアをおこなう。	2024年4月	ゼミ・授業等 正規教育活動
神奈川県 大和市	NPO法人日本ファンクショナルタッチペアレナティング協会	身体接触研究をもとに作成した親子関係支援プログラム「FTP」を用いた子育て支援を目的とした団体。令和6年度は、保育園への保育コンサルティングと保育カウンセリングを開始。そのほか、心理職や保育士向けの研修やスーパーバイズをおこなう。	令和3年5月～ 現在	教員のみの活動
新潟県 胎内市	新潟県胎内市での観光による地域活性化提案	基礎ゼミナール学外実習において、3泊4日でのフィールドワークを実施するとともに滞在プランやSNS発信のアイデア提案を実施。	2024年9月	ゼミ・授業等 正規教育活動
山形県 西村山郡 西川町大井沢	山形県西村山郡西川町大井沢地区における農山漁村イノベーション推進事業への協力	山形県の山村エリア・西川町大井沢での3年間の農水省補助事業への協力プロジェクト。今年度は2年目の実証事業への協力を行う。具体的には、実証事業として実施されるイベントの運営、その関連の情報発信及び効果検証への協力を行う。	2023年4月～ 2026年3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
岩手県 盛岡市	盛岡市 文京区学生と創るアグリイノベーション事業	盛岡市の農業振興を目的に、若手農業者(特に女性)のグループ化の現状と可能性を調査するとともに、実際の畜産農家の若手メンバーとともに、グループ化や既存グループの活動促進に向けた活動を展開している。学生の交通費、宿泊費等について、盛岡市から助成を受けている。	令和6～8年度	ゼミ・授業等 正規教育活動
沖縄県 石垣市	石垣島白保集落の持続可能な地域づくり支援	石垣島白保集落の持続可能な地域づくりを推進するNPOが展開するスタディツアーの魅力向上に向けた検討、アドバイスを実施(現地訪問含む)。	2024年4月～ 2025年3月	教員のみの活動
神奈川県 横浜市	一般社団法人こどもみらい横浜	横浜市より業務委託を受け、横浜市の養子縁組家庭や里親家庭を支援する	平成26年4月～ 現在	教員のみの活動
静岡県 熱海市	熱海における宿泊施設の需要創出のための課題発見	2023年度に続き、2年生基礎ゼミナールの学外実習で、(株)東京ドームリゾートオペレーションズを窓口に、熱海温泉ホテル旅館協同組合青年部の方々とPBL形式でフィールドワーク、ワークショップ、企画提案を行っている。	2024年 9月10日～20日	ゼミ・授業等 正規教育活動

活動地域としては、「文京区」での活動が8件、「東京都内(文京区以外)」での活動が4件、「新座市」での活動が2件、「埼玉県(新座市以外)」での活動が9件、「その他」が10件であった。活動地域の分

布を見てみると、大学キャンパスが位置する文京区での活動が多い傾向が読み取れる。東京都内および埼玉県内を合わせると23件であり、神奈川や千葉県も加えると26件に上り、全体の約8割が関東圏での活動となっている。しかし、「その他」に含まれる地域を見ると、北海道から沖縄に至るまで全国的に地域交流活動が展開していることが明らかとなった。

(2) 今年度の地域交流活動の特徴

今回の調査で尋ねた調査項目のうち、ここでは「地域交流活動の交流先担当部署・組織」「補助・助成の有無」「活動に関係する人数の規模」に関する回答結果を確認しよう。

まず、「交流先担当部署・組織」(有効回答32件、複数回答可)については、「地方公共団体」(13件)が最も多く、「企業」「NPO法人」が5件、「町会や自治会」「有志まちづくり団体等」「一般社団法人(観光協会等)」が3件、「社会福祉法人(社会福祉団体や保育園等)」「小学校」「中学校」「NGO」がそれぞれ1件となっている。回答のあった32件のうち7件の活動では、NPO法人と小学校、地方公共団体と町会・自治会など、複数の組織とともに地域交流を行っていた。地方公共団体との連携が最も多いことは昨年と同様であり、昨年度の調査結果とはあまり変化は見られないが、強いて言えば、地方公共団体以外の多様な主体と連携する傾向がわずかに高まったこと、特にNPO法人との連携件数が増加したことが特徴として挙げられる。

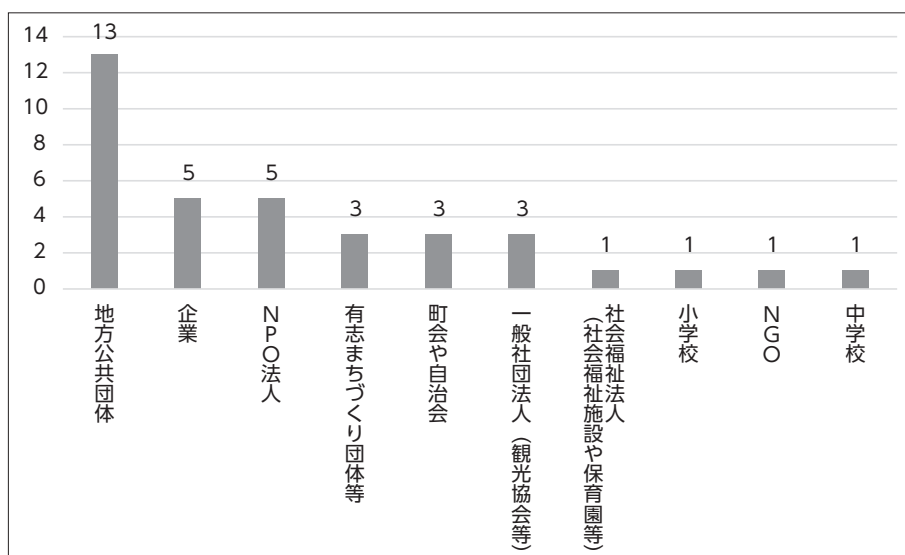


図1 地域交流活動の交流先担当部署・組織(複数回答可)

地域交流活動の「補助・助成の有無」(有効回答33件)については、図2の通りの回答であった。補助・助成が「ある」と回答したのは8件(24%)、「なし」と回答したのは25件(76%)であり、補助や助成がないなかで行われている活動のほうが多いことが分かった。しかし、昨年度の調査では補助・助成があるとの回答が13%であったことと比較をすれば、今年度は11ポイント増加しており、活動資金を獲得して地域交流が行う割合が増加したとみることができる。

次に、「活動に関係する人数の規模」(有効回答31件)について確認すると、最も多い「21～50名」

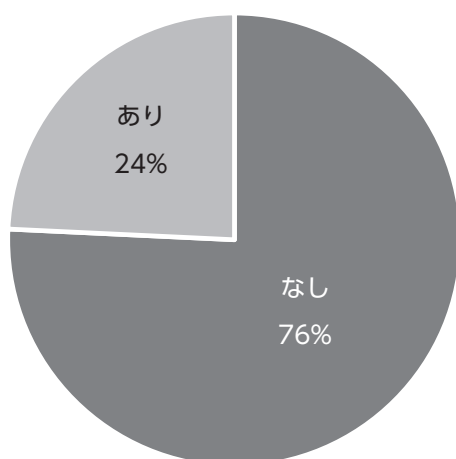


図2 補助・助成の有無

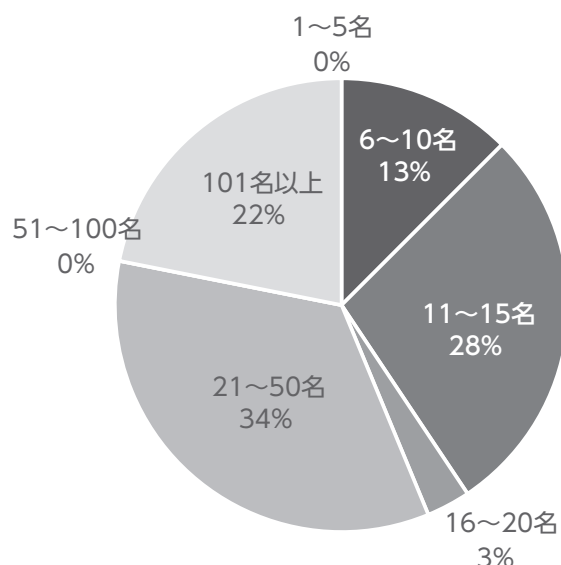


図3 活動に関係する人数の規模

が11件（34%）であり、続いて「11～15名」が9件（28%）、「101名以上」が7件（22%）、「6～10名」が4件（13%）、「16～20名」が1件（3%）となっている。全体の傾向をみると、約8割が「21名以上」の活動であり、「101名以上」の活動が全体の約2割を占めていることから、比較的規模の大きな交流活動が行われていることが分かった。

今年度の特徴を検討するために、これまでの本学における地域交流活動数および活動地域の推移を確認しよう。初回の調査が実施された2019年度以降の調査結果を並べると図4の通りとなる。活動数については、新型コロナウイルス感染拡大があった2020年度および2021年度は減少し、2022年度には回復傾向がみられたが（新垣2023）、今年度は昨年度とほぼ横ばいで推移している。

活動地域については、「文京・東京」「新座・埼玉」「その他」に分類して推移を検討した。その結果、2019年度から2021年度までは、全体の活動数が減少したことに伴って、すべての地域カテゴリーにおいて減少しているが、その後2022年度以降は、それぞれのカテゴリーで少しずつ異なる傾向がみられる。「文京・東京」は、2021年度以降も活動数にほぼ変化はない。「新座・埼玉」は、2021年度から2022年度にかけて2倍以上に増加し、少し減少したものの今年度に至るまでほぼ同じ水準で推移している。他方、「その他」は、調査を開始した2019年度以降、2020年度に一時的に微増したが、全体的な傾向としては活動数の減少が続いている。

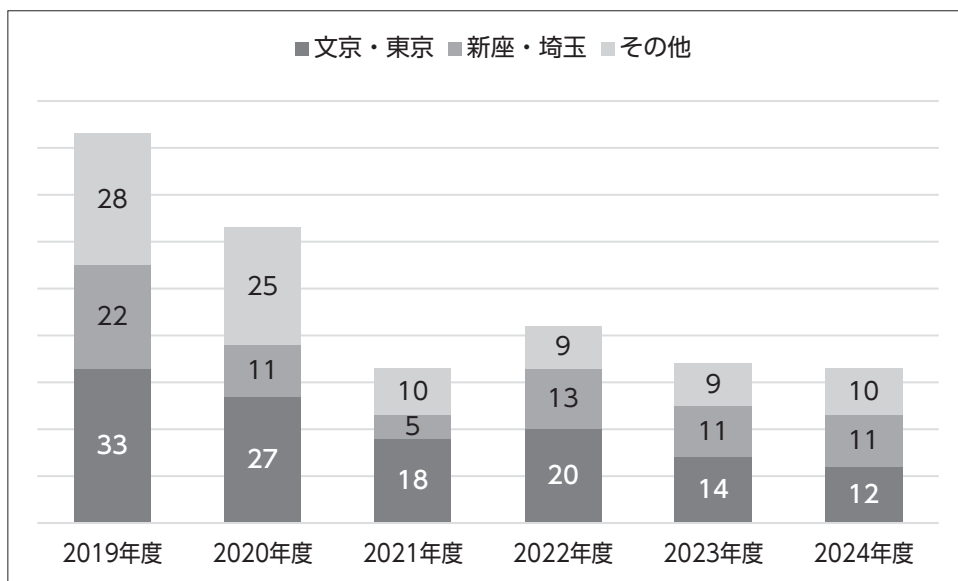


図4 2019年度～2024年度の地域交流活動の件数の推移

(出典) 金子2020：12、新垣2021：46-68、新垣2022：19、新垣2023：33、川副2024：28より作成

(3) 本学の地域交流活動の類型とその傾向

さらに、今年度報告された地域交流活動の傾向を検討するために、新垣（2020）の分類を参考にして、教員のみで活動する「教員限定型」と学生も活動する「学生参加型」、そして交流・連携先が行政である「行政共同型」とその他「企業・NPO・各種団体共同型」に区分して今年度の活動を類型化した（表1）。

類型の結果、「教員限定型」が9件であるのに対し、「学生参加型」は23件と多く報告されていることが明らかとなった。そのうち16件の活動が「ゼミ・実習活動」の一環として行われており、つまり正課授業の一環として実施されている活動が多いことになる。他方で、「学生参加型」の「有志・課外活動」として行われている活動は7件に留まっている。

先述したように具体的な連携先として最も多いのは行政であるが、「行政共同型」とそれ以外の「企業・NPO・各種団体共同型」で分類すると、「行政共同型」（13件）よりも「企業・NPO・各種団体共同型」（19件）のほうが多い結果となった。ただし、「教員限定型」の活動においては、「企業・NPO・各種団体共同型」（3件）よりも「行政共同型」（6件）のほうが多く、各教員の専門性に基づいた委員会参加などの社会貢献的な地域交流・連携が多く含まれているようである。

表1 2024年度の地域交流活動の分類

	行政共同型 (13件)	企業・NPO・各種団体共同型 (19件)
教員限定型 (9件)	●鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会 ●埼玉県性の多様性に関する施策推進会議 ●和光市自立支援協議会 ●三郷市男女共同参画審議会 ●和光市男女共同参画アドバイザー ●新座市就学支援委員会 就学前相談 就学相談 巡回カウンセラー (小中学校) NPO法人サンカクシャ	●一般社団法人こどもみらい横浜 ●NPO法人日本ファンクショナルタッチペアレンティング協会 ●石垣島白保集落の持続可能な地域づくり支援

学生参加型 (23件)	ゼミ・実習活動 (16件)	●文京区エリアスタディ（社会調査実習） ●静岡県東伊豆町地域活性化プロジェクト ●文京区防災フェスタへの出展 ●インクルーシブ公園の運営 ●文京区主催「ハッピーベジタブルフェスタ2024」出展 ●富士見市 子ども文化芸術大学☆ふじみ ●盛岡市 文京区学生と創るアグリノベーション事業	●文京まちたいわとの連携プロジェクト ●山形県西村山郡西川町大井沢地区における農山漁村イノベーション推進事業への協力 ●障害福祉サービス事業所におけるボランティア活動 ●「クイーンズ伊勢丹」との産学連携による商品開発【第2弾】 ●熱海における宿泊施設の需要創出のための課題発見 ●かみふらの十勝岳観光協会との連携活動 ●新潟県胎内市での観光による地域活性化提案 ●小学校での食育出張授業「バナナうんちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」 ●跡見ひきこもり等地域支援事業
	有志・課外活動 (7件)		●文京ユネスコとの連携活動 ●跡見「学芸員」in 菊坂 ●行こうよ！文京浴場～学生プロジェクト～ ●みんなのわこらぼまつり協力 ●スミファ（すみだファクトリー巡り）のSNS広報 ●在日クルド人向け日本語ボランティア ●文京シビックホール主催 牧阿佐美バレエ団「ロミオとジュリエット」公演前鑑賞講座、およびバックステージツアー

（4）地域交流活動における課題と求める支援

最後に、自由記述の回答から、今後さらに地域交流を深め広げていくための課題と求められる支援について確認しよう。

①地域交流活動で直面している課題

「本地域交流活動を実施するにあたって直面している・想定される問題」として挙げられたのは、大きく分けると「費用負担」、「両立の難しさ」、「メンバーの確保」であった。

「費用負担」については、現地への交通費や昼食代を学生自身が負担している活動もあるようで、その費用負担が活動継続上の課題となっているという報告が最も多かった。図2で示したように、補助金等の金銭的支援がない活動が多いのが実態である。特に正課授業の一環として行う場合には心配であるという声が挙げられた。今後、活動の継続や開始をする際には、こうした点への配慮が求められる。

「両立の難しさ」については、学生の学業との両立、教員の大学業務との両立の両方が含まれていた。活動が活発になることは望ましい反面、本来の学業や大学業務との両立は困難となる。教員の場合には大学での役割や業務が増えると活動を続けられなくなる恐れがあるとの意見もあった。

「メンバーの確保」については、リーダーを含め一部の学生への負担が大きいこと、やりたい人のみ参加しており他の学生が強制で参加するわけではないこと、ゼミ生が減少する中で活動維持が困難であることなどが課題として挙げられた。

そのほか、イベント実施時の感染症対策、活動に使う道具や展示物の作成・保管スペースの確保、活動における利用者との距離感、参加学生へのノウハウの伝達などが問題として挙げられた。

②地域交流活動における工夫

上記の課題に対して、各教員が行っている工夫についても紹介しよう。大きく分けると、「活動の効

率化」と「連携先との関係構築」に分けられる。

「活動の効率化」に含まれる工夫としては、例えば「グループづくり」がある。問題を個人で抱えず仲間と相談・協力できるように活動しているケースや、継続的に行う活動にローテーションで参加しているケースなどがあった。また、交流・連携先との打ち合わせでメールやオンライン会議を活用するなど、効率的に取り組むよう連絡方法を工夫しているケースもあった。

このように効率的に交流活動を行うことは活動継続上は重要な視点であるが、他方では、やはり「連携先との関係構築」に注意して行う必要がある。単なる調べ学習で終わらせないように、社会貢献できるように活動内容を検討したり、積極的に連携先にフィードバックを行ったり、「利用者や連携先の視点」を持つように心がけているという声は複数あった。また、コロナ禍を経てオンラインも活用すると同時に、対面での打ち合わせを複数回行い交流を深めたり、連携を密にして先方のニーズと学生のニーズのマッチングを図っていたり、丁寧に相手先との関係構築を行うという工夫も複数の教員から挙げられた。ほかには、「楽しむこと」を学生に伝えたり、毎年の活動を丁寧かつ誠実に行うなど、活動時の心掛けに関する工夫もあった。

長年継続している活動においては、「テーマの重複を避ける」「テーマを発展させる」といった回答もあった。

③地域交流センターに求める支援

上記のような課題と工夫があるなかで、「大学または地域交流センターへの要望」として挙げられたのは、イベント時に必要となる物品を交流するための費用や、学生の旅費・交通費、食事代の支援など、「財政的支援」が最も多かった。そのほかには、地域交流センターのSNSで活動を紹介する、学生への周知といった「広報の支援」や、イベントで使用する「配布物の印刷」などが挙げられた。

4. おわりに

本稿では、2024年度に実施した「地域交流関連活動に関わる調査」の結果をもとに、今年度の大学の地域交流活動の実態とその特徴について検討してきた。

全体の活動数は減少する傾向が見られたが、文京区を中心とする関東圏での活動数はそれほど変化なく推移してきている。また、調査で報告された活動についても、昨年度の結果と比較すると概して活動実態としては大きな変化は見られず、安定して展開されているようである。

そうした現在展開中の活動をさらに発展させていくためには、調査で得られた具体的な課題の解決を図ることはもちろんであるが、それぞれの活動において抱える課題や取り組んでいる工夫などについて、活動参加者同士や学内関連部署とも共有するための機会を設けることも効果的かもしれない。

しかし、冒頭で言及したように、今回の分析結果はあくまで今年度の調査で得られた44名（回収率42%）の回答に基づいたものであることに留意が必要であろう。調査のこれまでの回収率を見ると、2019年度が60%（金子2020）、2020年度が58%（新垣2021）、2021年度が27%（新垣2022）、2022年度が56%（新垣2023）、2023年度が（川副2024）41%であり、回答率が低下傾向にあることに加え、半数以上の教員からの回答を得られていない状況である。さらに、今年度の調査回答者は

昨年度の回答者とほぼ重なっているのが実態である。地域交流センターで日々扱っている地域活動の状況からすると、調査で報告された活動数よりも実際にはさらに多くの地域交流が展開されている印象があり、まだまだ把握できていない地域交流活動があると思われる。

今後さらに多くの地域交流活動を発掘し、より詳細な実態分析を行うためには、本調査の存在を学内で周知徹底するとともに、本センターとして想定する地域交流活動を明確に提示して、回答しやすい調査設計に改善することも必要である。そのうえで、本センターとしても学内で行われる地域交流を学内外に積極的に発信し、さらなる活性化に向けた支援を検討していきたい。

参考文献

- ・新垣夢乃、2021、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について―特に新型コロナウイルス感染症流行による影響に注目して―」『ゆかり』2、P.45-58.
- ・新垣夢乃、2022、「跡見学園女子大学の地域交流活動への新型コロナウイルス感染症流行の影響に関する分析」『ゆかり』3、P.18-21.
- ・新垣夢乃、2023、「跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について―コロナ禍3年目の現状分析」『ゆかり』3、P.29-36.
- ・金子祥之、2020、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状と課題―学内調査を通じた実態把握―」『ゆかり』1、P.10-17.
- ・川副早央里、2024、「跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について―アフターコロナにおける現状分析―」『ゆかり』5、P.23-30.

特集 2024年度の地域交流活動

跡見学園女子大学地域交流センター

地域交流センターでは、跡見学園女子大学内における地域交流活動の実施状況に関するアンケート調査を実施してきている。調査を開始した2019年度の地域交流活動は83件であったが、その後新型コロナウイルス感染症が拡大し始めた2020年度は63件と減少し、さらに2021年度は33件、2022年度は38件と、コロナ禍で地域交流活動が激減した状況があった。新型コロナウイルス感染症が第5類に移行し社会・経済活動が通常モードに戻り始めた2023年度の活動数も33件に留まり、数としてはそれほど変化はないが、休止状態であったさまざまな活動が再活性化した年であった。続く今年度も報告された活動数は同じく33件であったが、実施体制や条件などはコロナ禍前とほぼ同じ水準に戻り、盛んな地域交流活動が実施されている。

本特集では、今年度に本学で行われた地域交流活動のうち20本の活動報告を担当教員や参加した学生に執筆していただいた。具体的にどのような地域交流活動が行われているのかをご覧ください。

インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究 —障害児と健常児が一緒に遊べる空間を目指して—

赤松瑞枝

1. はじめに

本学と2017年に相互協力に関する包括協定を結んだ埼玉県三郷市に2023年3月、県内初のインクルーシブ公園「なかよし ひろば」⁽¹⁾(以降、「ひろば」と記述)が開園した。筆者及びゼミ生も共同研究者として携わった⁽²⁾。そして整備コンセプトである「障がいの有無に関わらず、全ての子どもたちが分け隔てなく、共に遊べる」の実現に向けて、昨年度に引き続き交流イベントを実施したので報告する。

2. 「なかよし ひろば」における交流イベント

2-1. イベント開催までの準備

交流イベントは、2024年度のアカデミックインターンシップ課題として実施した。5日間の対面課題解決型インターンシップであり、赤松ゼミ2年生4名が三郷市みどり公園課の担当者の指導のもと、実習を行った。

実施に先立ち、学生は「ひろば」設立経緯の説明を受けたり、現地見学を行った。昨年度の反省点を踏まえ、障害児と健常児が仲良くなる機会を作った上で、「ひろば」で遊ぶ流れになるように留意して、イベント案を作成。担当者からの指摘を踏まえて改良を重ねた結果、健常児親子と障害児親子がペアになってスタンプラリーと宝探しに参加し、その後自由に遊ぶことになった(図1)。スタンプは「ひろば」内に1箇所、隣接するインター南中央公園内に3箇所、合計4箇所設置。学生が考案したクイズに回答したり、お互いにじゃんけんをしたり、指定された楽器遊具を叩いたり、みどり公園課職員扮するスタンプマンを探し出すとシートに押印してもらえ、全てのスタンプを集めると受付で景品(三郷市のマスコットキャラクターが描かれたハンドタオルやクリアファイル)と交換できる。宝探しは「ひろば」内の様々な場所に設置した野球ボール大のカラーボールを、見つけて受付に持参すると、シールと交換できる。

今年度は三郷市民に対してイベントの開催告知をして参加者を募ることとし、三郷市の公式HPやXに掲載する告知文章や応募フォームを学生が作成した。また参加者に「ひろば」のコンセプトを理解してもらうために紹介動画を視聴してもらうこととし、1分程度の動画を作成した⁽³⁾。

2-2. 当日の様子

イベントは2024年10月16日に実施した。参加者は表1の通りである。障害児親子については上記の応募フォームへのリアクションがなかったため、市内の児童発達支援施設に市役所経由で依頼し、利用児及びその支援者が参加した。障害の程度を考慮し支援者とも相談して事前に作成したペアを受付で伝え、学生によるルール説明の後、スタンプラリーを開始した。学生はそれぞれのスタンプ設置場

所でクイズ等の出題や押印を行い、筆者や市役所職員は参加者の様子を観察した。いずれのペアも楽しそうに参加しており、健常児も障害児も協力してクイズに回答したりじゃんけんをしたりしていた。スタンプ設置場所はそれぞれ離れているので、移動している最中にも言葉を掛け合う様子も観察された。健常児の保護者と障害児の支援者も積極的にコミュニケーションを取っていた(写真1、写真2)。その後の宝探しもペアで協力して行い、ペア間で発見したボールの数を競う様子もみられた。最後の自由遊びの時間帯ではペアを超えて、一緒に遊ぶ光景が観察された。なおイベント終了後に学生が報告記事を作成し、三郷市ホームページに掲載された。

表1 イベント参加者ペア

健常児の属性	障害児の属性
A (2歳と3ヶ月)	B (軽度知的 5歳)
C (2歳)	D (ADHD 4歳)
E (5歳)	F (軽度発達障害 5歳)
G (2歳)	H (軽度知的 ADHD 4歳)
I (2歳)	J (軽度知的 ADHD 5歳)

参加者の希望により、年齢と障害の種類のみ示す



図1 受付に設置したイベント紹介内容



写真1 スタンプラリーの様子(スタンプマン探し)



写真2 スタンプラリーの様子(クイズ)



写真3 自由遊びの様子

2-3. 実施後の振り返り

参加者アンケートの結果、すべての保護者及び支援者が本イベントを「非常に楽しめた」と評価した。特にスタンプラリーが好評であった。また障害の有無に関わらず、「日頃遊ぶ機会のないお子さんと一緒に遊んだことが貴重な経験だった」、「親子で楽しめて子どもが大喜びだった」、「イベントを通して子どもの成長を実感できた」との評価がなされており、健常児と障害児の遊びを通じた交流の意義を改めて確認できた。その後の自由時間にも、昨年に比べてスムーズに同じ遊具を使って一緒に遊んでいたことから、交流にあたっては協力して楽しめるイベントの実施が効果的であると言える。インターンシップ総括報告会においても、市役所の方々と学生及び筆者とでこうしたことを共有し、次年度以降も効果的な交流が図れるよう共同研究を継続させることを確認した。

3. おわりに

今回はイベントの趣旨に賛同した上で参加しているので、参加者同士のトラブルもなく企画への評価も一律に高かった。しかし日常的に「ひろば」を使用する際には、障害に対する理解が不足している者が利用し障害者とのトラブルが発生することもある⁽⁴⁾。障害児親子が一組も応募フォームから参加意思を表明しなかった事実は、「ひろば」が十分に認知されていなかったり、運営側が把握しきれていない不満や不便さが存在している可能性を示唆していると言える。

障害児やその保護者、支援者が安心して使用し、健常親子と楽しく交流できる空間にするために、イベント以外にも効果的と思われる啓発活動を検討・実施していくことも視野に入れ、研究を続けていきたい。

補注

- (1) 障害の有無に関わらず、あらゆる子どもが家族や友達などと安全に、安心して遊ぶことができるよう設計、整備された公園。
- (2) 詳細は地域交流センター年次報告書「ゆかり」4号にて報告した。
- (3) 春学期のゼミで赤松ゼミ生9名が3グループに分かれて3種類の動画を作成。その内容をみどり公園課職員に確認してもらい、それぞれの良い点を取り入れる形で再編集して完成させた。三郷市公式ホームページで公開されている。
- (4) 現時点でそのようなトラブル発生は報告されていない。

引用文献

- ・赤松瑞枝「インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究－アカデミックインターンシップにおける課題解決型学習を通して－」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』跡見学園女子大学地域交流センター、p.80-p.81、2023年3月
- ・三郷市「みんなで遊ぼう！ なかよしひろば イベント内容について」
https://www.city.misato.lg.jp/soshiki/machizukuri_suishin/midorikoen/midoriinfo/10826.html
(最終閲覧日 2025年1月6日)
- ・三郷市公式チャンネル「なかよしひろば紹介動画（作成：跡見学園女子大学）」
<https://www.youtube.com/watch?v=MzhOEvhQPZc> (最終閲覧日 2025年1月6日)
- ・三郷市「「みんなで遊ぼう！ なかよしひろば」を開催しました」
https://www.city.misato.lg.jp/soshiki/machizukuri_suishin/midorikoen/1/10980.html
(最終閲覧日 2025年1月6日)

謝辞

アカデミックインターンシップにて学生をご指導くださいました三郷市役所みどり公園課のみなさま、イベント運営にお力添えくださいました支援者のみなさま、イベントにご参加くださった市民のみなさまに、深謝申し上げます。

防災フェスタブース出展による研究成果報告 —継続研究ならではの困難を越えて—

赤松瑞枝

1. はじめに

赤松ゼミ3年生は2017年から文京区防災課が主催する防災フェスタに参加し、研究成果をブースにて発表している。8月の最終日曜日に開催された同フェスタでは、多くの企業や団体がブース出展を行い、防災に関する情報発信をすると共に、自衛隊や消防局等の協力のもと地域住民や来場者が防災訓練を行っていた。コロナ禍の中止及び規模縮小による再開を経て、2023年からは従前と同じような内容で実施されることとなった⁽¹⁾⁽²⁾。今年度のブース出展にあたっては、昨年度達成できなかった課題のクリアを目標に準備を行った。

2. 活動内容とその成果

2-1. 出展内容の検討

今年度も身の回りにあるものやサービスを、日常生活だけでなく非日常でも使えるようにデザインする「フェーズフリー」をテーマに調査研究を実施した。まず学生自身が定義、意義、実践例、認知度などを調査しながら理解を深めた。調査結果の共有の場において、「フェーズフリーという言葉は難しく聞こえるが、実は身近に該当する商品が多く存在し、無意識に使っている。そのことに気づいてもらうことが重要なのではないか」という指摘がなされ、ゼミ全体の賛同を得られたため、今回のテーマは「備えない防災?! フェーズフリー」とした。出展の枠組みは昨年と同様⁽³⁾となったが、300部作成して配布する三つ折りパンフレットは、ブースに来場して帰宅した時に振り返って再度学ぶためのツールという位置づけとし、身近なフェーズフリー商品(レインコート、レトルト商品、ラップ、キャリーケース等)や、関連する情報を盛り込み作成したすごろくと〇×クイズ、来場の感想を入力するアンケート

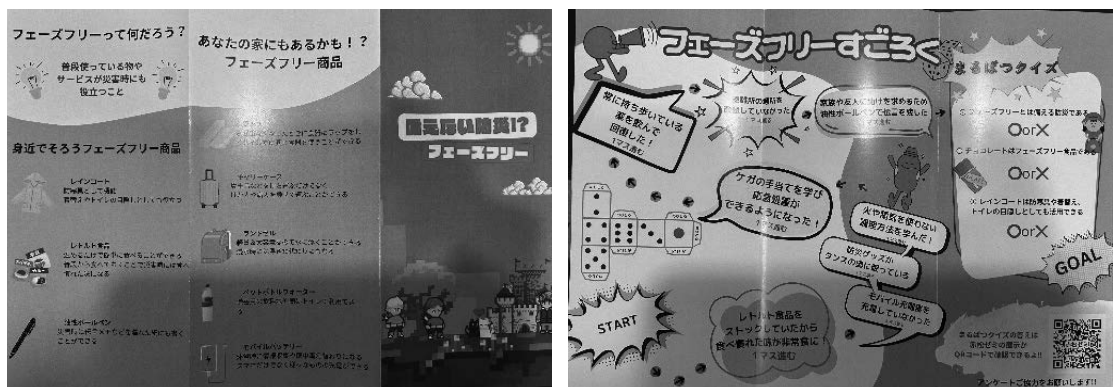


図1 作成・配布したパンフレット

フォームにアクセスできるQRコードを掲載した(図1)。また多くの来場が見込まれるため、パネル展示場所の混雑を避ける目的で、子ども向けの遊び場(射的、魚釣り、輪投げを手作り)も作成した。

2-2. 当日の様子

防災フェスタは2024年12月1日の10:00から14:00に文京区教育の森公園及びスポーツセンターにて開催された。ブース設営場所や周辺環境は、昨年同様であった。あまり広くないスペースを効率よく使用すべく試行錯誤した結果、部屋の入り口からすぐ認識できる場所に受付用の机を置き、その右側にパネル展示スペース、左側に遊び場スペースを設営した。また12名の学生がシフトを組み、受付での対応、パネル展示の説明、パンフレット配布とアンケート協力への声掛け、遊び場の運営を分担し、交替しながら行った。

今年度も多くの方にご来場いただき、順番待ちの列が廊下にまで広がる時間帯もあった(図2)。昨年度よりも100部多く準備したパンフレットもすべて配り終えた。遊び場も大好評で、子どもを遊ばせている間に展示を見たり学生と交流をしてくださる保護者の方が多くいらっしゃった。アンケートには40件の回答が寄せられ、いずれも「今回のイベントは楽しかった」と回答していた。フェーズフリーを「知らなかった」とするケースが33件と、未だ認知度が低いことが確認できた。とは言え、それらの回答者は今回の展示内容によって「詳しく知ることができた」「親子で楽しく学べた」としていた。さらに「このような学びの機会は貴重なので今後も続けてほしい」、「普段の生活が防災に結びついていることが分かり、無理なく実践できると思ったので取り組みたい」等の自由意見が寄せられ、学生たちの意図通りに啓発活動ができたと言える。



図2 出展ブースでの様子

2-3. 事後の振り返り

翌週のゼミにて、活動を振り返る機会を設けた。それらの意見交換を通して、学生たちも来場者とのコミュニケーションを楽しみ、自分たちの研究成果が役立つ達成感を実感したことが確認できた。他方、非常に多くのご来場をいただいた時間帯とシフトの交替の時間帯が重複し、仕事の引き継ぎがスムーズにいかなかった、子どもが遊んでいる様子が気になって展示内容に集中できていない方もいらっしゃったので、遊び場との設営場所を逆転させても良かった、アンケートの回答数が来場者数に比して少ないので、後半に実施した並んでいる間にQRコードを直接読み取ってもらう方式をはじめから導入すべきだった、景品のお菓子を想定以上に買い足して予算をオーバーしてしまったので工夫が

必要だったという反省点も示された。次年度の活動の参考としたい。

3. おわりに

約2か月間、9回のゼミで準備し当日を迎えた。先輩たちの取り組み実績がだいぶ積み上がってきたので、昨年実施できなかったことを確実にやり遂げることが大前提となり、さらに新規性のある研究の切り口を見出さなければならないという、継続研究ならではの難しさに直面することとなった。そのような中でも多くの情報を収集、分析し、12名での共有と自由闊達な話し合いを繰り返した結果、これまでには見られなかった角度から調査研究を行うことができた。「フェーズフリーって横文字で何だか分からないんじゃない?」。テーマとして当然のように扱っていた言葉に対するドキッとするような一言によって、「当たり前を疑う」という研究の本質に立ち戻ることができ、その結果、地域の方々からも「分かりやすい」と評価いただけるブース出展につながった。

来場者からの感想も収集できたとはいえ、学生たちも振り返っていたように非常に数が限られてしまった点は悔やまれるところである。また時間帯によっては遊び場の方が盛り上がってしまい、ポスター展示による啓発活動という本質が薄れてしまった点もしっかりと改善しなければならない。これらに留意しながら次年度も地域に貢献できる活動の実施を目指したい。

補注

- (1) 中止時の活動状況は『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書3』、規模縮小による再開時の活動状況は『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』にて報告している。
- (2) 開催時期は12月はじめの日曜日に変更となった。
- (3) 『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書5』参照。

引用文献

- ・赤松瑞枝「コロナ禍における地域活動—防災フェスタ中止に伴う啓発パンフレット作成を通して—」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書3』跡見学園女子大学地域交流センター、p.29-p.30、2022
- ・赤松瑞枝「防災フェスタにおける研究報告—3年ぶりの対面形式参加から得たもの—」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』跡見学園女子大学地域交流センター、p.43-p.45、2023
- ・赤松瑞枝「防災フェスタにおける研究報告—3年ぶりの対面形式参加から得たもの—」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書5』跡見学園女子大学地域交流センター、p.59-p.61、2024

2024年度自治体の男女共同参画審議会等における活動報告

観光コミュニティ学部まちづくり学科 石崎裕子

筆者は、現在、三郷市男女共同参画審議会、鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会、埼玉県性の多様性に関する施策推進会議の各委員および和光市男女共同参画アドバイザーを務めている。以下、簡単ではあるが、2024年度の活動報告を記したい。

1. 三郷市男女共同参画審議会

三郷市男女共同参画審議会は、「三郷市男女共同参画社会づくり条例」によって設置されている。任期2年の委員を筆者は2017年7月から務めている。事務局は企画総務部人権・男女共同参画課が担当している。審議会では、事務局より「みさと男女共同参画プラン」に基づく施策の実施状況が報告され、それに対する委員からの意見や助言がなされる。また、計画期間が5年の「みさと男女共同参画プラン」の策定期間が近づくとその検討も審議会で行う。

(1) 2024年度第1回三郷市男女共同参画審議会

7月8日(月) 14時30分より三郷市役所にて開催された。主な議題は、「2024年度版(2023年度実施分)男女共同参画社会づくりに関する施策の実施状況について」と「2024年度男女共同参画推進事業計画(案)について」の2点であった。

(2) 2024年度第2回三郷市男女共同参画審議会

2月13日(木) 10時より三郷市役所にて開催された。2024年度男女共同参画推進事業実績(暫定値)について事務局より説明がなされ、委員との質疑応答、意見交換が行われた。

2. 鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会

鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会も、「鶴ヶ島市男女共同参画推進条例」によって設置されている。筆者は、第6期鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会委員(任期:2021年8月20日~2023年8月19日)に引き続き、第7期(任期:2024年3月12日~2026年3月11日)委員を務めている。事務局は、総合政策部政策推進課に置かれている鶴ヶ島市女性センターが担当している。

(1) 2024年度第1回鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会

5月30日(木) 13時30分より鶴ヶ島市役所にて開催された。2023年度鶴ヶ島市女性センターの事業および現状と課題について事務局による説明と委員との質疑応答がなされた。特に、女性センターの現状については、活発な質疑応答、意見交換が行われた。

(2) 2024年度第2回鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会

7月11日(木) 10時より鶴ヶ島市役所にて開催された。はじめに、「つるがしま男女共同参画推進プラン(第6次)」(計画期間:2022年度～2026年度)に基づく鶴ヶ島市の男女共同参画に関する取り組み状況について事務局による説明と質疑応答があった。続いて、鶴ヶ島市女性センターのあり方について意見交換が行われた。第1回委員会が出された意見をふまえ今回も様々な意見が出された。

(3) 2024年度第3回鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会

11月20日(水) 10時より鶴ヶ島市女性センター内の講習室にて開催された。はじめに、「女性センターの在り方に関する意見報告書(案)」について事務局が説明し、それに対する委員との質疑応答、意見交換が行われた。当日机上配布されたこの報告書案は、第1回と第2回の委員会が出された委員からの意見もふまえたものである。続いて、2024年度女性センター実施事業の報告が行われた。

(4) 2024年度第4回鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会

2025年3月中に開催される(2025年2月16日現在、日程調整中)。

3. 埼玉県性の多様性に関する施策推進会議

筆者は、第1期(任期:2022年6月1日～2024年5月31日)に引き続き、第2期(任期:2024年7月1日～2026年6月30日)の委員を務めている。事務局は県民生活部人権・男女共同参画課が担当している。

(1) 2024年度第1回埼玉県性の多様性に関する施策推進会議

8月7日(水) 14時から、埼玉県庁近くのあけぼのビルにて、Zoomによるオンライン併用で開催された。筆者は会場から参加した。埼玉県は「埼玉県性の多様性を尊重した社会づくり条例」(2022年7月8日施行)に基づき、「埼玉県性の多様性を尊重した社会づくり基本計画」(計画期間:2023年度～2025年度)を策定している。議事は「埼玉県性の多様性を尊重した社会づくり基本計画」の進捗状況報告と埼玉県による性の多様性に関する取り組みについての2点であった。どちらもはじめに事務局より説明がなされ、それに対する委員からの質疑応答という形で進んだ。

4. 和光市男女共同参画アドバイザー

和光市では「男女共同参画わこうプラン」に基づく施策を推進するため、男女共同参画わこうプラン推進委員(任期2年、募集人数4人以内)を公募で市民から募り、委員の企画・編集による「和光市男女共同参画情報紙 おるご～る」(以下「おるご～る」と表記)を年1回、毎年3月に発行している。事務局は企画部企画人権課である。筆者が2023年度から務めている男女共同参画アドバイザーの主な役割は、男女共同参画わこうプラン推進委員会議に出席し、「おるご～る」の作成にあたり、企画やそ

の内容について助言をすることである。2024年度は、以下7回の会議が開催された。各回の開催日時の設定にあたっては、授業や学内の会議等に支障のないよう事務局に配慮いただき、すべて参加することができた。

第1回(5月28日、14時～16時)、第2回(6月25日、14時～16時)、第3回(7月25日、10時～12時)、第4回(9月26日、10時～12時)、第5回(10月22日、14時～16時)、第6回(11月28日、10時～12時)、第7回(12月19日、10時～12時)。開催場所は市役所内の会議室である。テーマ決めから始まり、執筆記事の分担、レイアウト・イラストの検討などもこの会議の場で行われた。2025年1月9日(木)の事務局による原稿入稿後、校正作業を経て、「おるご～る」第30号(テーマ「制服リニューアルから考える性の多様性」)は、「広報わこう」2025年3月号と共にポスティングによって全戸配布される。

5. 所感

筆者は独立行政法人国立女性教育会館在職中(2010年8月～2015年3月)、事業課の専門職員として、自治体等の職員を対象とする男女共同参画に関する研修の企画・運営を担当していた。この経験も活かしながら、上述した自治体の男女共同参画関連の委員等の活動に携わっているが、毎回参加するたびに、地域における男女共同参画の推進について、筆者自身、多くの学びを得ている。

また、2024年度は三郷市人権・男女共同参画課とのつながりの中で、2024年7月18日(木)の「男女共同参画社会」(学科専門科目)では、三郷市人権・男女共同参画課の豊田典子氏をゲストスピーカーとして招聘した。男女共同参画行政の担当者から直接話を聞くことによって、学生たちは自治体の男女共同参画の取り組みについて理解を深めることができた。また、2024年12月26日(木)には、筆者が三郷市において管理職を対象とした「令和6年度男女共同参画職員研修」(参加者16名、各部1名程度)の講師を担当した。今後もこうした学外での男女共同参画に関連した活動を日々の教育・研究と循環させていきたい。

【参考資料】

- ・三郷市, 2024, 「男女共同参画審議会」, 三郷市ホームページ
(2025年1月10日取得, https://www.city.misato.lg.jp/soshiki/somu/jinken_danjokyodosankaku/1/281.html)
- ・埼玉県, 2024, 「性の多様性に関する施策推進会議」, 埼玉県ホームページ
(2025年1月10日取得, <https://www.pref.saitama.lg.jp/a0303/lgbtq/seinotayouseisuishinkaigi.html>)
- ・鶴ヶ島市, 2024, 「鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会」, 鶴ヶ島市ホームページ
(2025年1月10日取得, <https://www.city.tsurugashima.lg.jp/page/dir000313.html>)
- ・和光市, 2024, 「男女共同参画わこうプラン推進委員」, 和光市ホームページ
(2025年1月10日取得, <https://www.city.wako.lg.jp/kurashi/jinken/1005391/1010177/1005422.html>)

食品専門スーパーマーケットとの産学連携による商品開発プロジェクト（第2弾）

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは、消費者の食育を目的に、2020年度から株式会社エムアイフーズスタイルが展開する食品専門スーパーマーケットのクイーンズ伊勢丹をフィールドとしてさまざまな食育活動を行ってきた。2023年度からは、産学連携プロジェクトとして商品開発も手掛けるようになり、昨年10月に第1弾の開発商品として3点の惣菜を上市した。

今年度、本プロジェクトの第2弾として冷凍ピザの商品開発に取り組んだ。商品発売後は学生が各店舗に出向き、このピザの開発目的や栄養バランス、美味しい食べ方についてお客様に直接説明してプロモーション活動を行った。本稿では、約1年間にわたるプロジェクト活動について振り返る。

2. 商品開発

（1）目的の設定

本プロジェクトでは、ゼミ生が「お客さまの未来の健康を支える商品開発を行う」ことを目的としている。現場を通じて、お客さまには食生活の改善、連携企業には売上、学生には社会人スキルの向上につながる活動となるべくマネジメントの学びを実践した。それに加え、連携企業である（株）エムアイフーズスタイルの「お客様の日々の生活に『ささやかな感動と喜び』を届ける」というミッションの実現につながるような新たな商品を目指し、商品開発を行った。

（2）現場調査・商品コンセプト・企画立案

まずは、お客様の商品購入の現状を知るため、2024年3月にクイーンズ伊勢丹3店舗に加え、競合他社2社の店舗で現場調査を実施し、SWOT分析を行った。この結果をもとに、他社と差別化できる商品について検討し、クイーンズ伊勢丹の弱みであるコラボ商品の少なさを学生との共同開発商品で解決し、強みである高品質な既存食材を活かした栄養バランスの良い食事につながる商品を提案することになった。

つぎに、開発商品を購入するペルソナ（典型的な顧客像）分析を行った。昨年度は子育て中の仕事を持つ30代女性をペルソナに設定したが、実際の客層との乖離があったため、今年度は現場調査の経験を活かし、現在のクイーンズ伊勢丹の主たる顧客層である60代～70代男女をペルソナとした。分析の結果、この年代の男女は「自分が今まで経験していないこと、訪れたことがない国や地域に強い興味を持っている」ことが判明した。そのため、今年度の開発商品は海外をテーマに、「コロナ禍で海外旅行に行きたくとも行けなかった60代～70代お客様に、自宅で気軽に海外の味を味わっていただく商品」をコンセプトとした。これを商品化するために、各国の食文化を活かした上で、栄養バランスにも考慮したピザを企画立案した。

(3) 商品化・販売準備

学生は自分たちが企画したピザを商品化する第一関門として、2024年7月3日に(株)エムアイフードスタイル本社にて社長をはじめ役員、担当部門長の前で提案プレゼンテーションを行い、承認を得た(図1)。その後、工場での試作と学生による試食を繰り返し、最終商品として、気軽にイタリア旅行気分を味わってもらえるよう半分はイタリア北部の代表料理ボロネーゼをベースに、もう半分は南部の料理に使われるシーフードやトマト、オリーブを使用した1枚で2つの味を楽しめるハーフ&ハーフの冷凍ピザに決定した。商品名は「全粒粉入りピッツァ バジルシーフード&キノコボロネーゼ風」、パッケージには「ATOMI PIZZA」と「跡見学園女子大学 共同開発」の表示を入れた(図2)。



図1 社長や役員に対する商品提案の様子



図2 学生オリジナル冷凍ピザ

3. 販売促進のためのプロモーションと販売実績

学生は、お客様に本プロジェクトのコンセプトを伝えるため、販促パネルや商品パッケージも考案した。今年度の開発商品は伊勢丹三越グループ「ISETAN MITSUKOSHI THE FOOD」の1品と認定さ

れたことから、クイーンズ伊勢丹全店ならびにクイーンズ伊勢丹ネットショップだけでなく、伊勢丹新宿本店、伊勢丹立川店、銀座三越店でも販売された。また、販売開始翌日から週末3日間はクイーンズ伊勢丹の4店舗の店頭で学生が立ち、直接お客様に自分たちが開発した商品の紹介を行った(図3)。

ATOMI PIZZAは12月12日(木)の発売後、初週4日間で249枚を売り上げ、月末までの月間販売数は1,000枚を超えた。クイーンズ伊勢丹でのピザカテゴリーの売上を前年同時期と比較した結果、130%超と大きく伸長していたことから、学生たちが開発した商品が牽引役となってこの売上を達成したと企業側は分析している。



図3 店舗プロモーションの様子

4. おわりに

(株) エムアイフードスタイルとの産学連携プロジェクトの商品開発第2弾として冷凍ピザを上市した。今年度はクイーンズ伊勢丹の主たる顧客層である60～70代男女をペルソナとし、海外旅行に行きたくとも行けないお客さまに食卓を通して気軽に海外旅行気分を味わってもらう商品の開発に取り組んだ。何度も試作を重ねながら、イタリアの北部と南部の食文化の違いを活かした業界でも珍しいハーフ＆ハーフの冷凍ピザを商品化した。

今年度商品開発の反省点として、学生は「お客様に何を一番に伝えたいのか」という軸を一貫して持つことができなかった点と自分たちの開発商品に対する反応を定性的に分析するために必要なお客様からのアンケートやヒアリングの回答数が少なかった点を挙げた。この情報は連携企業にも共有し、次年度の商品開発に活かしたい。

マネジメントを実践的に学ぶ場であるこの商品開発プロジェクトにゼミ生は3年生後半から携わり、その流れから商品化までの活動は4年生を中心に進めている。今年度3年生も秋学期からプロジェクト活動に加わり次年度の商品開発に向けて動き始めた。学生たちには、本プロジェクトが消費者の未来の健康を支える食育活動の一環であることを常に意識して、お客さまが手軽に栄養バランスの整った食事を摂れるような商品開発を目指して欲しい。そして、商品の企画だけに終わらず、店舗プロモーションや事後調査を通じて課題や改善点を見出すことで、ビジネスにおけるPDCAサイクルの意義をこの活動から学んで欲しい。

食育出張授業「バナナうんちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」 2024年度活動報告

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは、2022度から生活習慣病の予防を目的に活動する特定非営利活動法人 日本成人病予防協会と協働し、低学年の小学生を対象とした食育活動に取り組んでいる。同協会では2010年度より「バナナうんちで元気な子～生活リズムを整えよう～」と題し、文部科学省、「早寝早起き朝ごはん」全国協議会、公益社団法人日本PTA全国協議会後援のもと、全国の小学校で低学年の生徒を対象に食育出張授業を行っている。生活習慣病予防に貢献する次世代の講師を育成するための「大学生講師の育成プロジェクト」にゼミとして参加し、3年目となる。今年度は3年生12名が大学生講師として都内複数の小学校で食育活動を行ったのでその成果を報告する。

2. 大学生食育講師の認定試験

食育講師になるためには、「健康管理検定2級（後援：文部科学省）」に合格しなければならない。3年生は春学期が始まるとすぐに日本成人病予防協会から検定のテキストを受け取り受験勉強に励んだ。6月中旬に第1回の検定試験を受験したが、今年度は数名が不合格となった。彼女らは1か月後に再試験を受験し、無事に12名全員が検定試験に合格した。その後、講師になるための実技講習を受講し、夏休み期間中も実技試験の練習に励んだ結果、8月末に実施された実技試験にも全員が合格し、日本成人病予防協会の大学生講師の認定を受けた。

3. 東京都内9小学校での食育授業の実施

12名のゼミ生は4名1グループとなり、日本成人病予防協会から提供された台本や資材をベースとして45分授業を行った。今年度は10月～1月に9校の小学校で、約640名の小学生に食育授業を実施し、健康的な排便習慣を身につけるための実践的な学びを提供した（図1）。

〈2024年度 出張授業実施小学校〉

10月17日（木）	足立区立伊興小学校	3年生 115名
10月26日（土）	板橋区立蓮根第二小学校	1年生 91名
11月7日（木）	調布市立石原小学校	1年生 約100名
11月8日（金）	新宿区立戸塚第一小学校	3年生 約70名
11月16日（土）	大田区立千鳥小学校	2年生 約60名

12月12日(木)	目黒区立下目黒小学校	1年生 約70名
1月24日(金)	新宿区立天神小学校	1年生 約35名
1月30日(木)	文京区立大塚小学校	3年生 約50名
1月31日(金)	江戸川区立東小岩小学校	3年生 約50名



図1 小学校での食育授業の様子

4. おわりに

今年度は昨年度に比べ、訪問校は約2倍、受講した小学生数では1.4倍の生徒を対象に食育出張授業を行うことができた。3つのグループはそれぞれ3回授業を実施した。彼女たちは毎回、終了後に自分たちの授業動画を確認しながら振り返りを行って、お互いの反省点や改善点を次の授業に活かすことを心掛けた。その結果、3回目の授業では、どのグループも聴講している小学生ばかりでなく、同席する教員や保護者も巻き込んだ45分授業をできるようになったことが授業動画から見て取れる。回を経るごとに、生徒の集中力を切らすことない授業運びに学生たちの成長ぶりが感じられた。

これからも、自分たちの食育活動のミッションを忘れることなく、この経験を次年度のゼミ活動に活かしてくれることを期待している。

文京ハッピーベジタブルフェスタ 2024の会展

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは文京区が主催する「ハッピーベジタブルフェスタ」に2013年から出展を続け、11年目となった。今年は、9月25日(水)に文京シビックセンター 1階展示室で「ハッピーベジタブルフェスタ2024」が開催され、16団体が展示を行った。ゼミからは3年生がポスター出展したので、その成果を報告する。

2. 今年度の出展テーマ

今年のイベントテーマは「和食で野菜をおいしく!」であった。3年生は現在の日本人の食生活の問題点について調査研究した上で、食品の好き嫌いに注目し、「嫌われ野菜を和食で人気者に!」という出展テーマを設定した。

まずは、授業補助のボランティア協力をしている文京区立大塚小学校の生徒に嫌いな野菜についてヒアリング調査を行った。その結果、多くの生徒がトマトとセロリが苦手であることがわかった。この野菜を手軽に美味しく食べてもらうためのメニューを考案するため、区内の調理施設でトマトとセロリを使ったさまざまな料理を試作し、試食を行った上で、それぞれの野菜が嫌いな子供でも食べることができるであろうメニューをピックアップした。

ポスターにはトマトとセロリが栄養価の高い野菜であること、学生たちが考案したレシピであれば苦手な野菜も食べやすいことを示し、さらに、それらメニューのレシピをブックレットにして会場で配布した(図1)。お子様向けにはクイズを用意して、挑戦者には野菜シールをプレゼントした。また、大人には栄養価の高さと調理の工夫を中心に説明するなど、来場者の年代に合わせた展示を行った(図2)。



図1 今年度のポスターとレシピブック



図2 イベント当日の展示室の様子

3. イベント出展の成果

当日、石渡ゼミのブースに立ち寄ってくださった来場者は194名で、昨年度の2倍となった。さらに、200部用意したレシピブックは、来場者にすべて配布できた。学生によるイベントの振り返りでは、「テーマについて事前研究していたため、展示内容を対象者に合わせてわかりやすく説明したり、来場者からの質問にも正しい知識で回答したりすることができた」「レシピブックを配ることで、ブースに立ち寄ってくださる方も多かった」「来場者に楽しんでもらうために用意したクイズやシールが評判良かった」等の意見が出た。一方、次年度に向けて「レシピブックが午前中でなくなってしまったため、午前中の様子を見て、増刷できるよう準備しておく」「来場者は料理する方が多いため、展示内容だけではなく、野菜や調理に関する知識が必要」「毎年来場される方は、以前の石渡ゼミの展示内容をご存じのため、話を合わせるためにも先輩方の展示内容について事前に確認しておく」等の改善点が挙げられた。

4. おわりに

ハッピーベジタブルフェスタ出展の際は、前年度の経験者である4年生から3年生へ展示内容や準備のコツを伝えてもらった上で、3年生の自主性を重んじた活動となるよう心掛けている。3年生は初めての学外イベントを成功に導くため、4月から9月までの半年間、試行錯誤するなかで、メンバーそれぞれの得意を理解し、協力して展示物や配布物を作り上げ、イベントを成功裏に収めることができた。

これまで身近な相手を中心にコミュニケーションを成立させていた学生にとって、初めて接する大人や子供に自分たちの伝えたいメッセージをわかりやすく伝える訓練の場として、今後もゼミ3年生によるハッピーベジタブルフェスタへの出展を続けていきたい。

ゼミ活動における地域イベント（スミファ）のSNS広報

マネジメント学部教授 許 伸江

1. スミファとは

「スミファ（すみだファクトリーめぐり）」は、一般の人が墨田区の町工場をめぐり、職人と話し、技術に触れ、ものが作られていく“現場”を肌で感じることでできるイベントである。2012年からスタートし、2024年度（11月22日・23日）で第12回目を迎えた。

墨田区は多種多様な業種の中小企業が集積している地域で、企業同士の交流が盛んである。産業集積のメリットを最大限に生かし、小規模企業のネットワークとスピード、技術対応力によって、顧客ニーズに応える都市型のモノづくりが展開されている。

こうした墨田の特徴を示すように、スミファには金属加工、プラスチック加工、プレス加工、裁断加工、印刷、革小物製造、印章製造、ガラス製造、医療用鋳造、ロボット開発、アパレル、布草履、デザイン、空き家再生などの多様な企業が参加している。今年度は、新規の参加企業6社を含め、全部で36社が参加した。

2. ゼミ活動としてのスミファのSNS配信の流れ

筆者のゼミ（以下、許ゼミ）は2019年の第8回スミファからSNS広報の担当として運営に関わっている。ゼミ生がスミファの参加企業を直接訪問、またはそれが難しい場合はメールでのアンケートを行い、その企業の事業内容やスミファに参加して魅せたい内容などについて情報を集める。そして学生目線でSNS投稿の文面を考え、写真を追加して原稿を作る。それを一度、企業に確認してもらい、了解を得てからSNSで配信するという流れである。来場者の目に留まりやすくするため、11月22日・23日のイベント当日までにカウント・ダウン形式で、一日に数社ずつ、配信した。

今年度から、事務局の担当が東京東信用金庫（以下、ひがしん）に変更となったため、春学期に何度かゼミに来ていただき、担当者と打合せを行った。許ゼミ（9名）からは、ひがしんと直接連絡を取ったり、ゼミをまとめたりする係が必要であったため、「スミファ係」を2名決めた。事務局が変わったこともあり、昨年度までの許ゼミの先輩の活動も参考にはするが、自分たちの代がやりたいことも大切にしようという方針になった。

まず、ゼミの9名全員がメールを確認できるよう、Webメールのメールアドレスを1つ作り、それを活用して事務局や参加企業とのやりとりを使用した。参加企業のすべてに対面で企業訪問をするのは大変なので、初参加の6社は必ず行くことにして、それ以外については、学生が希望する企業を選んで調整した。

主にスミファ係の2名が36社の参加企業にメールでSNS広報についての説明をし、情報収集をして広報の原稿を作成した。実際に企業への連絡を取り始めたのは、夏休みの8月上旬からである。2名をサポートする数名もメールでのやりとりを担当して、情報が集まったが、10月中旬にさしかかりSNS



写真1 スミファのInstagram (4枚をまとめたもの)
出所 sumifa_sumida (2024.11.2の投稿)



写真2 スミファ交流会にて墨田区長(左)、参加企業と学生たち
出所 筆者撮影 (2024.11.22)

配信まで時間が無くなってきたことから、写真を選んで編集する作業や、原稿作成は残りのゼミ生全員で、分担して行うことになった。スミファ係がフォーマットを作成し、その中に情報を埋め込むかたちで行ったことで、スムーズに進めることができた。

学生が手間取った点としては、参加企業からのメールの返信に時間がかかったことである。小規模な企業が多く、また製造業だと現場で仕事をするため、常にPCを開いている仕事の人は違い、連絡のペースが遅くなる傾向にある。また担当者が多忙であったりすると、さらに連絡が遅くなる。そのため、あまり連絡がとれない場合はひがしんに仲介してもらうなど、学生も自分たちで考えて、臨機応変に対応していた。

3. スミファの運営に携わった学生たちの感想

3-1. 企業との交流から学んだこと

- ・企業訪問でのヒアリングは、協力的な方が多く、とてもありがたかった。小規模企業ならではの社員同士や顧客との距離の近さを感じ、地域密着型企業の魅力を感じた。
- ・一般客としては聞けない経営の裏側や今後の展開など、気になったことを直接質問できたことで、経営者の挑戦や目標を追いかける姿に刺激を受けた。また、経営者、起業家視点での物事の考え方や思考に触れて、新しい思考方法を学ぶことができた。
- ・バッグやロボットを制作する現場を見て話を聞く中で、モノづくりに対するこだわりを知ることができた。また、楽しみながら仕事をしていることが伝わってきて、職人仕事の魅力を知ることができた。取材だけでなく実際にモノづくり体験もさせてもらい、とても楽しかった。
- ・普段、自分たちが使っているものは下請企業が作っていることを目の当たりにした。日本だけでなく、

世界に誇れる企業が多いが、知名度が低いことが課題だと感じた。そのため、スミファのようなイベントも含めて企業側からの情報発信の重要性を感じた。参加企業側も、このイベントを最大の宣伝の場だと考えて力をいれていることを知った。自分たちに仕事を任せて頂いている以上、責任を果たしてイベントの成功に貢献したいと思い、頑張った。大変ではあったが、Instagramのフォロワーも増えて、達成感を味わうことができた。

- ・地域のつながりが見えたことがとても良かった。スミファが開催される地域は、同業種の企業が多く、競争関係にあり、あまり交流が盛んではないというイメージがあった。しかし実際に企業の人に出会ってみると、企業同士はもちろん、信用金庫などを交えてお互いに交流し、刺激しあい、協力して地元を盛り上げようとしている関係が見えてとても興味深かった。

3-2. スミファに参加して学んだことや反省点

- ・スケジュール管理が難しかった。こうした配信用の投稿も初めてであったし、イベントの事務局がちょうど変わった年度だったので、方針などがまだ流動的であり、確認や変更などへの対応に思ったより時間がかかってしまった。もっと迅速に作業を進める必要性や、報連相の重要性を学んだ。
- ・同時に36社とのやりとりや原稿のまとめといった、マルチタスクの経験がなかったため、確認が足りないことが出てきて、不備が生じた。ダブルチェックの必要性や、他のゼミ生にもっと早くに助けをもらおう、お願いをすべきだった。自分がこれまで、人に指示を出す経験をしてこなかったことを認識し、反省した。
- ・広報を行ったが、その反応が分からずに不安だったが、最後の懇親会でいろいろな人に褒めていただき、やってよかったと思った。

4. まとめ

学生が展開ゼミナール選考で筆者のゼミを希望する理由として、「学外活動を活発に行っていること」、「ボランティアに参加して地域貢献・社会貢献ができること」、「中小企業の経営者に会って学ぶ機会が得られること」などがある。それまでの自分の学生生活を振り返り、大学・アルバイト・サークル・自宅という固定された活動範囲を越えたいという希望がある。特にコロナ禍で行動制限を経験した学生たちにとっては、3年生からのゼミ活動に期待するものは大きい。

そうしたリクエストに応える意味でも、スミファのような地域イベントへの参加は意義深い。墨田区という自治体のサポート、地域に密着した信用金庫による事務局運営、長年参加してきた参加企業のコミュニティなどがあり、安心して学生を参加させることができている。今年もスミファ交流会では、墨田区長はじめ、事務局長の浜野製作所の浜野慶一社長（当時）、参加企業、他大学の学生たちとの交流を深めることができた。今年の反省を活かし、次年度も学生たちと取り組んでいきたい。

在日クルド人を対象とした日本語ボランティアの実践報告

文学部コミュニケーション文化学科講師 斎藤敬太

1. はじめに

本稿は、2024年度に実施した在日クルド人向け日本語教室での学生ボランティア実践に関する報告である。

在日クルド人は、日本で約2000人が暮らしているとされる(片山2021)が、そのほとんどが埼玉県蕨市や川口市に集中している。彼らはトルコでの迫害や差別を理由に1990年代から来日し(片山2021)、その多くは難民申請を行っているが、難民認定を受けられるケースはほぼなく、これまでトルコから逃れたクルド人で難民認定を受けたのは2022年8月の1件のみである(埼玉新聞社2023)。

筆者はこれまで、地域日本語教育や多文化共生に関わる担当科目(他大学担当科目も含む)の履修者に、様々な観点で実感と気づきを目的とした活動⁽¹⁾を行っているが、その一つとして、2022年からは在日クルド人向け日本語教室でのボランティア実践を行っている。2023年度の実践については斎藤(2024a)で報告している。

2. 在日クルド人向けボランティア日本語教室

在日クルド人を支援する団体が蕨市に存在するが、その一つが「在日クルド人と共に HEVAL」である。この団体が主催している在日クルド人向け日本語教室が埼玉県蕨市にある団体事務所で毎週土曜日と日曜日に開催されている(実践を行った2024年7月当時は日曜日のみ)。なお、この日本語教室では、在日クルド人を主な対象として日本語をボランティアで教えているが、トルコ人やその他の国籍の学習者も少数ながら参加している。

彼らは自然習得のために会話はある程度可能であるが、日本語の読み書きができないというレベルの者が多い。ただし、N2や日本国内の各種資格の取得を目指している学習者もいるため、レベルにはバラつきがある。

筆者がこのような日本語教室で学生にボランティア実践を行っている理由としては、ここが日本語を教える場所という意味合い以外に、在日クルド人の居場所を提供するサロンのような要素も持ち合わせているからである。まずは在日クルド人と楽しみながら交流することができるため、日本語ボランティア初心者の学生にとって参加しやすい。つまり、気軽に日本語ボランティアを実践しながら多文化共生を考えることができるのである。

3. 実施概要

2024年度は「コミュニケーション文化学研究入門B」の履修者から希望者を募り、2024年7月21日に引率を行った。参加者2名は全員日本語ボランティア未経験者であった。教室では、担当者より簡単な説明やアドバイスを受けた後、他のボランティア教師と共に活動に参加した。在日クルド人1、2名に対して1～3名程度のボランティアが対応する形態が多かった(図1)。



図1 日本語ボランティアの様子

4. 参加者の感想

以下に、参加者の感想を記す。明らかな誤字脱字や個人情報等の最低限の修正を除き原文をそのまま掲載する。

・クルド人日本語教室に行ってみて、自分と同じくらいの年の人達が家族と離れて日本で生活していた。実際に接してみると、彼らは凄く明るくて前向きに日本語に取り組んでおり、私に楽しげにトルコについて教えてくれた。

日本人は外国人に対して何となく怖いイメージを持っていたり、在日外国人に対して否定的な意見を持つ人も少なくない。もちろん彼らについて知って、自分の意見があるのなら尊重されるべきだが、そうでないのなら彼らのひたむきな姿をぜひ見て欲しいと思った。

・翻訳機を使いながらも、クルド人の方々とコミュニケーションをとることができて、とても良い経験になりました。教材を使いながら、簡単な日本語で会話文を読み合わせた時に自分が初めて英語を習った時のことを思い出しました。日本に1年以上滞在していてもあまり会話まではこぎつけていない様子を見て、母語ではない言語を習得することの大変さと難しさを改めて感じる事ができました。懸命にコミュニケーションをとろうと、私に話しかけてくださった人が多く、私からもコミュニケーションをとれるようにもっと頑張ろうと思いました。また、トルコ語に触れさせていただき、発音も文字も綴りも全く異なる言語を学んでいる彼らはすごいと思いました。

以上から、日本語ボランティアに参加することで、在日外国人に対する理解、そして母語が異なる者とのコミュニケーションの楽しさや言語学習の難しさ等、様々な点で気づきを与えることができたと考えられる。

5. おわりに

参加者はボランティア実践により多文化共生を考える上でプラスの効果があったと思われる。この効果を一度限りのものとせず、いかに継続させることができるかが今後の課題である。

注

- (1) 朝鮮大学校での在日コリアンとの交流(斎藤 2020a,b、2021、2024b)、街中の看板・ポスター類(言語景観)を撮影させて在日外国人の目線で問題点を考える課題(斎藤 2022)、様々な国や地域の食を体験させたり、それに関する講演会を聞かせたりすることで異文化理解を考えさせる実践(斎藤 2023)等を行っている。

参考文献

- ・ 片山奈緒美 (2021) 「多文化共生に向かう〈動機付け〉の研究—ワラビスタンにおける日本人支援者へのインタビュー調査から—」『国際日本研究』13、筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究専攻
- ・ 埼玉新聞社 (2023) 「私の人生めっちゃくちゃに…入管難民法改正「全員帰れ」と同義」 フルド人ら川口で訴え 仮放免の窮状にも言及」2023年4月19日付 <https://www.saitama-np.co.jp/articles/23112/postDetail> (最終閲覧日：2024年1月8日)
- ・ 斎藤敬太 (2020a) 「多文化共生社会へ向けた在日コリアンとの学生交流企画の試み」『国際関係学研究』46、津田塾大学全学研修・紀要委員会
- ・ 斎藤敬太 (2020b) 「朝鮮大学校との学生交流企画の報告」『津田塾大学国際関係研究所報』55、津田塾大学国際関係研究所所報編集委員会
- ・ 斎藤敬太 (2021) 「オンラインによる朝鮮大学校との学生交流企画の試み」『津田塾大学国際関係研究所報』56、津田塾大学国際関係研究所所報編集委員会
- ・ 斎藤敬太 (2022) 「言語景観を通じた多文化共生教育の実践」『異文化間教育学会第43回大会発表抄録』異文化間教育学会
- ・ 斎藤敬太 (2023) 「事例と実践から見る食を通じた異文化理解」『異文化間教育学会第44回大会発表抄録』異文化間教育学会
- ・ 斎藤敬太 (2024a) 「在日フルド人向け日本語教室での学生ボランティア実践」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書』5、跡見学園女子大学地域交流センター、pp.50-52
- ・ 斎藤敬太 (2024b) 「朝鮮大学校での在日コリアンとの交流企画の報告」『国際関係学研究』50、津田塾大学全学研修・紀要委員会

文京区エリアスタディ（社会調査実習）

観光コミュニティ学部 佐野美智子

1. 「文京区エリアスタディ」について

「文京区エリアスタディ」は、観光コミュニティ学部の社会調査士課程科目「社会調査実習」（3・4年生対象）として開講するクラスのうち、量的調査を中心とする実習クラスの調査テーマである。社会調査実習の授業では、春学期と秋学期を通じて同じ教員が担当するクラスを履修する。一年間かけて調査の企画・設計から、実査、データの集計・分析、成果報告書の作成まで、社会調査の全過程を一通り、体験を通じて学習する。実際の調査経験を通じて社会調査法を理解し、実際に活用するためのスキルを身に付けることを授業の目的としている。

筆者が担当するクラスでは、文京キャンパスがある文京区を調査対象エリアとし、「文京区エリアスタディ」を大テーマに、毎年、さまざまな個別テーマに取り組んでいる。過去取り上げたテーマには以下のようなものがある（『ゆかり』No.3, p31掲載の表に加筆）。

	テーマ	内容
第1回 (2017年度)	なぜカフェ・喫茶店を利用するのか？	カフェ・喫茶店のサードプレイスとしての役割を検証することを目的に、文京区茗荷谷エリアのカフェ・喫茶店の協力を仰ぎ、来店者に対する質問紙調査と店長に対する質問紙調査およびインタビュー調査を実施した。さらに、本学および近隣大学の学生の一部を対象に集合調査を実施した。
第2回 (2018年度)	大塚3丁目地域満足度調査	文京区では1999年以降、人口・世帯数ともに増加が続いていることをうけて、高層マンションが増えて新しく地域に住む人が増加するなか、古くから地域に住む旧住民と新住民の共生が地域社会にどのような変化をもたらしているのかを調査した。調査対象エリアは大通り沿いに高層マンション建設が相次ぐ大塚3丁目に設定した。質問紙調査とインタビュー調査（アンケート回答時にインタビュー協力願いに応じてくれた方々が対象）を実施した。
第3回 (2019年度)	教育の場としての文京区一小学5・6年生の保護者の教育観—	文京区にはいわゆる「ブランド小学校」が多く、2013年以降に区立小の児童数が大きく増加する一方、区立中学校の生徒数は漸減するという対照的な動きを見せている。中学受験が盛んな様子やうかがえることから、小学5・6年生の保護者の教育観や子どもの将来への期待と教育費や子どもの成績との関連について質問紙調査を実施した。区立小学校の協力を得ることが難しかったため、区内の学習塾や習い事教室、児童が放課後に時間を過ごす場所を運営する団体等に調査協力を依頼し、調査票を配布した。インタビュー調査も実施した。
第4回 (2020年度)	新型コロナ禍と生活の変化	コロナ禍による生活の変化が私たちの生活満足にどのような影響を及ぼしているのか、働き方の変化と子どもの学びの変化、対面から遠隔への対応やその評価について調べるために質問紙調査を実施した。区内でも1世帯当たり人員が多い小日向地域を調査対象とした。インタビュー調査は実施せず。
第5回 (2021年度)	新しい日常（ニューノーマル）	コロナ禍による生活変化について、家計行動や時間の使い方の「ニューノーマル」を調べるとともに、コロナ収束後の生活についての考えを尋ねる質問紙調査を実施した。調査対象エリアは小石川地域とした。

第6回 (2022年度)	住みやすいまちをつくる—大塚仲町エリア調査—	文京区大塚仲町町会との合同プロジェクト（2年間）の一環として調査を実施した。プロジェクトのテーマは、「地域に暮らす人たちが“住みやすいまちだと実感できる”まちづくり」。質問紙調査は大塚仲町町会地区の住民を対象とした。併せて、町会メンバーへのヒアリング、エリア踏査、地域イベントの参与観察調査、アンケート回答者へのインタビュー調査を実施した。
第7回 (2023年度)	人のつながりをつくる—大塚仲町エリア調査（続）—	文京区大塚仲町町会との合同プロジェクト2年目に実施した調査では、テーマを「人のつながりをつくる」とした。質問紙調査の対象地域は大塚仲町町会地区に隣接する町会を加え大塚仲町エリア全域とした。また、大塚地区の9町会が氏子となっている神社の創祀400年の例大祭を、〈人のつながりをつくる〉地域イベントの事例として観察調査をおこなった。
第8回 (2024年度、 現在進行中)	地域の防災を考える	地域の防災力について、自助力と共助力の双方からアプローチすることを目的に、質問紙調査を実施した。調査対象エリアは小石川4・5丁目とした。駅に近く、大通りに面する地域を中心に高層マンションが多く、単身世帯も多い一方で、戸建てを中心に古くからの近所付き合いが残る地域が混在する。過去の文京区エリアスタディ調査から、単身世帯や高層マンション居住者は、町会加入者が少なく近所付き合いが希薄となる傾向がみられた。多様な住民が暮らす地域を取り上げることで、地域防災の課題を洗い出した。

2. 調査を通して地域の住民とともに考えることの意義

社会調査実習の授業では、調査に協力してくれた地域の方々に対して調査結果をフィードバックするために、報告書の送付と報告会開催を行っている⁽¹⁾。

報告会は、まず学生が調査結果を報告し、次に各回テーマに即した地域の関係者からコメントをいただき、最後に広く参加者からの質問や感想をいただくという構成をとっている。報告会終了後には参加された方々が名刺交換するなどの光景が見られ、地域の方々をつなぐ場として機能している様子が見えがえる。大学が教育活動の一環として実施している調査であるため、住民が地域を知り、地域に関与する手段として、安心して活用できるのだろう。

調査に回答することが、住民が地域を知るきっかけになるという点については、特に現在進行中の第8回調査「防災に関する調査」で強く感じる。調査では、自由記述の質問への回答や欄外コメントとして、調査自体への感想が書いてあることが少なくないが、今回特に多かったのは「調査に答えることで勉強になった」という感想である。これまでの調査回でも「改めて考えるきっかけになった」という類の感想は多い。

特定地域での社会調査は、調査をすること自体が地域の住民を巻き込んでテーマについてともに考え、住民同士をつないでいく力を持っていることがわかる。地域の大学が果たす機能としてこれからも大切に考えていきたい。

注

- (1) 第1回と第3回は調査地区を限定しない調査であったため、報告会は実施していない。第4回と第5回はコロナ禍で報告会実施を見送った。調査票の最終頁で、報告書送付と報告会参加の希望を尋ね、希望する回答者には氏名と連絡先住所を書いてもらい、ハガキやe-mailで連絡している。なお、報告書は地域の誰もが閲覧できるように、文京区大塚地域活動センターや文京区社会福祉協議会の地域連携ステーション「フミコム」に配本するとともに、本学HPで報告書完成を告知し、QRコードから報告書pdfにアクセスできるようにしている。

令和6(2024)年度 静岡県東伊豆町の地域活性化事業に関する塩月ゼミでの取組み ーサッポロビールおよびポーラ(POLA)との産官学連携事業活動をめぐってー

観光デザイン学科 教授 塩月亮子

観光デザイン学科 3年 山信田 葵

はじめに

令和元(2019)年11月19日、跡見学園女子大学と静岡県東伊豆町とが地域連携協定を締結して以降、塩月ゼミでは東伊豆町の地域活性化事業に携わってきた。初年度は温泉街をもつ東伊豆町でのフィールドワークや女性人材交流会(様々な企業で活躍している女性社員によるライフコースやワークライフバランス、仕事内容等の説明会)、東伊豆町の伝統文化「雛のつるし飾り」の制作会、二子玉川高島屋ショッピングセンターや渋谷の東急百貨店での東伊豆町PR事業など、多くの活動を実施することができた。しかし、翌令和2(2020)年度はコロナ禍のため東伊豆町でのフィールドワークを行うことができず、月1～2回程度、東伊豆町役場の方々と昼休みにオンライン会議を行うことが精一杯だった。

令和3(2021)年度もコロナ禍の影響を受けたが、東伊豆町役場の方々から静岡県にも工場を持つサッポロビール株式会社とのコラボレーション事業の提案があり、年末には東伊豆町でのフィールドワークを実施、令和4(2022)年ははじめには東伊豆町の特産品「いずのはる」⁽¹⁾というミカンを用いた新たな飲料のレシピ開発を行うことができた。その後も塩月ゼミでは、レシピに基づくカクテルを販売してくれる町内の宿泊施設を役場の方々と選定・依頼したり、カクテルのPOPづくり等を行ったりしてきた⁽²⁾。また、令和6(2024)年度にはサッポロビール株式会社との連携事業に加え、昭和4(1929)年に静岡市で創業した株式会社ポーラ(POLA)とのコラボレーション事業を、昭和女子大学の学生たちと一緒に開始することとなった。

そこで、本稿では主に令和6(2024)年度の活動として1. 東伊豆町での夏期フィールドワーク⁽³⁾、2. サッポロビール株式会社との産官学連携事業、3. 株式会社ポーラ(POLA)との産官学連携事業に関する活動について述べる⁽⁴⁾。

1. 令和6(2024)年度夏期フィールドワーク

まず、産官学連携事業の基となる重要な活動として、令和6(2024)年9月11日(水)～12日(木)に実施した1泊2日の東伊豆町における夏期フィールドワークについて、学生リーダーの山信田 葵より報告する。

参加学生は筆者(山信田)を含め総勢10名であった。(表1参照)。

受け入れてくださったのは、東伊豆町観光産業課主査 太田裕介氏、東伊豆町観光産業課主任主事 横山潤氏、東伊豆町観光産業課主事 梅原伊織氏、東伊豆町観光産業課主事 大橋秋穂氏である。東伊豆町

が用意してくれた車で、東伊豆町内の観光地の視察や当事業に協力していただいている宿泊施設への挨拶回りを行った。また、今回の訪問では伊豆稲取温泉 味の宿 喜久多という宿泊施設に、宿泊先としてお世話になった。

次に今回の訪問の行程を記す。

【令和6（2024）年9月11日（水）】

（同行者：太田裕介氏、横山潤氏、梅原伊織氏、大橋秋穂氏）

- 10:12 各自で伊豆稲取駅（東伊豆町）へ集合
- 10:30～12:30 伊豆アニマルキングダム訪問
（写真1）
- 12:45～14:00 東伊豆町を一望できるManas Café
のテラス席にて昼食（写真2）
- 14:10～14:20 素戔鳴神社を視察（写真3）
- 14:35～14:55 JAふじ伊豆に訪問。当事業に協力していただいた方々へのご挨拶
- 15:05～ 当事業に協力していただいた石花海という宿泊施設にご挨拶
- 15:25～ 当事業に協力していただいた銀水荘という宿泊施設にご挨拶
- 15:45～ 当事業に協力していただいた稲取東海ホテル湯苑という宿泊施設にご挨拶
- 16:00～17:00 稲取細野高原を視察
- 17:15～ 味の宿 喜久多にチェックイン。女将さんにご挨拶
- 18:30～ 味の宿 喜久多にて夕食。稲取港から揚がる魚介類を使用した料理であり、稲取港ブランドの金目鯛が絶品である

表1 2024年度東伊豆町訪問参加者名簿

氏名	学年
新井雅	3年
伊藤春那	3年
大柿ありさ	3年
清水南歩	3年
竹田あみ	3年
藤本真礼	3年
本間夕紀菜	3年
山信田葵	3年
小林真璃亜	2年
田中千遥	2年

（作成者：山信田 葵）



写真1 伊豆アニマルキングダム
（2024年9月11日 山信田撮影）



写真2 Manas Café
（2024年9月11日 山信田撮影）



写真3 素戔鳴神社
（2024年9月11日 山信田撮影）

【令和4（2024）年9月12日（木）】

（同行者：梅原伊織氏、大橋秋穂氏）

- 8:00～10:00 伊豆稲取温泉 味の宿 喜久多にて朝食→チェックアウト
- 10:05～10:15 東伊豆町役場に訪問。観光産業課へ挨拶
- 10:15～10:45 直売所こらっしえを視察
- 11:00～11:10 当事業に協力していただいた熱川プリンスホテルという宿泊施設にご挨拶
- 11:20～11:25 当事業に協力していただいたいさり火という宿泊施設にご挨拶
- 11:30～12:00 海沿いのムーンロードテラスを視察（写真4）
- 12:00～12:20 当事業に協力していただいた北川温泉ホテルという宿泊施設にご挨拶
- 12:30～13:30 junjunにて昼食
- 13:35～13:50 当事業に協力していただいた志なよしという宿泊施設にご挨拶
- 13:50～14:10 湯守という文化が残るやぐらがあり、温泉たまご作りを体験できるお湯かけ弁財天を視察（写真5）
- 14:10～16:10 熱川ハーブテラスにてサシェ作り体験（写真6）
- 16:15～17:00 熱川湯の華ばあ〜くにて足湯
- 17:00 熱川駅にて解散



写真4 幸せを呼ぶモニュメント
（2024年9月12日 山信田撮影）

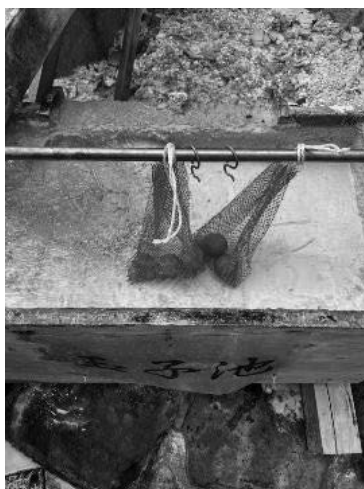


写真5 温泉たまご作り体験
（2024年9月12日 大柿撮影）



写真6 サシェ作り体験
（2024年9月12日 大柿撮影）

2. サッポロビール株式会社との産官学連携事業

次に、令和6（2024）年度に塩月ゼミで取組んだサッポロビール株式会社との産官学連携事業について紹介する。

「東伊豆町×サッポロビール×跡見学園女子大学」として行った地産地消兼SDGsにも繋がるカクテルレシピ開発は、令和3（2021）年から塩月ゼミが関わってきた産官学事業である。新たなカクテルに用いた伊豆特産品「いずのはる」というミカンは、傷がつきやすく長持ちしないため、廃棄されたり生



図1 令和6(2024)年春用のPOP①



図2 令和6(2024)年春用のPOP②



図3 令和6(2024)年春用のPOP③

産を敬遠されたりすることが多かった。そこで、廃棄量を減らし、生産量を増やすため、協力してくれる地元の宿泊施設では、注文を受けたらその場で「いずみはる」を絞り、その果汁をウォッカとトニックで割った新たなカクテルを提供することとなった。令和6(2024)年2～3月にかけて当カクテルは東伊豆町の9施設で販売された。令和7(2025)年の春はさらに4施設増やすことを目標に、現在、町内の新たな施設の調査・依頼を行っているところである。

また、令和6(2024)年の春に発売された当カクテルのPOP3種も塩月ゼミの学生が制作した(図1～3参照)。これらは東伊豆町の魅力が伝わるような写真(学生たちがフィールドワークで撮影したもの)を背景に、インバウンド対応のため日本語表記以外にも英語表記が追加されたものとなった。

令和7(2025)年春用のために制作中のPOPにはQRコードを付け、カクテルの提供者や注文者へのアンケート、および英語に限らず中国語や韓国語など多言語によるカクテルの説明を行うことが検討されている。

なお、令和6(2024)年12月10日(火)には、ゼミ3年生の伊藤春那と大柿ありさの2名が、東伊豆町観光産業課主査の太田裕介氏と静岡県庁の鈴木宏規氏とともに、連携後はじめて恵比寿にあるサッポロビール株式会社本社を訪れ、サッポロビール株式会社 広域外食本部 第1営業部の村上涼平氏にこれまでの取組みや売上高の変遷、今後の課題などを対面で報告・発表した(写真7・8)。その翌日の12月11日(水)にはサッポロビール株式会社の村上氏をはじめ、東伊豆町役場の太田氏や梅原氏、静岡県庁の鈴木氏と塩月ゼミの学生たちとで、来春に向けてのキックオフミーティングをオンラインで行い、新たなPOP案の紹介や更なる宿泊施設への協力呼びか



写真7 サッポロビール本社での発表
(2024年12月10日 鈴木宏規氏撮影)

けなどに関して意見交換したことも、併せて記しておく。

3. 株式会社ポーラ (POLA) との産官学連携事業

2024年12月16日(月)、新しく連携事業を開始する株式会社ポーラ (POLA) との打ち合わせを、五反田にある本社で実施した。参加者は塩月ゼミ3年生の安部瑞貴、竹田あみ、春木友花、令和7(2025)年度入ゼミ予定の1年生、橋本遥陽、筆者(塩月)の5名、および昭和女子大学 人間社会学部 初等教育学科の豊田千明先生率いる2年生、照井さくらさん、菊田藍々さんの2名で、静岡県庁の鈴木宏規氏に同行していただいた。株式会社ポーラ (POLA) 側はコーポレート室 コーポレートブランディングチームリーダーでフェムケアプロジェクトリーダーの後藤利佳子氏と同チームの重住朋佐氏が対応してくださった。

学生たちはこれまでのサッポロビール株式会社との連携活動報告や東伊豆町の特産品・お土産品の紹介、2025年2月中旬に玉川高島屋ショッピングセンターで開催予定のワークショップ企画案などについて発表した(写真9)。

株式会社ポーラ (POLA) との提携事業に関しては、これまで保育を専門とする大学が中心となり、ポーラ (POLA) が廃棄する化粧品を絵具(水溶性)にしたものを用いて、玉川高島屋のショッピングセンターに訪れた親子連れに絵を描いてもらう、SDGsを意識した子供向けワークショップを行ってきた。令和6(2024)年度から新しい枠組みとなり、昭和女子大学・跡見学園女子大学の塩月ゼミを中心として、さらに新しい事業を共同で展開しようということになっている(図4)。今後、塩月ゼミでは東伊豆



写真8 サッポロビール本社での見学
(2024年12月10日 鈴木宏規氏撮影)



写真9 株式会社ポーラ (POLA) 本社での発表 (2024年12月10日 塩月撮影)



図4 産官学連携事業のこれからの枠組み（静岡県庁 鈴木宏規氏 作成）

町で廃棄されるミカンや苺などの果物を使用した化粧品の開発など、化粧品のアップサイクルや地球環境保護に向けての多様なアイデアを提案していきたいと考えている。

おわりに

以上、令和6（2024）年の活動のうち、主に東伊豆町でのフィールドワーク、サッポロビール株式会社ならびに株式会社ポーラ（POLA）との連携事業活動について述べてきた。

現在、東伊豆町は人口減少や高齢化、団体旅行から個人旅行に移行した後の観光客減少など、様々な問題を抱えている。塩月ゼミではそのような問題を少しでも解決しようと、コロナ禍の時以外は毎年欠かさず現地でのフィールドワークを行い、観光名所や観光施設、飲食店などを訪れたり、女将をはじめとする地元の方々にインタビューをしたり、東伊豆の伝統文化「雛のつるし飾り」制作の体験をしたりしてきた。それにより、地元の魅力的な資源を再発見し、東伊豆町の活性化を目指すことを試みた。

具体的にはサッポロビール株式会社と東伊豆町、跡見学園女子大学が協力して伊豆特産の「いずのはる」を使用したカクテルを開発し、地元に来る観光客や地元の方々への販売を行った。また、地元の文化や歴史、自然環境の素晴らしさをアピールしたカクテル宣伝用のPOPづくりも実施した。このような地産地消、SDGsに関わる取組みを、さらなるカクテルづくりを通して持続発展させていくことが、今後の目標の一つである。

また、令和6（2024）年度から新たに始まった産官学事業として、株式会社ポーラ（POLA）や玉川高島屋と東伊豆町、跡見学園女子大学・昭和女子大学などが連携して実施する、地球環境にやさしく次世代の女性活躍を応援するプロジェクト（地域連携活動 みらいプロジェクト）がある。この事業の

実際の開始は、令和7（2025）年2月中旬に開催される玉川高島屋ショッピングセンターでのワークショップとなる。それゆえ、今後は本ワークショップの準備にも力を注ぎたい。

そして次年度以降は図4に示されているように、東伊豆町および各企業、他大学とも広く連携しながら、東伊豆町の認知度を上げ、観光客や東伊豆町のファン層を増やし地域活性化をもたらすための産官学事業をさらに積極的に進めていきたいと考える。

注

- (1) 「いずのはる」は伊豆で栽培される柑橘の品種「はるひ」の登録商標。
- (2) 活動内容の詳細は、塩月亮子・土方あかり 2022年「コロナ禍での静岡県東伊豆町地域活性化事業における経験共有と今後」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書3』pp.47-51、および塩月亮子・有井花織 2023年「塩月ゼミによる令和4（2022）年度静岡県東伊豆町地域活性化事業報告―「サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町オリジナルカクテルレシピ開発事業」を中心に―」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』pp.85-90参照。
- (3) 東伊豆町でのフィールドワークは年2回、夏期・冬期休暇中に実施してきた。令和6（2024）年度の冬期フィールドワークは2025年1月18日（土）～19日（日）にかけて1泊2日に行う予定である。
- (4) 令和6（2024）年度末には、二子玉川高島屋ショッピングセンターなどでの東伊豆町PR事業や成果発表会（東伊豆町連携大学学生交流会）なども実施する予定である。

文京区学生と創るアグリノベーション事業 令和6年度事業報告

観光コミュニティ学部まちづくり学科 篠崎健司

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科

板垣青来 川嶋美月 長谷川ひなた 赤間珠希 辻本弥音 戸ヶ崎愛香 樋口由菜

1. 事業の概要

本事業は平成3年度から盛岡市が友好都市交流を進めている文京区にある大学と連携し、市の農業の活性化に向けて、3カ年を一つの区切りとして行っているものであり、参加大学は個々のテーマの下、それぞれが調査研究に取り組んでいる。今年度は新たな3カ年の初年度として実施したものである。

本学は先の3カ年で「もりおか短角牛」をテーマにその生産農家とともに調査研究を実施した。その成果を受けて、本年度は生産者のグループ化を主なテーマとしてさらに調査研究を継続している。

2. テーマの概要

「もりおか短角牛」は、生産農家も少なく出荷量も限られていることから、市民であっても詳しくは認知されていない実態から、まずは地域住民等を中心に、夏山冬里方式という特殊な育成方法を「もりおか短角牛」の魅力の一つと捉え、姫神山の山頂近くにある広大な牧野で育つ「もりおか短角牛」を見もらうモデルツアーを企画した。そうした活動を生産農家とともに行う中で、モデルツアーを継続して行うためには、その実施主体となる生産農家を中心とした組織化が必要なのではないかと考え、まずは素朴に生産農家のグループ化をテーマにしてみようかということとなった。

今年度は、生産農家のグループ化に対する意向を調査するとともに、既存の農業者グループの実態を把握することとなった。

また、グループ化を進めるためには、生産農家どうしの情報共有が必要ではないかということから、そのためのツールなどについても検討していくこととした。

現時点における3カ年のテーマは以下のとおり

《3カ年のテーマ・計画》

初年度（令和6年度）「現状把握とグループ化の方向性の検討」

2年度（令和7年度）「グループ化に向けての戦略立案」

3年度（令和8年度）「グループ活動の試行」

3. 今年度調査研究の概要

(1) 農家の意向把握

グループ化の意向把握のため、アンケートおよびヒアリング調査を実施した。グループ化のモデルとして、若手女性の農業者グループができないかという意識を持ちながら調査を実施した。

ヒアリング調査（継続中）は、アンケート調査において調査協力を得られた方を対象に実施した。

1) アンケート調査の概要

期 間：令和6年7月中旬～

対 象 者：盛岡市内の世帯主が50代以下の畜産農家19人

市内の既存畜産グループ1つ

《結果からわかったこと》

○グループ化のメリット

- ・農家同士の情報共有や交流の機会を得やすい
- ・グループとして研修講師等を専門機関に依頼することが可能

○グループ化の課題

- ・30代以下の農家にとってはグループに同年代が少なく、加入へのハードルが高い
- ・最終的には属性に応じたグループ内での細分化も必要

2) ヒアリング調査の概要

調査期間：令和6年9月2～4日

対 象：黒毛和牛繁殖農家5名、短角牛繁殖農家2名

《結果からわかったこと》

○グループ化について

- ・農家同士での情報交換を積極的に行いたいと考えている人もいる



牧野にて短角牛繁殖農家の方からヒアリング



黒毛和牛繁殖農家の方からヒアリング

- ・グループに入りたいと考えているが、既存のグループにはなじめないという人もいる
- ・農業や家業に忙しく、グループ活動に時間が取られることの不安が大きい

(2) グループ化を支援している行政担当者へのヒアリング

岩手県では平成27年より「牛飼い女子応援事業」を実施しており、女性農業者のグループ化を支援していることがわかり、その担当者にヒアリングを行った。

調査日時：令和6年12月5日

《調査結果の概要》

○活動がうまくいっているグループの成功のきっかけや、継続・発展の要因

- ・農家さん自身が主導・意見を出して活動をすること
- ・無理なく続けられる活動回数（頻度）、活動時期を相談すること

○グループ化に向けて

- ・コアメンバーにぴったりはまってできる人がいればすごい
- ・理想論では難しい、意識を持った人を見つけることが重要
- ・年齢はある程度同じ方が良いが、（今回の対象と考えている）30代～40代の女性は仕事と育児で超多忙

4. 今後の調査研究に向けて

グループ化に向けて、生産農家のヒアリングを継続していく必要がある。特に女性農業者のキーマンとなる可能性が高い調査対象者へのヒアリングが残っていることから、引き続き調査を行う予定である。

2024年度 大井沢地域活性化協議会 農山漁村発イノベーション対策事業への協力について

観光コミュニティ学部まちづくり学科教授 土居洋平

1. はじめに ～協力の経緯～

山形県西村山郡西川町大井沢は、人口約170名の山間集落であり、2015年度に本学と西川町が包括連携協定を締結してから、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科（現 まちづくり学科）の土居ゼミナールが継続的に地域調査やイベントへの協力、ワークショップの実施運営等に関わってきた場所である。なお、昨年度までの大井沢との連携については、毎年の『ゆかり』でも報告している⁽¹⁾。

2. 2024年度の大井沢地域活性化協議会との連携事業の実施

昨年の『ゆかり』5号で報告したように、大井沢で組織された集落ぐるみの組織「大井沢地域活性化協議会」が、農林水産省の「農山漁村発イノベーション対策事業」の補助金を獲得している。また、昨年度はこの補助金をもとに大井沢での地域活性化に関わる活動計画の策定が行われ、そのワークショップの運営や関連事業の実施に土居ゼミナールが協力している（土居、2023、p.74）。

2024年度は、計画に基づいた各種事業の企画実施に協力をしたほか、学生1名が事業実施団体である株式会社大井沢I・S・Mに長期インターンとして現地に約100日間滞在し、情報発信業務および情報発信手法の伝達業務を担った。

まず、計画に基づいた新規事業として7月28日（日）に実施された、岩魚のつかみどりイベント「川じゃぼ～ん」の運営に、学生5名と教員が関わった。前日から大井沢に入り、会場設営の準備等の作業の手伝いを行うとともに、イベント実施に向けた打合せと担当部署の割振り等を行った。イベント当日は朝から準備作業を行い、受付・会場安全管理・岩魚の処理等の担当に分かれてイベント運営を担った。前々日迄に山形県北部は大雨であったため、当初はイベントの実施も危ぶまれたものの、前日から当日にかけて大井沢で大きな天候の崩れもなく、約100組の参加者は川の支流に放たれた岩魚のつかみ取りを楽しんでいた。学生も、普段経験することが難しい山間部の野外でのイベントの運営や岩魚の処理を



写真1 川じゃぼ～んで安全管理を担う様子



写真2 岩魚を焼く準備をする学生

行い、大きな刺激を受けたところであった。イベント終了後は、イベントの主催者である大井沢地域活性化協議会メンバーとの反省会を兼ねた懇親会も開催され、学生が山間部住民の地域への想いなどを直接聞ける貴重な場となった。

また、新規事業ではないが、例年どおり、大井沢湯殿山神社例大祭（9月7日（土）前夜祭・8日（日）本祭）に学生6名と教員で参加している。前夜祭では、早朝の幟立てから神社での神



写真3 地元住民と神輿を担ぐ学生

事、神輿の巡行、夜店の準備や運営を担った。また、神事である本祭にも参加し、山間部での祭礼行事についての理解を深めながら、地域住民との交流を深めている。

さらに、昨年度に3年次に進級ができなかったゼミ生が春学期で必要単位を取り終わったこともあり、秋学期に休学をして9月8日（日）から12月11日（水）までの約100日間、株式会社大井沢I・S・Mにて長期インターンを行っている。これは、昨年度に策定した計画のうちSNS等での情報発信を担う人材として登用され、自ら大井沢に住み、大井沢住民と交流をしながら様々な活動に参加しながら大井沢地域活性化協議会のSNSアカウントで情報を発信するとともに、その手法を株式会社大井沢I・S・Mの社員へと伝達するという業務を担うものであった。

学生は、慣れない山間部集落での生活のなかでも、大井沢住民との親睦を深め、各所で大いに歓迎されたようである。その様子は、大井沢地域活性化協議会のInstagram、X、フェイスブックアカウントで次々に発信された。また、動画撮影や編集の方法、各SNSへの投稿方法等を株式会社大井沢I・S・Mの社員に伝達することも上手くいったようで、学生が大井沢を離れた後も、同様の情報発信が現在に至るまで続いている。学生にとっては、2024年は想定外の留年で落ち込んでいた上半期と対照的に、下半期は大井沢においてかけがいのない体験になったようで、3年生に進級後も継続的に大井沢における活動への参加を表明している。

今回のような長期にわたる滞在は、通常の学生生活ではなかなか実施が難しいものの、長期休暇を活かしたある程度の期間のインターン等は実施の可能性があるものであり、今後も長期的な滞在ができるような仕組みの構築を検討したい。

補注

- (1) ゆかり1号（貴堂、2020、pp.71-79）、3号（土居、2022、pp.41-43）、4号（土居、2023、pp.91-93）、5号（土居、2024、pp.74-76）に大井沢を中心とした西川町との連携の様子が報告されている。

引用文献

- ・ 貴堂直、2020、「平成31年度（令和1年度）の地域交流関連活動記録」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 1号』跡見学園女子大学、pp.46-84
- ・ 土居洋平、2022、「コロナ禍での遠隔地との遠隔次行の実施の可能性—西川町お土産開発プロジェクトを事例に—」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 3号』跡見学園女子大学、pp.41-43
- ・ 土居洋平、2023、「大井沢観光マップ作成プロジェクト実施報告」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 4号』跡見学園女子大学、pp.91-93
- ・ 土居洋平、2024、「大井沢地域活性化協議会 活動計画策定事業 協力報告」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 5号』跡見学園女子大学、pp.74-76

2024年「文京まちたいわフェス」への協力・本学での実施について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

例年、本誌でも紹介している⁽¹⁾「文京まちたいわフェス」が、2023年度（2024年2月）も、本学文京キャンパス3階で開催された。このイベントは、文京区のまちづくりに関わる有志が集う任意団体「文京まちたいわ」が定期的に行っているもので、コロナ禍後から本学文京キャンパスにて開催している。また、開催にあたっては、本学地域交流センターの「協力」という形態をとっている。なお、例年2月にイベントを実施していることから、本誌への報告（原稿は1月締切）は、翌年度の報告書にて行っている。現時点で、2025年2月の文京まちたいわフェスの本学での実施も予定されているが、ここでは2024年2月に行われた「文京まちたいわフェス2024・冬」について報告する。

2. 文京まちたいわフェス2024・冬の実施について

文京まちたいわフェス2024・冬は、2024年2月11日（祝）に、本学文京キャンパス2号館3階のM2301・M2304・M2306及び3階オープンスペースにて開催された。イベントの企画・運営は、月1回の文京まちたいわミーティングで準備され、文京まちたいわメンバーのほか、本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科（現：まちづくり学科）土居ゼミナールの教員と学生も関わる形で準備が進められた。

当日は、10時より全体ワークショップ「あれから10年・これから10年」が開催された。これは、「文京まちたいわ」結成のきっかけとなった「文京区新たな公共プロジェクト」の一環で「文京ソーシャルイノベーション・プラットフォーム」事業が開始されてから10年が経過したことを踏まえ、この10年間で具体的にどのような新しい活動が生まれ、変化し現在に至っているのかを考えようという趣旨のワークショップであった。ワークショップでは、区内の地域の居場所・子育て支援施設「さきちゃんち petit」「ワークスペースさきちゃんち」を営む八木晶子氏の司会のもと、上記のプロジェクトの実施運営を担当した（株）エンパブリックの代表



写真1 全体ワークショップの様子



写真2 演奏を披露する本学教員と学生

取締役 広石拓司氏のコーディネートにて、区内の地域活動に携わる多様な担い手が、この10年の活動について入れ替わり立ち代わり報告を行った。ワークショップには本学学生も10名参加し、そうした地域活動の様子や担い手の想いを聞いた感想や、自分が文京区内の地域活動でできることなどを発表した。

お昼の時間には、活動1分プレゼンとポスターセッションが行われ、区内のまちづくりに関わる団体等が1分で活動内容を紹介した。また、お昼休憩の時間には、各団体のポスターの前に団体関係者が待機し、参加者との交流が図られた。

午後は、音楽や各種パフォーマンス、ワークショップや縁日を楽しむ「フェス」が行われた。まず、3階東会談前につくられた特設ステージにクラシック演奏者・バンド・各種パフォーマーが次々に登壇し、演奏や各種パフォーマンスを披露した。本学からも土居とゼミ生4人がオープニングアクトとしてオタマトーンによる演奏を披露している。また、M2306では区内在住のデコパージュアーティストによるハンドクラフトワークショップが行われ、多くの親子がワークショップに参加した。さらに、M2301では「子ども縁日」が実施されたが、これは前年同様、本学学生が企画運営したものであった。具体的には、「輪投げ」「射的」「ボーリング」「お菓子すくい」の4つのアトラクションを行うもので、また、会場内には区内で活動するパフォーマー「風船おじさん」も登場し、会場内の親子を大いに沸かせていた。

午前のワークショップには約50名、子ども縁日には115組200名の親子らが来場した。イベント全体では、スタッフ・発表者を含め総勢400名程度が参加する盛況なイベントとなったが、大きなトラブルなどもなく終わることができた。



写真3 子ども縁日の様子

補注

- (1) 過去に本誌1号(貴堂、2020、p.69)・4号(土居、2023、pp.49-50)・5号(土居、2024、pp.83-85)にて「文京まちたいわ」設立の経緯、本学での「文京まちたいわフェス」実施に至る経緯、2022年及び2023年度の本学での「文京まちたいわフェス」実施の様子を報告している。

引用文献

- ・貴堂直、2020、「平成31年度(令和1年度)の地域交流関連活動記録」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 1号』跡見学園女子大学、pp.46-84
- ・土居洋平、2023、「『文京まちたいわ』との協働ー「文京まちたいわフェス」の本学での実施」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 4号』跡見学園女子大学、pp.49-50
- ・土居洋平、2024、「2023年「文京まちたいわフェス」への協力・本学での実施について」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 5号』跡見学園女子大学、pp.83-85

みんなのわこらぼまつり 2024 への協力について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに～協力の経緯～

埼玉県和光市と本学は、2012年11月に相互協力に関する包括協定を締結し、主に国際交流を中心とした連携が行われてきた。また、2022年に本学の紹介により和光市がTJUPへと加入したことから、連携事業が拡大してきた（土居・中村、2023、p.111）。これを受けて、和光市で開催されている「みんなのわこらぼまつり」にも2022年より本学教職員・学生が関わるようになっていく（前掲書、pp.111-112、土居、2024、pp.80-83）。

2. 「みんなのわこらぼまつり」企画運営委員会

「みんなのわこらぼまつり」は、和光市市民協働推進課の呼びかけで集まった市民と学生などで構成される企画運営委員会が企画内容等を検討し、市役所職員のコーディネートのもとで実施を行う市民参加型のイベントである。企画運営委員会には本学から教職員2名、地域交流センターの呼びかけで集まった学生8名が参加した。また、TJUPの会員校の呼びかけもあり、大東文化大学からも2名の学生が参加している。今回の企画運営委員会は総勢で約30名であるので、約3分の1が大学関係者ということになった。なお、本学から参加の学生1名は2024年3月卒業の学生であったが、2月までは学生ボランティアとして参加したのちに4月からは和光市役所に就職し、このイベントの市役所側の担当者となっている。

企画運営委員会は、2月から毎月1回、日曜日の午前中に開催された。2月の運営委員会では、おまつりの基本コンセプトの検討やチーム分けが行われた。その後の企画運営委員会では、委員会運営・PR・コンテンツの各チームに分かれ、本学教職員・学生も各々の内容の検討を行っている。企画の検討はワークショップ形式で行われ、まずはチーム内で個々人が意見を出して、それをもとに実施内容が検討され、それを全体に報告して調整するという形で準備が進んだ。各チームに大学関係者と市民が混在し、同じ立場で企画を提案し準備を進めていくことは、学生にとっても大きな刺激になったようである。特に、3月迄は学生であった先輩が4月から市職員として活躍する姿は、後輩の学生たちにとって大きな励みにもなったようである。また、今回、TJUP会員校からの学生も参加したことから、本学学生と他大学学生の交流も進んでいた。



写真1 委員会での市職員（卒業生）・学生の様子

3. 「みんなのわこらぼまつり 2024」の実施

2024年5月25日(土)、和光市役所市民広場・サンアゼリア小ホール・展示棟にて、みんなのわこらぼまつり2024が実施された。前日の24日(金)には、企画運営委員会メンバーが各々の参加可能な時間に参集し、準備にあたった。また、当日は、9時から準備作業を行い、11時にイベントがスタートした。

企画運営委員会のメンバーは、舞台進行の管理から舞台チームが企画したファッションショーの運営、みんなのアートの運営、スタンプラリーの運営等に携わったほか、和光市のゆるキャラである「わこうっち」と「さつきちゃん」の出演の運営等も行った。また、イベントの最後を飾るグランドフィナーレでは、和光ブラジル太鼓チーム「VIDA」のメンバーの案内のもと、参加者全員で手作り太鼓等の演奏・行進が行われ会場は大いに盛り上がった。

コロナ禍もひと段落し、多くのキッチンカー等も参加して会場内で飲食を楽しみながらイベントを楽しむ参加者も多く、コロナ前のイベントの賑わいを取り戻した雰囲気があった。



写真2 前日準備の様子



写真3 イベント当日の様子

4. 学生への効果とその後

イベントの基本的な部分や企画後の準備については、和光市役所のフォローが大きく入っているといえ、企画運営委員会が担当する部分については委員会で検討・準備が行われたため、参加した学生も地域イベントの実施について実践的に学びながら、その楽しさについても実感したようである。

また、イベントも企画運営委員会参加者同士の交流は進み、和光市内でのその後のイベントに、企画運営委員会メンバーが関わることもあった。また、夏には企画運営委員会メンバーの交流会も行われている。さらに、年が明け新年度のみんなのわこらぼまつり2025年の企画運営委員会の募集が検討されるなか、2024年度の企画運営委員会のメンバーの中から2025年度への参加希望なども表明されるようになっていいる。イベントを通じて学生と市民のつながりが形成され、それが新しい活動へと展開しているところである。

引用文献

- ・土居洋平・中村英昭、2023、「和光市のTJUP加盟を契機にした連係活動の拡大について」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 4号』跡見学園女子大学、pp.110-113
- ・土居洋平、2024、「みんなのわこらぼまつり2023・和光市市民活動紹介冊子制作への協力について」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 5号』跡見学園女子大学、pp.80-82

文京ダイバーシティ・ユネスコ協会への協力と 本学での設立記念イベントの実施について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに～文京ダイバーシティ・ユネスコ協会と協力の経緯～

2024年5月に文京ダイバーシティ・ユネスコ協会（通称：文京ユネスコ）が設立された。この団体は、新宿ユネスコ協会理事を務める高山陽介氏が中心となり、文京区においてもユネスコ協会を設立すべく尽力し設立に至ったもので、設立と同時に東京都ユネスコ連絡協議会および日本ユネスコ協会連盟に加盟の申請をし、その後に承認されている。また、同協会はUNESCO憲章に賛同し、教育・科学・文化振興に関わる活動、とりわけ子どもが活躍する機会を提供する活動に力を入れていく予定であるという。

同協会の代表の高山氏は、文京区内で子育て支援の活動に長らく関わり、現在は不登校児の支援等を行う株式会社わでかの代表を務めている。また、2017年から文京まちたいわ等の文京エリアでのまちづくり活動にも参加されており、長らく本学学生が文京地域でのまちづくり活動等に参加する際の相談相手となってきた。さらに、本学学生が放課後学習支援活動等で関わる小日向台町小学校のPTA役員として、同小学校での朝の読み聞かせ活動の調整窓口も担ってきた。

2021年度以降、文京まちたいわフェスが過去の本学との連携の実績を踏まえ本学の協力名義を提供する形で本学文京キャンパスにおいて開催してきたこともあり、過日、高山氏から文京まちたいわフェスと同様、本学地域交流センターが協力名義を提供し、本学文京キャンパスにおいて「設立記念フェス」を実施できないか相談があった。地域交流センターでは、高山氏とのこれまでの関係性や団体の活動理念等を踏まえ、また、文京エリアでのまちづくりに関わる新しい動きが本学を起点に展開することが本学の広報にも貢献すると考え、協力名義提供および会場使用の依頼に応えることとした。

2. 文京ダイバーシティ・ユネスコ協会 設立総会・ 交流会の実施

2024年8月31日（土）の13時～17時にかけて、本学文京キャンパス2号館3階M2301教室（総会）・M2304教室（交流会）にて設立総会・交流会が実施された。

13時から実施された設立総会には、100名を超える参加者があり、まず、高山代表から設立に至る経緯の説明があった。説明では、文京区内にもユネスコの理念に基づき教育・科学・文化振興を行うプラットフォームの必要性が説かれ、特に、それを活動の企画運営にも活動の対象にもなる子ども・青年に参加してもらうことで、より有意義な活動が展開するといった点が強調され、その実現のために子ども理事や青年理事を設けたことなどが説明された。



図1 設立総会チラシ

その後、成澤廣修文京区長が来賓として挨拶を行い、団体設立の動きは5年程前から聞いていたが実現して喜ばしいということ、子どもの権利条例を準備している区としても団体の趣旨に賛同していること、更に、文京シビックセンター内に国連女性機関の事務所があることも踏まえ国連関連の取り組み学内で盛り上がることに大いに期待したいことなどが紹介された。続いて日本ユネスコ協会の池田理事から応援の挨拶が寄せられた。特に若者や子どもと一緒に活動を行う点に注目しており、高校生が事務局長をしていることを高く評価しているとのことであった。

総会に続いて行われた交流会には小中学生も参加し、全体で150名近くの参加となった。交流会では、子ども理事や青年理事が企画したユネスコや世界遺産に関するクイズや、廃材を使ったワークショップ、「Itoゲーム」というグループで数字を順に並べるゲーム、放射線が可視化される霧箱づくりなどが行われた。これらは、UNESCO憲章を学んだ子ども理事・青年理事が、それぞれ教育・科学・文化を題材にした企画を考え、実施を行ったもので、司会進行や説明なども企画者自身が行っていた。他地域のユネスコ協会の関係者によると、こうした子ども自身が企画し実施するイベントというのは、全国的にも珍しいとのことであった。

文京ダイバーシティ・ユネスコ協会は、名称に「ダイバーシティ」があることに象徴されるように、多様性を重視し性別や世代、障害の有無を乗り越える活動に力を入れていく予定であるという。本学地域交流センターとしても、活動の趣旨に賛同し、引き続き、同協会との連携を深めていきたいと考える。



写真1 設立総会で挨拶する高山代表



写真2 設立総会集合写真



写真3 交流会の様子

マンガならではの表現を体験する講座 ——現代テキスト表現ゼミの学生とともに

西原麻里

1. 富士見市 子ども文化芸術大学☆ふじみでの講座

本稿は、2024年8月31日に開催した「富士見市 子ども文化芸術大学☆ふじみ」の講座について報告するものである(図1)。

この講座は、富士見市在住の小学4年生から6年生が受講生となり、音楽や演劇といった身体を使った領域を学ぶ連続プログラムである。今回は初めての試みとして、マンガを題材にしたワークショップ形式の講座1コマを実施することとなった。そのため、筆者が文学部現代文化表現学科で担当している「現代テキスト表現(おもにマンガ)」ゼミの3年生に協力してもらうことで、ワークショップの内容を考案すること

にした。富士見市とは2回、学生たちとは1回、事前の打ち合わせをおこなった。決定したワークショップのテーマは、「マンガの技法を体験しよう」である。

マンガは、紙などの平面に線を描くことで表現するメディアである。その基本的要素は大きくわけて3つある。1つ目は「絵」で、人物や情景の特徴を捉え、その特徴をわかりやすく伝えることが必要とされる。2つ目は「ことば」で、フキダシの中や外にセリフを入れたり、ナレーションをつけたり、音や動きを文字によって表現したりする。3つ目は「コマ割り」で、四角の枠線で囲んだもの＝「コマ」を並べることで話を進めていく。さらにマンガには、「漫符(まんぷ)」という独特の表現技法がある。その場面で鳴っている音、あるいは通常は鳴らないけれども聞こえそうな音を表現した「音喩」、人物の動作や状態、情景を表現した「形喩」というものである。日本のマンガは、この漫符を用いて動きや心情を効果的に表すことを発展させてきた。

今回のワークショップでは、こうした表現技法を活用して自分なりの表現物を制作することで、小学校で学ぶ図画工作でも国語でもない、そして絵本やアニメとも異なる、マンガという表現技法の特徴や魅力をつかんでもらうことを主眼とした。そのために、『別冊宝島EX マンガの読み方』(宝島社、1995年)と、この史代の4コママンガ『ギガタウン漫符図譜』(朝日新聞出版、2018年)を参照し、上記のマンガの基本的要素と漫符の表現を実践することにした。



図1 講座のサポート講師となった学生4名
(文学部現代文化表現学科3年生)

2. ワークショップの内容

この講座は、1回あたりおよそ2時間程度である。そこで、作品の完成を目指すのではなく、マンガならではの表現を体験すること、つまり試行錯誤しながら漫符などを用いて描いてみることをワークショップのテーマとした。まずは、マンガならではの表現の特徴を、具体的な作品を事例にして解説した。たとえばマンガでは、犬のキャラクターがセリフ（人間の言葉）を喋っていたり、人間が頭の中で考えていたりすることが文字で可視化されることがよくある。しかし現実では、人間以外の動物が人間の言語を喋ることはないし、他者が考えていることが文字という形で読み取れることもない。こうした、現実にはありえないことがマンガでは頻繁に表現され、だからこそマンガは情景や心情を、躍動感や臨場感をもって内容を伝えることが可能になる。こうしたマンガというメディア独特の表現を知ることが主として、講座内容を組み立てた。

今回の講座の受講生はおよそ20名で、4名ずつのグループにわかれて着席した。またサポート講師として、4つの机にゼミの学生4名が一人ずつ着席した。学生のなかには普段からタブレットなどを用いてマンガやイラストを描いている者もあり、講座が始まるまで、受講生に自分の描いている作品を受講生たちに見せられるよう準備してもらった。また、一人あたりB4サイズの下書き用の紙5枚、マンガの原稿用紙代わりの画用紙5枚、主線を引くための定規を、主催の富士見市側で用意していただいた。受講生には、下書き用の鉛筆や消しゴムと主線を引くための黒のサインペンや修正液の持参を必須とし、可能であればカラーペンやクーピーペンシルなども持参してもらった。

まずは講師（西原）から20分程度、上記に記載した日本のマンガの基本的要素と漫符について講義した。受講生がマンガに接する頻度はひじょうに幅広く、マンガが好きで自分でも日常的にマンガの絵を描いている受講生から、ふだんはマンガをほとんど読まない受講生までいた。しかし、そうしたマンガに馴染みのない受講生も、漫符やコマ割りの特徴はすぐに把握することができていた。

講義の後、およそ1時間のワークショップを実施した。描くもののテーマは「いつもの絵日記をマンガにしよう」で、夏休みの思い出や体験したおもしろかったことを3コマのマンガにするというものである。制作の工程は、①描きたい内容を考え、言葉で書き出す、②下書き用の紙を使って、簡単な下書きを描く（マンガの「ネーム」）、③原稿用の紙に詳細な線を描く、④サインペンなどで線にペン入れをする、⑤下書き用の鉛筆の線を消す、という手順とした。初めに3コママンガ作品を例に挙げ、簡略な線で描くことや漫符を使うことの意義を伝え、それから制作に移った。

1時間弱の制作のあいだ、受講生たちはひじょうに熱心で集中して制作をおこなっていた（図2）。サポート講師の学生たちがキャラクターや漫符の描き方などを丁寧に指導すると、受講生たちはそれを真剣に受け取って絵を描いていた。受講生の作画のペースは大きく異なり、作品が完成したかどうかは受講生によって異なっ



図2 ワークショップ中の受講生たちとサポート講師の様子

た。こちらが観察した限りでは、ふだんからマンガに親しんでいたり日常的にイラストなどを描いたりする受講生は、作品の完成にいたることができたようだった。

制作時間の終了後、各グループで講評をおこなった。描いた作品を互いに鑑賞しながら、① ぶつうの絵日記とは描き方と違うと感じたこと、② 描くときに工夫したことや難しかったこと、③ マンガを描いて気づいたことや感想を述べあった。そこで出たコメントとして、「漫符を使うことで伝えたい内容がわかりやすくなった」や「音や動きの表現が難しかった」などがあった。

3. ワークショップの総括と今後の課題

今回のワークショップでは、出来事を3コマで表現するというテーマを設けた。そのため実施してみると、マンガとして描く前にまず描く内容（ストーリー）を考案することに時間が必要であることがわかった。ワークショップの主題を「マンガの技法を体験する」にしていたにもかかわらず、技法そのものにしっかり時間をかけられる構成にできなかったことが、大きな反省点である。描きたい内容が決まれば、マンガの絵にすることはさほど難しくはないようだった。もし次にこのような講座を実施する場合は、事前に描く内容を設定し、マンガの技法それ自体に試行錯誤ができるような構成としたい。

ワークショップ中は、受講生たちにサポート講師の学生たちが積極的に話しかけている様子が見られた。作画のポイントを伝えるために手本を描いたり、受講生がどのようなことに悩んでいるかを聞いて一緒に考えたりしていた。総じて、学生たちは楽しく「講師」としての役割をまっとうすることができていた。受講生にとっても学生たちにとっても、世代を超えて接する良い機会となったようである。

今回のワークショップは初めての試みであり、課題もあったが、現代文化表現学科の学びが地域と繋がる重要な機会になったと考える。この機会を設けてくださった富士見市に感謝を述べ、本稿を閉じたい。

障害福祉サービス事業所におけるボランティア活動

松井理恵

障害を持った人びとと地域社会の関係を考えてみたい。猪瀬浩平は『分解者たち——見沼田んぼのほとりで生きる』という著書の中で、障害を持った人びとが家庭の中に閉じ込められ、地域社会に出られなかった時代について書いている（猪瀬 2019）。猪瀬の記述を読みながら、私は祖母の言葉を思い出す。「理恵が生まれたとき、真っ先に手足の指が5本そろっているか確かめた。ちゃんと5本あって、ようやく安心した」。詳細は忘れてしまったが、このような内容だったと記憶している。祖母の言葉にはどこか引かかるものがあった。しかし、私よりもちょうど半世紀前に生まれ、20戸にも満たない小さな集落で暮らしてきた祖母は、障害を持った人が地域社会で生きる厳しさを実際に見聞きしていたのかもしれない。

一方、地域社会で障害を持った人びとが暮らすことは、周囲にも新たな世界を開く。先述した猪瀬が描く見沼田んぼ福祉農園は、その一つの例である。また、1970年代から日本で展開されてきた障害者の自立生活運動の中心は、まさに地域社会で障害者が暮らすことであった。私も大学生だった2000年頃、障害者の自立生活運動にボランティアとして関わった経験がある。脳性麻痺で寝たきりだった女性の介助は驚きと発見の連続で、今、振り返ってみると、本当のよい経験をさせてもらったと思う。しかし、当時はしんどかった。学生街だったので時間のある学生はたくさんいるはずだったが、常にボランティアが不足していた。ボランティアがいなければ、彼女は地域社会で暮らせなくなる。彼女の介助がひと段落すると、彼女の横で、介助ボランティアのリストに登録された知らない人に電話をかけつづけ、シフトを埋めようとした。柴田大輔の『まちで生きる、まちが変わる——つくば自立生活センター ほにゃらの挑戦』には、私が直面していた状況が第三者の立場から書かれている。当時は、ボランティアだけでは介助が回らなくなった結果、自立生活センターが設立される直前だった（柴田 2023）。重度の障害者が地域社会で暮らすと言っても、ボランティアという特定の関わりだけではとても継続できない、もっとオープンに地域社会と関わっていかなければならないと、大学生だった私は身をもって知っていたのである。

さて、千葉県習志野市で社会福祉法人習愛会が運営する障害福祉サービス事業所「花の実園」は、住宅街のど真ん中に位置している。障害福祉施設では非常にめずらしいケースだが、理由はとてもシンプルである。約50年前に東京湾を埋め立ててできた宅地で、開発計画の中に障害福祉施設が組み入れられていたのである。住民と関わる機会も多い。たとえば、毎週水曜日には花の実園で野菜を販売している。2000年に地区のショッピングセンターが閉店したため、特に、交通手段のないお年寄りには気軽に野菜を買いに行ける場所として親しまれている。また、春には「さくらまつり」を開催する。ステージでは、近隣の小学校、中学校、高校の音楽部、地域で活動する社会人の音楽団体などが演奏し、地元の飲食店が出店するイベントで、子どもからお年寄りまで多くの来場者で賑わう。2024年4月7日、松井（理）ゼミの有志（2年生2名、3年生2名）はこの「さくらまつり」にボランティアとして参加した。

ここで、学生たちがこのボランティアに至るまでの道すじも紹介しておきたい。堀智久は、イギリスのインクルーシブ教育との比較から、日本の教育現場では「みな同じ」が前提であると指摘する。本学の学生も、障害を持った人びとを教室の外部へと押し出す傾向のある日本の学校で教育を受けてきて

いる。障害を持った人びとと関わったことのない学生も少なくない。そこで、ゼミでメディアや映像作品に描かれた障害者像に関するテキストを読み、それぞれの学生が持つ障害者に対するイメージを解きほぐすところからスタートする(好井 2022)。そして、花の実園の見学、および利用者との実地交流をする。花の実園は生活介護と就労継続支援に分かれており、さらに就労継続支援は受注作業、木工作業、解体作業、園芸作業と分かれ、利用者が特



性に合った作業を担当している。学生たちは生活介護、受注作業、木工作業、解体作業、園芸作業と、花の実園全体を見学したうえで、いくつかの作業所で利用者と交流しながら作業に携わる。生活介護では、言葉ではなく、身振りや表情で利用者とコミュニケーションが取れる、という気づきを得る学生が多い。また、それぞれの作業を担当する利用者が学生に作業を教えてくれるのだが、そこで学生は、障害者／健常者という枠組みがひっくり返され、教える側／教わる側になる経験をする。こうして、障害を持った人びとと出会いについて、それぞれの学生が考えを深めたうえで、地域社会と障害を持った人びとの関係を考えることが重要である。

学生たちが「さくらまつり」にボランティアとして参加するのは2023年に続き、2回目であった。入場ゲートでの案内、ステージ出演者の誘導・ステージのセッティング、県や市のマスコットキャラクター担当、交通整理など、さまざまな側面から「さくらまつり」の運営に関わった。当日は天候にも恵まれ、多くの来場者があった。先述したように、花の実園は住宅街のど真ん中に位置しているため、来場者が施設沿いの歩道に立ち止まったり、駐輪したり、路上駐車したりすると、住民への迷惑がかかってしまう。こうした点に配慮しつつ、障害がある人も、ない人も楽しめるイベントを開催し、障害福祉施設が地域交流の拠点となり、地域社会と障害を持つ人びととの関わりの可能性が切り拓かれていく。今回の地域連携事業関連活動は、学生が多様性を組み込んだまちづくりを考えていくうえで、多くのヒントを与えてくれた。

引用文献

- ・堀智久, 2024, 「イギリスのインクルーシブ教育——日本の学校のあたりまえを疑う」好井裕明・宮地弘子・石岡丈昇・堀智久・松井理恵『ボーダーとつきあう社会学——人々の営みから社会を読み解く』風響社.
- ・猪瀬浩平, 2019, 『分解者たち——見沼田んぼのほとりで生きる』生活書院.
- ・柴田大輔, 2023, 『まちで生きる、まちが変わる——つくば自立生活センター ほにやらの挑戦』夕書房.
- ・好井裕明, 2022, 『「感動ポルノ」と向き合う——障害者像にひそむ差別と排除』岩波書店.

2つの地域貢献を通して

心理学部臨床心理学科 宮崎圭子

筆者が実践している拙い地域貢献（地域貢献と呼称するのもおこがましいのであるが……）は、大きく分けて2地域ある。1つは新座市、もう1つは豊島区である。今回、これらの活動を概要する機会を与えて頂いたので、以下にそれをまとめてみた。

1. 新座市における地域貢献

（1）就学支援委員会委員として

就学支援委員会（文部科学省は教育支援委員会の呼称を推奨）の機能は、以下のように期待されている（文部科学省、2012）。（ア）障害のある子どもの状態を早期から把握する観点から、教育相談との連携により、障害のある子どもの情報を継続的に把握すること、（イ）就学移行期においては、教育委員会と連携し、本人・保護者に対する情報提供を行うこと、（ウ）教育的ニーズと必要な支援について整理し、個別的教育支援計画の作成について助言を行うこと、（エ）市町村教育委員会による就学先決定に際し、事前に総合的な判断のための助言を行うこと、（オ）就学先の学校に対して適切な情報提供を行うこと、（カ）就学後についても、必要に応じ「学びの場」の変更等について助言を行うこと、（キ）後述する「合理的配慮」の提供の妥当性についての評価や、「合理的配慮」に関し、本人・保護者、設置者・学校の意見が一致しない場合の調整について助言を行うこと、以上の7点である。筆者はこの委員会委員として、毎年、委員会への出席、委員としての児童生徒の観察・巡回カウンセリングを行っている。定期的に開催される本委員会には、新座市立の小学校・中学校からの教諭、特別支援学校教諭、臨床心理系および教育系の大学教員、臨床心理士、言語聴覚士等々の専門家、計25人の委員が出席する。議論の基になっている情報は、主に、保護者から、学校から、本委員会委員の行動観察、巡回カウンセリング等々から得られている。各児童生徒の情報は、かなりの量となる。それらの児童生徒の情報をもとに活発な議論を重ね、適切な教育支援の方向性を探っていく。

（2）就学前相談・就学相談・巡回カウンセラー

上述の就学支援委員会以外に、7月末～8月初旬にかけて、毎年、就学前相談、就学相談を、新座市教育相談センターで行っている。就学前相談とは、義務教育である小学校入学前年度の時点で、保護者からの相談希望があった場合に、子どもとその保護者の合同面談を行うことである。子どもの課題に悩んでおり、小学校に就学することに不安を感じている保護者が多い。また、保護者の多くが学校教育システムをほとんど理解できていない。そんな保護者の方々の不安を可能な限り軽減し、子ども達のアセスメントを通して、就学に向けての支援を行うための相談である。就学相談とは、既に、学校に在籍している児童生徒とその保護者が対象である。相談内容は、上述の就学前相談とほぼ同じである。



新座市不登校支援計画「切れ目のない」支援プラン 新座市教育相談センター

<https://www.city.niiza.lg.jp/uploaded/attachment/63434.pdf>

2. NPO 法人サンカクシャ（代表理事：荒井佑介先生）との協働活動

2015年公認心理師法が成立し、臨床心理界が永らく待ち望んでいた心理職国家資格「公認心理師」が日本で初めて誕生した。2017年からの施行を受けて、跡見学園女子大学大学院臨床心理学専攻において、公認心理師養成カリキュラムが2017年より開始された。公認心理師施行規則により、学外実習が必須となった。貴施設サンカクシャは跡見の大学院実習生を受け入れて頂いた2018年からのお付き合いとなっている。貴施設は、親や身近な大人に頼れず課題を抱える、孤立しやすい若者が、社会で生き抜いていけるよう、彼らの生活の基盤となる「居・

職・住」の支援を提供している。毎年、春学期・秋学期各2名計4名の院生が実習生としてお世話になっている。筆者は、貴施設の実習担当教員として関わらせて頂いている。実習開始前の打ち合わせ、1人の実習生に対して2回の巡回訪問等々を行っている。貴施設は心理的に徹底したバリアフリーを心がけて運営されているため、誰がスタッフで、誰が利用者なのかが分からない。自己紹介をしないのである。スタッフの方々も若い方が多い。巡回訪問するたびに感じるのであるが、明らかに、一番浮いているのが誰だろう筆者である。2024年5月26日（日）は、サンカクシャ5周年記念パーティが開催され、筆者も参加させて頂いた。設立5周年を記念して「若者の仕事サポートに特化する新オフィスに向けたプロジェクト」が始動された。



家のようにくつろげる居場所、大人との交流拠点

サンカクキチ



引用文献

- ・ 文部科学省 (2012). 特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告 2. 就学相談・就学先決定の在り方について
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325881.htm

新潟県胎内市への視察訪問と取組提案 2024年度の活動

観光コミュニティ学部観光デザイン学科准教授 守屋邦彦

1. はじめに

守屋ゼミでは2023年度、2年次「基礎ゼミナール」の学外実習において新潟県胎内市を訪問し、観光施設の視察や現地関係者からお話を伺うとともに、訪問の成果報告として学生による滞在プラン提案を行った。これは、学生の立場では旅行者を受け入れる地域の方々がどのような思いを持って取り組んでいるのかを知る機会が少ないこと、また地域の方々にとっても若い世代の意見、気づきなどが新たな発見に繋がることを背景として計画・実施したものであった⁽¹⁾。

幸い、2023年度の活動が学生、地域の方々双方にとって効果のあるものと感じられたこと、また、(一社)胎内市観光協会より2024年度の受入をご快諾頂けたことから、今年度も2年生8名とともに新潟県胎内市へ視察訪問し取組提案を行った。

2. 学外実習の全体概要と2023年度の内容からの主な改善・変更点

2024年度の学外実習の基本構成は2023年度と同様、事前学習(周辺地域の各種観光資源を把握し胎内市と比較する)－現地訪問(地域の現状視察とお話を伺う)－報告会(オンラインで取組を提案する)としたが、2023年度の経験を踏まえ大きくは以下3点の改善・変更を行った。

1つ目は、現地訪問期間を2泊から3泊へ伸ばしたことである。これは昨年度の学生から「現地での滞在を楽しむ時間がもう少しあるとより良かった」との声をうけたもので、伸ばした時間でホテルでの滞在を楽しみつつ報告会での成果報告に向けたグループワークを行ったり、3日目の夕食時に幅広い地元関係者との懇談会を行ったりすることができた。

2つ目は、前述した3日目の夕食時に地元関係者との意見交換会を開催したことである。これは受入先である(一社)胎内市観光協会からのご提案で、胎内市へUターン、Iターンし地元で働く主に女性の方々と学生とで気軽な意見交換の場を設けて頂いた。現地訪問の中で、地域で働き、生活する方々と直接お話をする機会があったことは、学生たちにとって有意義な時間となった。

そして3つ目は、現地訪問の成果としての取組提案の内容に、昨年度の「ホテル滞在プラン」の提案に加え、「SNSでの情報発信方法」の提案を加えたことである。これは、現地訪問受入にご協力を頂いている胎内市商工観光課からのご提案で、SNSを日々活用している若い学生たちの感覚やアイディアを聞きたいとお話があり、内容に盛り込むこととした。

3. 現地訪問の行程

今回の現地訪問(3泊4日)の行程概略は以下の通りである。

■9月8日(日)

- ・(昼過ぎ) 中条駅集合→ホテルマイクロバスにてロイヤル胎内パークホテルへ移動
- ・オリエンテーション、(一社) 胎内市観光協会よりご挨拶、胎内市の現状等ご説明
- ・講話①：NPO法人ヨリシロ理事(1ターン移住者)より、現在の自身の地域おこし活動および胎内市の観光関連SNSの発信状況についてお話を伺う(写真1)
- ・視察①：徒歩にて、ホテル周辺の観光施設(胎内昆虫の家・クレーストーン博士の館・胎内フラワーパーク)を視察
- ・講話②：ロイヤル胎内パークホテル常務取締役より、胎内リゾートの現状等についてお話を伺う(併せてホテル客室ほか施設を視察)



写真1 胎内市での活動等についてお話を伺う

■9月9日(月)

- ・視察②：市マイクロバスにて胎内自然天文館を訪問・視察
- ・市マイクロバスにて乙地区へ移動
- ・視察③／講話③：乙まんじゅうや店主による、乙宝寺ガイドツアー及び地域での活動についてお話を伺う
- ・視察④：市マイクロバスにて樽ヶ橋エリアへ移動、観光施設(道の駅胎内・樽ヶ橋遊園)視察(写真2)
- ・市マイクロバスにてホテルへ移動



写真2 アルパカへの餌やり体験

■9月10日(火)

- ・午前：学生によるグループワーク(ロイヤル胎内パークホテル滞在プランの検討)
- ・午後：学生によるグループワーク続き＋SNSでの情報発信に関するディスカッション(※NPO法人ヨリシロ理事も参加)
- ・夕食時：地元関係者との意見交換会(写真3)

■9月11日(水)

- ・成果報告会に向けた検討状況の共有
- ・市公用車にて市街地へ移動
- ・視察⑤／講話④：いちごカンパニー関係者より、地域活性化への取組についてお話を伺う
- ・(昼過ぎ) 市公用車にて中条駅へ移動、解散



写真3 地元関係者との意見交換会

4. 成果報告会の開催

現地訪問終了の約1週間後、現地関係者と教員・学生とのオンライン会議を開催し、学生達が議論・作成した「ホテル滞在プラン」および「SNSでの情報発信方法」の取組提案を行う場を設けた。

「ホテル滞在プラン」については、首都圏在住の家族向け宿泊プラン（1泊2日）や新潟在住の家族向け日帰りプランとして、レンタサイクルやSUP体験、夜の天体観測など自然をメインに堪能するものや、“ロマンティックデートプラン”と題し市内を巡った最後に日本海の夕日・夕焼けの名所を訪れるものなどが提案された。また「SNS発信方法」については、“部屋の中の雰囲気がわかる写真やホテル内から見た景色などを投稿する”、“ホテルスタッフが出演するホテル紹介リール動画を作成し、テキストだけでは伝わらない温かさや人間味を伝える”、“SNSで影響力のあるインフルエンサーに協力を求め、実際に訪問してもらう”、“最近はTikTokを利用して旅行先を決めることが多いので、TikTokの活用にも取り組む”などが提案された。

5. まとめ

学外実習を通じて、学生たちが現地訪問の前に把握しておくべき事項や実際の観光の現場を体験することの意義をそれぞれ実感できたこと、また、現場の課題に対して具体的なアイデアを考え・提案する機会があったことは、学生たちの成長や今後の学びへの良い刺激に繋がったものと感じている。特にSNSでの情報発信方法については、若い世代の提案が地元関係者にとって参考になる部分も多く、提案後に実際にとりいれられたアイデアも出るなど、学生たちにとって昨年度以上にやりがいを感じられるものとなった。なお、昨年度に引き続き、現地訪問及びオンライン会議での提案内容について、地元新聞（新潟日報）から取材を受け、記事掲載もされた（大学HPでも紹介）ことから、地元及び大学の情報発信に多少なりともつながったものと感じている。

補注

（1）2023年度の活動詳細は「新潟県胎内市での観光による地域活性化の取組視察と提案」（地域交流センター年次報告書『ゆかり』No.5、pp.64-66）を参照。

謝辞

今年度も現地訪問を快く受け入れてくださり、各種ご協力を頂いた胎内市観光協会平川会長・須貝事務局長、ロイヤル胎内パークホテルの皆さま、胎内市商工観光課の皆さま、またご講話を頂いたNPO法人ヨリシロ神田様、乙まんじゅうや久世様、（株）小野組阿彦様はじめいちごカンパニー（株）の皆さまほか、今回の現地訪問に関わってくださった皆さまにこの場を借りて感謝を申し上げます。

銭湯からつなげる地域の輪

古澤実怜・石田結菜・川副早央里・小林咲葵

1. はじめに

「行こうよ！ 文京浴場 ☺ ～学生プロジェクト～」は2022年8月1日から始まった。このプロジェクトは、「レトロの良さを現代に活かす」をテーマに掲げ、跡見学園女子大学と拓殖大学の学生が共同で文京浴場組合を盛り上げる目的で活動している。

主な活動内容は、「SNSでの発信」と「イベントによる地域交流」の2つである。SNSでは、主にXとInstagramを活用し、記事の投稿を行っている。また、イベントではプロジェクト主体で企画したものや地域のイベントに参加するなど、幅広い取り組みを展開している。

本稿では、今年度の活動について報告し、次年度の活動について検討する。

2. 今年度の活動

「SNSでの発信」では、銭湯で行われる日々のイベントの案内や、営業・定休日の告知を行っている。さらに、SNSを通じて地元企業や他地域の浴場関係者とのつながりを深める活動にも力を入れている。今年度は、学生ならではの視点を生かし、親しみやすい投稿を心がけるとともに、銭湯に関するアンケートの実施やメンバーの声の発信にも積極的に取り組んだ。特に、銭湯を利用したことのない若年層にも関心を持ってもらえるよう、さまざまな工夫を凝らしている。

「イベントによる地域交流」では、今年度は「銭湯大学」をテーマにしたイベントを開催した。2024年3月には、初めての試みとなる「縁日」を銭湯・大黒湯で開催した（写真1）。縁日で行う企画の立案から、備品の準備までをメンバー全員で協力して一から作り上げた。当日は約250名もの方々にご来場いただき、大いに楽しんでもらった。初めて0からメンバーと共に取り組んだことで、達成感を味わうとともに、チームの絆を深める良い機会となった。



写真1 縁日のお菓子引換所にて (3月縁日)



写真2 オレンジフェスタの縁日の様子 (10月)



写真3 銭湯の湯舟で行ったスーパーボールすくい(10月縁日)



写真4 銭湯山車を巡行する学生たち(9月)

10月には拓殖大学で行われた「オレンジフェスタ」に参加し、バスボール作りや銭湯クイズなどを実施(写真2)。多くの子どもたちが楽しみながら銭湯について知ってもらうきっかけとなった。また、親御さんとの会話を通じて、「文京区の銭湯に行ったことがある」という話や「行ったことがない銭湯にも行ってみたい」という前向きな言葉をいただくなど、直接的なコミュニケーションを行う大切さを学んだ。

11月には銭湯・大黒湯で今年2回目の「縁日」を開催した(写真3)。前回の反省を踏まえ、事前申込制とし、よりゲームの数を増やし、ルールを分かりやすくするなど改良を加えた結果、混乱も少なく多くの人に満足してもらえたイベントとなった。学生と地域の方が直接関わることで、コミュニティの輪を広げることができたと感じている。

同じく11月に開催された「大黒湯コンサート」では、大黒湯で拓殖大学アカペラサークル「三歌月」と跡見学園女子大学マンドリンサークルOGによる演奏が行われた。浴室内に響く美しいハーモニーに、会場全体が癒される素晴らしい時間となった。マンドリンサークルの演奏では馴染みのある楽曲も多く、お客さんが自然と体を揺らすなど、終始和やかな雰囲気が包まれた。一方、アカペラサークルによるザ・ドリフターズの「いい湯だな」の合唱は、銭湯ならではの一体感を生み出し、大変印象的であった。このイベントは2大学が連携するプロジェクトだからこそ実現できたものであり、学生同士のつながりも深めるきっかけとなった。

上記のイベント開催のほか、9月8日に開催された簸川神社例大祭に本プロジェクトメンバー6名が参加し「銭湯山車」の巡行をさせていただいた(写真4)。この銭湯山車は、文京建築会ユースが文京区内で廃業した銭湯の備品や資材を集めて制作したものであり、文京の歴史と文化、そして銭湯の魅力が詰まった山車である。猛暑日であったため、子どもたちが山車に設置された蛇口やシャワーから出る水を楽しんでいた。銭湯をきっかけとして、大学と地元町会・団体とつながり交流を深める貴重な機会であった。

これらのイベントを通じて、メンバー同士が大学や学年の垣根を超えて協力し合い、イベントを成功させる中で達成感を共有することができた。その結果、メンバー間の繋がりがより深まった一年となった。

3. 来年度にむけて

今まではオレンジフェスタや縁日など、イベントの多くが主に「子ども（小学生以下）」を対象にしたものであった。しかし、次年度からはこれらに加えて、もっと幅広い年齢層の方に楽しんでもいただくために「大人向け」のイベントも実施してみたら良いのではないかという意見が出ている。

4月中旬に大黒湯をお借りして行った新メンバー歓迎会では、「大人向け」のイベントとして、夏休みにプロジェクトメンバーが日替りで番台に立つ「番台体験」や銭湯でお酒を飲むことができる「銭湯ジャズバー」などのアイディアが出た。「番台体験」ではプロジェクトメンバー自身が番台に立つことによって、地域の方々と直接的な交流も図ることができると考えている。また、そのようなイベントは、銭湯に行ったことがない方も興味を持って銭湯に足を運んでくれるきっかけになるのではないかと考えている。

銭湯はただお風呂に入りに来る場所ではなく、「地域交流の場」として、とても重要な場所であると考えている。銭湯に来ていただき、地域の方同士が会話したり、見ず知らずの方たちが気がついたら「風呂友達」になっていたりする。そういった「出会いや繋がりを生む場所にしたい」という思いで上記のような案を次年度の企画として検討している。

今後も大学や年齢を超えた繋がりを広げながら活動を進め、古き良き文化である銭湯の存続に寄与していきたいと考えている。

第5回「文^{ふみ}の京書道展^{みやこ}」開催報告

文学部人文学科教授 横田恭三

はじめに

「文の京書道展」も回を重ねて5回までこぎ着けることができました。会場は、昨年度オープンした「大塚地域活動センター」（茗荷谷駅から徒歩1分の中央大学茗荷谷キャンパス2階）のオープンスペースを使用させて頂きました。この会場は普段、催し物がないとき児童生徒の自主学習に使えるフリースペースとなっているため、展示の際は可動式のパネルを配置する必要があります。この点、少々煩雑であり、留意が必要です。

さて今回は昨年に続き、2回目の使用です。

以下、開催にあたって準備状況と展示概況を報告いたします。

1. 跡見学園女子大学主催 第5回 文^{ふみ}の京書道展^{みやこ}（開催概要）

目 的：（1）本学の書道を愛好する学生の育成と発表機会の提供
（2）本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供

会 場：文京区立大塚地域活動センター 2階 オープンスペース

展示期間：7月1日（月）16：00 ～ 7月12日（金）13：00

作品点数：47点

予 算：地域交流センター予算

搬 入：7月1日（水）14:00～16：00

搬 出：7月12日（金）13：00～14：30

出品者

- ① 本学書道実習受講者および本学書道愛好者で出品を希望する者 … 21点
- ② 文京アカデミア書道講座受講生（表装代はアカデミア講座で支出） … 19点
- ③ 有力高校書道生徒優秀作品 … 3点
- ④ 書道科教員（非常勤を含む） … 4点 計47点

タイムスケジュール

4月下旬：書道実習担当教員へ依頼文、学内広報、ポータルに掲載。

→ 出品希望を募る →

新座Cの学生は6月12日（水）締め切り（書道科に提出）

文京Cの学生は6月14日（金）締め切り（同 上）

6月15日（土）表具店へ送付 → 2週間後に表装された作品が返送される。

7月1日(水) 14:00～ 展示作業

作業は書道科教員(横田)のほか、地域交流センター職員等

7月12日(金) 13:00～ 搬出作業

作業は書道科教員(横田)のほか、地域交流センター職員等

外部への広報

- ・大塚地域活動センターに対して、区の広報誌へ掲載を依頼
- ・大学HPへの掲載(予告と報告)

この「文の京書道展」は例年と同様、文京区民・本学学生・首都圏の書道部活動有力高等学校生徒の作品を通して、書道文化の発展と交流とを意図して開催しているものです。文京区民と一口に言っても、実は文京アカデミーのバックアップを受けた「アカデミア書道講座」(横田担当)に参加された文京区民の方々を指します。

大塚地域活動センター製作のポスター

2. 展示会場に掲載した「挨拶文」

跡見学園女子大学主催 第五回〈文の京(ふみのみやこ)書道展〉

跡見学園女子大学主催 第五回〈文の京書道展〉を開催します。

展示は ①本学学生有志

②文京区アカデミア講座受講生作品(テーマは木簡の書)

③首都圏の高等学校生徒作品

④本学書道科教員作品 を展示しています。

高校生から熟年に至るまでの幅広いメンバーによる作品の豊かな書表現を楽しんでいただければ幸いです。

ご高覧のほど、宜しく願い申し上げます。

令和六年七月吉日

跡見学園女子大学書道科 横田恭三

3. 出品者および作品一覧（敬称略）

〈跡見学園女子大学有志の作品〉

① 人文学科4年	林田美咲	「高野切第三種」
② 臨床心理学科4年	小島千明	「樂毅論」
③ 人文学科3年	浅見美希	「蘭亭序」
④ 人文学科3年	新井すぐり	「書譜」
⑤ 人文学科3年	衛藤美月	「始平公造像記」
⑥ 人文学科3年	小國美奈希	「光定戒牒」
⑦ 人文学科3年	藤原 悠	「美人董氏墓誌銘」
⑧ 人文学科3年	星野汐紗	「秦始皇帝詔版」
⑨ 人文学科3年	村元未来	「温泉銘」
⑩ 人文学科3年	結城咲来	「風信帖」
⑪ コミュニケーション学科3年	前田友紀恵	「薦季直表」
⑫ マネジメント学科3年	三橋千晴	「屏風土代」
⑬ 人文学科2年	関口莉央	「牛橛造像記」
⑭ 人文学科2年	関口莉乃	「皇甫府君碑」
⑮ 人文学科2年	西川綾菜	「孔子廟堂碑」
⑯ 現代文化表現学科2年	稲橋優心	「十七帖」
⑰ マネジメント学科2年	中島小百合	「建中告身帖」
⑱ 人文学科1年	小塚和奏	「松風閣詩巻」
⑲ 人文学科1年	平良ダニエラ	「蘭亭序」
⑳ 現代文化表現学科1年	佐藤菜那	和歌三首創作
㉑ コミュニケーション学科1年	秋山智佳	「風信帖」



会場全体の風景



教員および高校生招待作品

〈アカデミア講座生作品〉

アカデミア講座は、5月9日から6月13日までの6回講座（10：30～12：00）で行った「私も書ける“木簡”に挑戦！」というタイトルの講座です。そこで臨書した木簡をベースに、四字程度の文字で木簡風の作品を制作し、軸装に仕立てて展示。出品は任意でしたが、講座に参加した20名中19名の方が出品されました。（出品者氏名は割愛）

〈高等学校の招待作品〉

- ① 都立深川高等学校 3年 満田真利江 「劉墉 七言古詩」
- ② 川越南高等学校 2年 坂元奈々 「高野切第三種」
- ③ 星野学園中学高等学校 2年 川瀬愛桜 「臨鄧石如〈篆書〉」

〈書道科教員賛助出品〉

- ① 本学兼任講師 斎藤まゆみ（紫香） 創作仮名一首
- ② 同 津田好一（貞巖） 創作〈蘭亭序の一節「不知老之将至」〉
- ③ 同 伊藤亜美（亜穹） 創作「處静脩閑」
- ④ 本学教授 横田恭三（閑雲） 創作「路接青雲」

4. 展示を終えて

本学の出品者は、昨年の16名に対して、今年は30%増の21名でした。展示会場のスペースから考えれば、これ以上増加すると窮屈な展示になる危険性があるものの、出品者増は歓迎すべきことと言えます。学内のポータルを使って公募した結果、書道実習を受講していない学生からも問い合わせがあり、実際に出品してくれました。

今回、有力高等学校から出品は3点に留まりました。その理由はいくつかあるのですが、おおきな原因は先方との連絡が上手くいかなかったことです。早い段階（4月中旬）で、先方へ内々の依頼をし、作品の準備をしてもらう必要があるように思います。

展示する以上、参観者数が気になるところです。ここ大塚地域活動センターは、中央大学の建物の2階にあるため、外部の方々からするとやや分かりにくい場所です。本学の学生に参観してもらうためには、学内で開催するのが望ましい訳ですが、残念ながら50点近い作品を展示できるスペースはありません。今後、同様な発表を行う場合はやはり大塚地域活動センターを使わせて頂き、区民の方々に参観してもらう機会を設けることが大切であると考えています。今回、広報用のチラシを作成してもらい、区民に大きくアピールしていただきました。一定の効果はあったものと思っています。

最後になりましたが、今回も昨年に引き続き地域交流課の絶大なるサポートをいただき、ここまで歩みを進めてくれることができました。とりわけ大塚地域活動センターと密に連絡を取って準備してくださった地域交流課の福島恵さん、そして展示作業にあたり、福島さんのみならず、照沼愛課長にまでお手伝い頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

菊坂跡見塾所蔵資料調査報告 (5)

川副早央里・新井美鈴・大迫陽毬・黒木真悠・小玉采奈・小山風咲・佐藤葵・
鈴木未来・鈴木みづき・津島誇乃佳・土田芽依・弘真生・増田えみり・松井優花

1. 本稿の目的

本稿の目的は、2024年度に実施した菊坂跡見塾に所蔵されている文書や道具等の調査活動の成果を報告することである。

菊坂跡見塾の前身となる旧伊勢屋質店は、万延元(1860)年の創業から昭和末期に廃業するまで約130年の歴史をもつ。廃業後、平成27(2015)年に跡見学園が取得し菊坂跡見塾として一般公開するようになり、現在は教育・研究活動及び地域交流の拠点として活用されている。

学内の有志学生と教員で構成する跡見「学芸員」in 菊坂は、この菊坂跡見塾を拠点としてさまざまな調査研究活動や地域交流活動を行っており、その一環として2020年度から菊坂跡見塾に残る未調査の生活用具等の資料について、どのようなものが、どこに、どのくらいあるのかという基礎的な情報を把握するために「菊坂跡見塾所蔵資料調査」を継続して行っている(新垣ほか2021、磯田ほか2022、秋谷ほか2023、川副ほか2024)。

本稿では、2024年4月以降行った菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果について報告する。

2. 調査の概要

今年度は、跡見「学芸員」in 菊坂として活動するメンバーのうち14名(教員1名、4年生4名、3年生3名、2年生2名、1年生4名)で菊坂跡見塾所蔵資料調査を実施した。メンバーの所属大学や学部学科、学年については表1の通りである。

今回報告するのは、2024年4月1日から2024年12月31日の期間に実施した調査の成果である。

これまで、旧伊勢屋質店の「座敷」(2020年度・2021年度・2022年度実施、『ゆかり』2・3・4号に掲載)、「茶の間」(2021年度・2022年度実施、『ゆかり』3・4号に掲載)、「台所」(2022年度・

表1 調査に参加したメンバー

川副早央里(跡見学園女子大学 地域交流センター助教)	松井優花 (同 文学部人文学科3年)
黒木真悠 (同 文学部人文学科4年)	鈴木みづき(同 文学部人文学科2年)
小山風咲 (同 文学部人文学科4年)	新井美鈴 (同 文学部人文学科2年)
弘 真生 (同 文学部人文学科4年)	大迫陽毬 (同 文学部人文学科1年)
増田えみり(同 文学部人文学科4年)	佐藤 葵 (同 文学部人文学科1年)
小玉采奈 (同 文学部人文学科3年)	鈴木未来 (同 文学部人文学科1年)
津島誇乃佳(同 文学部人文学科3年)	土田芽依 (同 文学部人文学科1年)

2023年度実施、『ゆかり』4・5号に掲載)における所蔵資料の調査を行ってきた(図1)。今年度は、調査が完了していない「台所」(特に戸棚)の調査を継続した。

調査時は、調査対象とする生活用具の資料に番号を付したタグを取り付け、それぞれの資料について「菊坂跡見塾資料調査情報カード」を記入(図2)、資料をデジタルカメラで撮影し、EXCELにてデータ入力を行った。



写真1 調査の様子



写真2 調査の様子

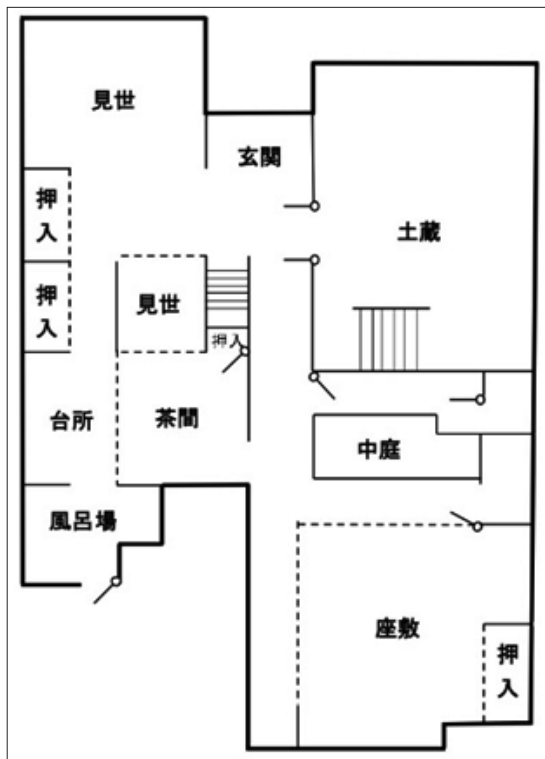


図1 菊坂跡見塾1階の見取り図

菊坂跡見塾資料調査情報カード					記入日: 2020 年 月 日	
資料番号						
よりがな					点数	
名称						
法量	縦	横	高	径(φ)	cm	
材質	植物	紙 木() 竹 他()				
	土石	土() 石() セメント ガラス 陶器 磁器				
	金属	鉄 銅 鋳 鋼 青銅 真鍮 アルミニウム ジュラルミン ステンレス 鋼合金 他()				
	合成樹脂	プラスチック セルロイド ゴム ビニール ナイロン 他()				
	その他					
時代	作成・使用				年代	
項目分類					形態分類	
収蔵場所						
作者						
備考						
記入担当						

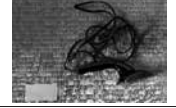
写真撮影☐ カード確認☐ データ入力☐ 再調査(要・不)

図2 菊坂跡見塾資料調査情報カード

3. 調査結果

2024年度の調査では、8点の資料を調査することができた。詳細は表2に記載した通りである。今回は、台所の戸棚を調査したため、炊飯器やかき氷機などの生活家電のほか、焼鏝などの台所用具を確認することができた。

表2 2024年度に作成した調査資料目録

資料番号	名称	ふりがな	点数	法量	材質	備考	写真
194	杓子	しゃくし	1	縦51.1× 横14.0× 高3.9× 直径14.0cm	ステンレス		
195	練炭置台 ひよっこ	れんたん おきだい ひよっこ	1	縦9.5× 横18.3× 高10.8cm	土		
196	アイロン	あいろん	1	縦5.2× 横24.0× 高7.9cm	鉄、 プラスチック	HITACHI IRON 1K-612 100V 80W 81-159 Hitachi, Ltd ISOねじ	
197	焼鏝	やきこて	1	縦35.0× 横3.5× 高6.0cm	木、 金属		
198	焼鏝	やきこて	1	縦35.0× 横4.8× 高6.4cm	木、 金属		
199-1	炊飯器	すいはん き	1	縦23.6× 横30.2× 高20.3cm	鉄、 ステンレス、 プラスチック	三菱電機株式会社 サイズ：15L 三菱自同電気釜 A-155形 100V 550W 81-97	
199-2	炊飯器 接続コード	すいはんき せつぞく コード	1	縦218.5× 横3.3× 高2.0cm	鉄、 銅、 プラスチック、 布	三菱電機株式会社 凸側 125V 15A 凹側 250V 6A	
200	かき氷機	かきごおり き	1	縦21.6× 横26.7× 高47.4cm	金属	「初雪」[HATSUYUKI]の記載あり。 宝船の絵あり。	

4. 今後の活動に向けて

以上、今年度を実施した菊坂跡見塾所蔵資料調査について報告した。今年度は、他の活動に時間を割くこととなり、本調査に十分な時間を確保することができず、例年と比較して確認できた資料点数が少なかった。しかし、菊坂跡見塾に残る資料の実態を明らかにすることは、博物館としての菊坂跡見塾



写真3 跡見「学芸員」in 菊坂の今年度初回の全体ミーティングの様子

の充実化のためにも、地域の歴史発掘のためにも、重要な活動である。今後も調査を継続することはもちろん、確認された資料の適切な保存、そして資料の分析やその成果発表、一般公開など多角的に跡見「学芸員」in 菊坂の活動を継続していきたい。

参考文献

- ・新垣夢乃・大櫛優理・菊地春姫・末吉はづき・服部胡桃・松尾映里奈・松延咲季・森本千桜・渡邊菜月、2021、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告」『ゆかり』2、P.59-70.
- ・磯田みずき・伊藤奈々・大櫛優理・菊地春姫・清水麻衣・末吉はづき・服部胡桃・松延咲季・黛沙也加・水村美穂・森本千桜・山岡沙織・若曾根南美・渡辺恵未・渡邊菜月、2022、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(2)」『ゆかり』3、P.74-83.
- ・秋谷香菜子・新垣夢乃・井田百香・磯田みずき・鬼塚未奈・黒木真悠・小嶋美優・小山凪咲・中井結子・黛沙也加・水村美穂・山岡沙織・山上真由子・渡辺恵未・渡邊菜月、2023、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(3)」『ゆかり』4、P.119-126.
- ・川副早央里・山上真由子・新垣夢乃・磯田みずき・大屋恵実子・黒木真悠・小玉采奈・鈴木みづき・関鈴菜・中川大資・長根旭美・弘真生・渡邊菜月、2024、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(4)」『ゆかり』5、P.103-108.

旧伊勢屋質店特別企画展

「質屋と女性～一葉も通った伊勢屋質店～」開催の記録

小玉采奈・川副早央里・津島誇乃佳・新井美鈴・大迫陽毬・大屋恵実子・黒木真悠・
小山風咲・佐藤葵・清水菜摘・鈴木未来・鈴木みづき・長根旭美・西川綾菜・松井優花

1. はじめに

本大学が所有する旧伊勢屋質店は、1860（万延元年）年に創業し、1982（昭和57）年まで約120年にわたり文京区本郷菊坂で営業していた質屋である。この建物は、本学所有になってから「菊坂跡見塾」と名を変え、学生有志団体の跡見「学芸員」in 菊坂が活動拠点とし、さまざまな活動を行っている。

今年度、跡見「学芸員」in 菊坂では「質屋と女性～一葉も通った伊勢屋質店～」という企画展を開催した。約120年にわたる伊勢屋質店の歴史のなかで、明治期および昭和初期の女性の質屋利用者の状況を分析し、その成果を報告した。明治期については伊勢屋質店に通った樋口一葉の日記、昭和初期については昨年度から跡見「学芸員」in 菊坂メンバーで翻刻を行っている柳町支店の質物台帳（昭和12年～13年）を分析した。時代は異なるが、これらの記録からは当時の女性たちの暮らしや質屋の利用状況の一端を読み解くことができた。

また、今回の企画展では、小学生を主な対象とし、子供たちにも楽しんでもらえるよう工夫した。展示パネルは、小学生にも分かりやすいように表現を使い、親しみやすいデザインで制作した。また、小学生向けのワークショップ「質屋ごっこ」を実施し、子供たちが遊びながら学べる場を提供した。さらに、『樋口一葉赤貧日記』の著者である伊藤氏貴先生をお招きし、トークセッション「女性職業作家誕生～一葉はなぜ日本初の女性職業作家となったのか～」を開催した。樋口一葉が日本初の職業女性作家ということに焦点を当て、一葉の生涯や作品について貴重なお話を伺うことができた。

今年度の参加メンバーは15名であり、企画、展示パネルの作成、ワークショップの準備、トークセッションの準備、広報、会場設営、企画展開催中の運営や解説を行った。本稿では、この企画展の準備から開催に至るまでの経緯と開催時の様子について報告する。

企画展概要

タイトル：「質屋と女性～一葉も通った伊勢屋質店～」

会 期：2024年11月16日・23日・30日／12月7日・14日（土）12時～16日

会 場：旧伊勢屋質店（文京区本郷5-9-4）

企 画：跡見「学芸員」in 菊坂

主 催：跡見学園女子大学地域交流センター

協 力：神奈川大学歴史民俗学科学生有志

来館者数：317名

メンバー一覧：

川副早央里（跡見学園女子大学地域交流センター助教）

黒木真悠（跡見学園女子大学文学部人文学科4年）

小山凧咲（同文学部人文学科4年）
長根旭美（同文学部人文学科4年）
小玉采奈（同文学部人文学科3年）
津島誇乃佳（同文学部人文学科3年）
松井優花（同文学部人文学科3年）
清水菜摘（同文学部現代文化表現学科3年）
鈴木みづき（同文学部人文学科2年）
西川綾菜（同文学部人文学科2年）
大迫陽毬（同文学部人文学科1年）
大屋恵実子（神奈川大学国際日本学部歴史民俗学科3年）

2. 企画展の開催に至るまで

2-1. 今年度の企画展のテーマとねらい

企画展は、2024年11月16日から12月14日まで毎週土曜日に旧伊勢屋質店で開催した。本企画展は昨年翻刻した台帳データを活かしつつ新たな視点から分析したいと考え、伊勢屋に通った「女性の利用者」に焦点を当てること、そして、大人だけではなく子どもたちにも楽しんでもらえるような企画にしたいと考えた。「女性の利用者」に焦点を当てた理由は、昨年度から行っている伊勢屋質店柳町支店の質物台帳の分析において、男女で質屋の利用状況に違いがありそうだと感じていたこと、そして自分たちも女子大学に通う女子学生として当時の女性たちの暮らしに関心を持ったからである。

また、子どもの視点も意識した企画としたのは、一般開館や過去の企画展では大人の来館者が多かったために、今回は子どもたちにも文化財である旧伊勢屋質店に足を運んでもらい、質屋の仕組みや現代との暮らしの違いを知ってもらいたいと考えたからである。企画展で展示するパネルは、小学生が



企画会議の様子

関心を持ち理解できるような内容にするよう心掛けた。また、パネル展示に加え、小学生向けに「質屋ごっこ」というワークショップを企画し、実際に質屋の体験を通じて理解を促進した。参加メンバーは、質屋をどのように小学生に分かりやすく伝えるか、試行錯誤を重ねた。

さらに、本展の調査において大きな助けとなったのが、明治大学教授の伊藤氏貴先生の著書『樋口一葉赤貧日記』である。本書では、「お金」という観点から女流作家・樋口一葉の人生や生活を読み解いており、どのような生活状況のなかで一葉が伊勢屋質店を利用していたのかが解説されている。このご縁から、伊藤先生にお越しいただき、樋口一葉に関するトークセッションを開催することも企画した。

2-2. 広報活動

広報の準備は、2024年9月下旬より開始した。広報を行うにあたり、川副早央里、小玉采奈、長根旭美の3名でチラシの作成を行った。作成期間は約2ヶ月である。チラシの背景は、『質物台帳』風のデザインとなっている。また、子供たちが親しみやすいように樋口一葉風のオリジナルキャラクターを作成し、広報やパネルに活用した。チラシは、大学内各所、文京区内外関係組織、菊坂町会、近隣小学校にて配布したほか、跡見「学芸員」in 菊坂のSNSでの広報も行った。

特別企画展
しちや じょせい
質屋と女性
いちよう かよ いせや しちてん
一葉も通った伊勢屋質店

明治期と昭和初期の女性の暮らしや質屋利用を分析したパネル展
※申込不要 ※詳細要覧

小学生向けワークショップ「質屋ごっこ」
※事前申込 ※詳細要覧

一葉忌11/23限定
トークセッション「女性職業作家誕生」
※事前申込 ※詳細要覧

入場 無料

各日先着20名にオリジナル缶バッジをプレゼント！

2024（令和6）年
11月16・23・30日（土）
12月7・14日（土）
開館 12時～16時（最終入場は15時30分）

菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）
東京都文京区本郷5-9-4
【主催】跡見学園女子大学地域交流センター
【企画】跡見「学芸員」in 菊坂

チラシ表面

伊勢屋質店は、万延元年（1860）に創業し、昭和57年（1982）まで約120年にわたり営業していた質屋です。私たち跡見「学芸員」in 菊坂は、この旧伊勢屋質店を活動拠点として、これらの文化財を活用して調査研究を行っています。

今回の企画展では、約120年にわたる伊勢屋質店の歴史のなかで、明治期および昭和初期の女性の質屋利用者の状況を分析した成果を紹介します。明治期については伊勢屋質店に通った樋口一葉の日記、昭和初期については昨年度から跡見「学芸員」in 菊坂メンバーで観測を行っている御町支店の質物台帳（昭和12年～13年）を分析しました。時代は異なりますが、これらの記録からは当時の女性たちの暮らしや質屋の利用状況の一端を読み解くことができます。子どもたちにも楽しんでもらえるように、子ども向けの表現でパネルを作りました。

子どもから大人まで、どなたでもご来場いただけます。ぜひお気軽にお越しください！

小学生ワークショップ
「質屋ごっこ」
・開催日時：全開催日11:00～12:00
・受付：10:50～
・対象：小学生
・開催人数：各日10名
・参加費：無料
・申込方法：事前申込制・先着順
下記のいずれかより申込みください。
・申込締切：各開催日1日前まで

トークセッション
『女性職業作家誕生—なぜ樋口一葉は日本初の女性職業作家になったのか？』
・ゲスト：伊藤氏貴先生（明治大学文学部教授、著書『樋口一葉赤貧日記』ほか）
・開催日時：2024年11月23日（土・祝）
15:00～17:00
・受付：15:50～
・対象：小学生から大人まで
・参加費：無料
・申込方法：事前申込制・先着順
下記のいずれかより申込みください。
・申込締切：11月16日（土）まで

※跡見「学芸員」in 菊坂は、跡見学園女子大学の学生たちで結成したグループです。旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）を拠点として活動しています。

【会場】菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）
東京都文京区本郷5-9-4

【アクセス】当館至近はありませぬ。公共交通機関でご来場ください。
・都営丸根線「三軒茶屋」駅より徒歩約5分
・都営丸根線「三軒茶屋」駅より徒歩約5分
・有明線「文京三軒茶屋」駅より徒歩約5分
・有明線「文京三軒茶屋」駅より徒歩約5分
【問い合わせ】跡見学園女子大学地域交流センター d-chibana@mc.ac.jp

チラシ裏面



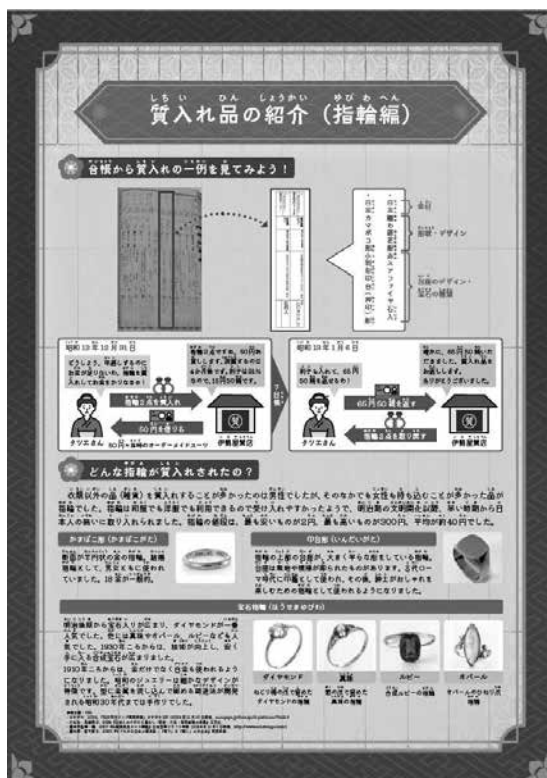
パネル③ 伊勢屋質店とは？



パネル④ 質屋を利用した昭和の女性たち



パネル⑤ 質入れ品の紹介（着物編）



パネル⑥ 質入れ品の紹介（指輪編）



企画展は11月16日から12月14日の毎週土曜日に開催した。全日土曜日の実施であったことと恵まれた天候の影響もあり、昨年の企画展を上回る317名もの来場者にお越しいただいた。来場者からはパネルの内容や学生による解説について多くのお褒めの言葉をいただき、大変励みとなった。

以下に来場者アンケートの結果の一部を紹介する。

- ・ 質屋が生活の中に根付いていたことを、よく理解することができました。貴重な展示をみることができ、とてもよい機会でした。バッジありがとー（6歳の子供の記述）。
- ・ 質屋そのものを知らない世代も多い中、そこから説明するのはいいと思いました。また、それがその時代の庶民の金融として重要な役割を果たしていたことも、ここへ来なければ知ることもなかったのよかったです。一葉さんが質屋に通ったという話は聞いていましたので、それを実際に見られるというのもよかったです。
- ・ 質入れ品の質草の多くが衣類だったことにおどろかされた。現在のファストファッションではありえない。日本人のもったいない精神は質文化の中にもたくさんあると感じました。
- ・ 質屋さんのシステムや当時の風俗等について、図解つきの展示パネルで解説されていて、とてもわかりやすかったです。着物や指輪など、実物にふれる機会もあっておもしろかったです。
- ・ 若い方がこういう古い物に対して、きちんと向きあって頑張っているというのはすごい事だと思います。



パネル展示室の様子①



パネル展示室の様子②



パネル展示室の様子③

- ・学生企画のパネルは、分りやすい絵もあり、質屋がどんなところで、人々の暮らしぶりが分かる内容でした。また、丁寧に分りやすく説明してくださって良い時間になりました。
- ・今回は質屋さんのユーザーとしての一葉の姿を描かれていて更に興味が深まりました。簡潔な説明と素敵なファッション画の組み合わせは素晴らしい着眼点だと思いました。

3-2. 小学生向けワークショップ「質屋ごっこ」

小学生向けワークショップ「質屋ごっこ」は各開催日の11時から12時の1時間で実施した。ワークショップの準備は主に、1、2年生のメンバーが担当した。

ワークショップのルールは「質入」と「受戻」、「流質」のシステムが理解できるように設定した。台帳分析の結果で和服の質草が最も多かったことから、参加者には事前に私物の衣服を持ってくるよう連絡し、その衣服を質入れ品として見立てた。

〈『質屋ごっこ』のルール〉

参加者は質屋と客に分かれて行う。それぞれ1回ずつ体験してもらう。

〔質屋〕①客から預かった品物に値段表（衣服の状態等）を見ながら値段を付ける。

②付けた金額を客のネームカード兼利用書に書いて、利子を加えた金額の紙幣（おもちゃ）を渡す。

③預かった品物を観察して台帳に客の名前、商品名、日付、商品の特徴等を記録する。

④客が品物を取りに戻ってきたら、台帳と品物を取り出し確認する。

⑤貸した金額と利子を足した金額が返金されたら、客に品物を返す（＝受戻）。足りなかったら、客に品物は返せない（＝流質）。

〔客〕①持参した衣服を質屋に預けて値段を付けてもらう。

②質入れ品を預けた代わりに、貸付金額分のお金（おもちゃ）を受け取る。

③受け取ったお金を使って好きな駄菓子を買う。

④質入れ品を取り戻すため、仕事（肩たたき屋・似顔絵屋・掃除屋）をして貸付金額および利子分のお金を稼ぐ。

⑤質入れ品を取り戻せるだけのお金を稼げたら、質屋に戻る。

⑥お金と質入れ品を交換してもらう。受戻完了。

初の試みとなるワークショップであった為、子どもたちに質屋の仕組みをどのように理解し、楽しんでもらえるか試行錯誤を重ねた。単に質屋の流れの流れを体験してもらうだけでは面白みに欠けると考え、客役の子供たちが質入れで得たお金を使えるように駄菓子屋を用意し、お金を使った後、仕事をする事でお金を稼げるように工夫した。このシステムを取り入れたことで子どもたちは達成感を味わいながら学習できたようである。用意した仕事は、肩たたき屋や似顔絵屋があり、保護者にもその客として参加してもらうことで親子で楽しめる機会を提供できた。

また、現代ではあまり馴染みのない質屋を、子どもたちに「ごっこ遊び」を通じて体験してもらうことで、身近に感じてもらえたのではないかと思う。実際に子どもたちは楽しそうな表情を見せ、反応も非常に良かったため、このイベントを実施して本当に良かったと感じた。



「質屋ごっこ」の様子①



「質屋ごっこ」の様子②



「質屋ごっこ」の様子③

3-3. トークセッション「女性職業作家誕生～一葉はなぜ日本初の女性職業作家となったのか～」

11月23日の一葉忌に合わせて樋口一葉に関するトークセッション「女性職業作家誕生～一葉はなぜ日本初の女性職業作家となったのか～」を実施した。本企画展は、女性利用者に焦点を当てた調査成果を発表する場として開催されたわけだが、特に注目すべきは、明治時代に樋口一葉がこの質屋を利用していたことである。彼女の日記には伊勢屋の名が度々登場し、当時の樋口家の経済的困難さが窺える。そのような苦境にありながらも、一葉は職業作家として作品を世に送り出し、家族を支える立場にまで至った経緯は、彼女の生き方を深く理解するための貴重な手がかりとなった。

本展の調査において大きな助けとなったのが、伊藤氏貴先生の著書『樋口一葉赤貧日記』である。このご縁により、伊藤先生にお越しいただき、トークセッションを開催する運びとなった。

伊藤先生は明治大学文学部の教授であり、文芸評論家としても活躍されている。また、中学校の国語教科書の代表編者や、高校生直木賞実行委員会の代表なども務めていらっしゃる。専門は文芸メディアおよび現代における文藝思想で、幅広い知識と深い見識を有する学者である。

トークセッションでは、樋口一葉が職業作家として歩む道のりを深く掘り下げ、その背景にある社会的、文化的要因について興味深い考察を伺うことができた。トークセッション実施時には会場がいっぱいとなるほどの盛況ぶりで、参加者の皆様からは「非常に良かった」とのお声を多数いただき、大変充



トークセッションの風景

実した時間となった。

4. おわりに

本企画展の開催を通じて、質屋を利用していた女性たちの様子について学ぶ貴重な機会を得ることができた。特に樋口一葉に関しては、伊勢屋との関わりを深く分析することができ、以前は漠然としていた知識も明確になった。実際に樋口一葉が伊勢屋に通っていたことを実感し、旧伊勢屋質店の歴史的価値を再認識する機会にもなった。

また、半年間にわたる準備期間を通して、展示の企画や設営、子供向けイベントの実施方法、トークセッションの進行方法など、多岐にわたる計画や実行を経験できた。この経験を活かして今後も企画展を始め、地域交流活動に積極的に取り組むとともに、旧伊勢屋質店の魅力を伝えていきたい。

2024年度菊坂子ども歴史探検隊「どうやって質屋を守る!? 防災の秘密を探してみよう!」開催報告

川副早央里・小玉采奈・小山風咲・磯田みずき・鈴木みづき・津島誇乃佳・増田えみり

1. はじめに

毎年1月26日は「文化財防火デー」に制定されている。この日に合わせて、跡見学園女子大学が所有する文京区指定有形文化財である旧伊勢屋質店で跡見「学芸員」in菊坂のメンバーが2022年度より災害を想定した訓練を行ってきている。2022年度は、跡見「学芸員」in菊坂として活動する学生3名が、火災を想定した消火訓練及び避難訓練を行った(水村・山上・渡邊2023)。2023年度は、コロナ禍が明けたこともあり、学芸員だけではなく周辺の地域住民にも参加してもらい、地域とともに文化財防災を考える防災イベントを開催した(小山ほか2024)。このイベントは参加者から好評であったため、今年度も同様に学生だけではなく菊坂エリアを中心として一般住民にも参加してもらう「菊坂子ども歴史探検隊～どうやって質屋を守る!? 防災のヒミツを探してみよう!～」第2弾を開催した。本稿では、このイベントの開催概要、開催までのプロセス、当日の様子とその成果について報告したい。

2. イベントの開催概要

本イベントの開催概要は以下の通りである。

- **企画名**：「菊坂子ども歴史探検隊～どうやって質屋を守る!? 防災のヒミツを探してみよう!～」
- **日 程**：2025年1月26日(日) ※旧伊勢屋質店一般公開日
14:00～15:30(受付開始13:30)
- **会 場**：旧伊勢屋質店(東京都文京区本郷5丁目9番4号)
- **主 催**：跡見学園女子大学地域交流センター、
共催：菊坂町会、協力：東京消防庁本郷消防署
- **当日の参加者**：跡見学園女子大学学生9名(跡見「学芸員」in菊坂6名、かるた部3名)、教員1名、一般参加者6名(菊坂町会含む)、本郷消防署4名

・プログラム内容

【第一部】

- ① イントロダクション(担当：跡見「学芸員」in菊坂)
- ② 伊勢屋質店ツアー(担当：跡見「学芸員」in菊坂)
- ③ 「消防士のお話を聞いてみよう!」(担当：本郷消防署)
- ④ 消火器訓練(担当：本郷消防署)
- ⑤ 消防士ユニフォームの試着体験(担当：本郷消防署)



図1 イベントのチラシ

【第二部】

⑥ 新春「本郷菊坂かるた」大会（担当：菊坂町会、跡見学園女子大学かるた部学生）

3. 当日の様子

当日は、第一部として「文化財防災」に関するイベントを行った。最初に学生から旧伊勢屋質店および文化財防火デーに関する説明をしたあと、学生企画の「伊勢屋ツアー」を行った。2つのグループに分かれ、奥座敷、茶の間、見世、廊下（目塗土）、土蔵の各部屋を跡見「学芸員」in菊坂のメンバーが案内し、各部屋の特徴と防災・防犯の工夫を解説した。現存する伊勢屋質店の建物は、質屋という商売の性質上、質草を守るために、火事への備えと防犯への備えが形作ったといっても過言ではない。例えば、土蔵では、鉄扉や鉄格子を用いた扉が3重に設置されており、土壁には燃えにくく除湿・防寒性を持つ素材の土が使われている。また、土蔵前の床下に収納されている「目塗土」は、火災時に扉の隙間から土蔵内に火が入らないよう目止め用に用意された土で、常に取り替えたり練り直したりして万が一の火災に備えていた。今回は、「ツアー」という形で参加者には実際に各部屋を見学してもらい、そこで建物の特徴や防災の仕組みを紹介した（写真1）。土蔵では、防災の工夫や在宅避難のポイントについても、パネルを用いて解説を行った（写真2）。

次に、本郷消防署の平間氏を招いて、「家具転倒防止」をテーマとして「消防士のお話を聞いてみよう!」の講話を行った。最初に、東日本大震災発生時に仙台市で撮影されたマンション内の動画を上映し、実際に家具が転倒・散乱する様子をみせていただいた。その後、平間氏より、家具の配置方法や漏電防止のためのコンセント利用の注意点など、今からできる備えや身の守り方について具体的に解説していただいた（写真3）。その後、奥座敷内でエアークリア消火器を用いた消火器訓練を実施し、一般参加者及び学生たちが参加した（写真4）。休憩時間には、子ども用の消防士ユニフォームの試着体験を行った（写真5）。

続く第二部では、菊坂町会と跡見学園女子大学かるた部の学生による「新春『本郷菊坂かるた』大会」を行った。まず、かるた部の学生が競技かるたの紹介および実演を行ったあと、一般参加の子どもた



写真1 「伊勢屋ツアー」で目塗土を紹介する学生



写真2 「伊勢屋ツアー」で在宅避難のポイントを解説する学生



写真3 消防士による講話



写真4 消火器訓練の様子



写真5 消防士姿の子どもたち



写真6 かるた部による競技かるたの実践



写真7 「本郷菊坂かるた」大会の様子

ちのグループと跡見「学芸員」in 菊坂の学生グループに分かれ、かるた部が読み手を担い菊坂町会オリジナルの「本郷菊坂かるた」を用いてかるた大会を実施した(写真6・7)。『本郷菊坂かるた』では本郷菊坂エリアにある名所や地名が紹介されており、学生たちにもなじみあるスポットも多くあったが、新たに地域の魅力や歴史に触れる機会ともなった。また、今回のイベントで初めてこうした名所を聞いた一般参加の子どもたちも、イベント参加後の帰り道に「あ、糸ちごやさんだ!」「あ、Bぐるバスだ!」とかるたに登場した場所などを見つけ楽しんだようで、かるたをきっかけに本郷菊坂を知ることができたようだ。

4. 参加した学生の感想

今回のイベントを企画し当日参加した学生からの感想を以下に紹介する。

- ・自分でも解説を担当することで、旧伊勢屋質店及び日本家屋における防災対策について理解を深めることができました。相手に合わせて話し方を変えたり、状況に応じて事前の構成から柔軟に対応したりといった経験もできたため、貴重な学びの機会となったと思います。消防庁や菊坂町会、かるた部の皆様にご協力いただき、それぞれのお話を伺う中で改めて考えさせられることや新しい発見もありました。本日得た学びを、これからに活かしていきたいです。
- ・防災イベントを通して、火事や地震といった災害からどのように身を守るのか改めて考える機会にな

りました。実際に東日本大震災の映像を見て、地震の恐ろしさと被害の大きさを実感しました。今回の話をきっかけに自分たちでできる災害対策はないか家族で話し合いたいです。初めて防災イベントの参加でしたが、とても貴重な経験をさせて頂きました。

- ・イベントを通して旧伊勢屋質店の防災の工夫について学ぶことができました。建物の様々なところで工夫を確認し、当時の人々の防災意識の高さを感じました。それを受け、私の防災意識や対策は足りているかどうか、自身をふりかえるきっかけにもなりました。消防署の方々のお話もふまえて、改めて防災について考え、それを家族や友達と共有しようと思います。とても有意義な体験ができました。
- ・「文化財の防災」という観点から、旧伊勢屋質店の防災対策や仕組みについて学ぶ中で、文化財を守りたいという思いだけでなく、消防署の方のお話や消火器訓練を通じて実践的な知識も身につけることができました。さらに、自宅における備蓄品の準備など、日常生活における防災意識を見直す良い機会ともなりました。
- ・自分の家の防災について改めて考えるきっかけになった。日常でもコンセント（ケーブルの断線等による発火）や家電の待機電力が火災の原因になる場合が多いということで、自宅のコンセント周りはどうなっているか、ケーブルが家具の下敷きになっている場所が無いのか帰宅後に見直した。また、東日本大震災の映像で倒れてくる棚や落ちてくる食器を見て、家具の固定や物の落下防止のために棚の扉は開けたら閉めることを習慣付けたいと思った。避難経路の見直しや備蓄品の準備も必要だが、火災などは普段の日常でも起こる可能性があるため、まずは何があっても安全な自宅作りが大切だと学んだ。
- ・防災イベントを通して、旧伊勢屋質店の防災の工夫を伝えるとともに、私自身もより深く旧伊勢屋質店について知ることができてとても勉強になりました。また、消火器訓練では訓練用の消火器を使用して行いましたが、思ったよりも出火があった近くで消火器を使用しなければいけないということに驚きました。今回のイベントを受け、自分の家の防災について改めてしっかりと対策ができているのか確認してみようと思いました。

5. まとめ

今回のイベントは、旧伊勢屋質店の建物に見られる防災の仕組みを具体的に「伊勢屋ツアー」で紹介し、「家具転倒防止」をテーマに実際の災害時の映像や講話を行うなど、特に「防災」という要素を意識した内容であった。残念ながら今回は一般の参加者が少なかったが、消防署の方へ旧伊勢屋質店の建物に関する紹介ができたことや、学生たちも消火器訓練に参加する機会を得られたことなど、結果としては意義ある機会となったといえるだろう。特に、上記の参加学生からの感想にあるように、旧伊勢屋質店や江戸・明治時代の歴史や建物の特徴、防災の仕組みに関する理解を深めることができたほか、自分たちの安心・安全についても考えることができ、学生たちにとっては学びが多かったようである。

防災は日頃の備えが重要である。旧伊勢屋質店のような歴史的建造物は、建物の特性上、特段災害への備えが必要であるが、文化財に指定されていることにより建物の修繕や災害対策にも制約があるのが実情である。また、この菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）が大学キャンパスから離れた場所に位置し、教職員や学生が常駐しているわけではないことから、特に旧伊勢屋質店を守っていく意識を地域とともに

に共有し連携していくことが必須である。こうした課題を認識したうえで、旧伊勢屋質店を今後も守り活用していくための取り組みを継続して行っていきたい。

参考文献

- ・水村美穂・山上真由子・渡邊菜月、2023「菊坂跡見塾文化財防火デー 避難訓練報告」『ゆかり』4、P.127-129.
- ・小山風咲・川副早央里・大屋恵実子・磯田みずき・水村美穂・山上真由子・渡邊菜月、2024「菊坂子ども歴史探検隊『どうやって質屋を守る!?防災の秘密を探してみよう!』報告」『ゆかり』5、P.120-122.

菊坂跡見塾における企画展の生涯学習効果に関する考察

—2023年度企画展参加者アンケートの分析—

川副早央里

1. はじめに

本稿の目的は、菊坂跡見塾で開催した企画展の生涯学習効果を検討することにある。菊坂跡見塾として現在保存・活用されている旧伊勢屋質店は、平成27年に学校法人跡見学園が取得・保存し、平成28年3月1日に文京区指定有形文化財に指定された。現在では、跡見学園の教育施設として活用されているほか、また資料の展示を行う博物館としての役割も持ち、観光活性化や地域の郷土史教育を担う多機能を持つ施設となっている。

菊坂跡見塾では、週末を中心として一般公開を行い、江戸・明治時代の面影を残す建物、そして旧伊勢屋質店に残されたさまざまな資料を公開し、建物の特徴や質屋を営んでいた永瀬家、そして旧伊勢屋質店を利用した樋口一葉に関するパネル展示を行っている。また、2022年度からは毎年跡見「学芸員」in菊坂のメンバーがテーマを決めて調査・研究を行い、その成果を発表する特別企画展を開催してきている。

このように、菊坂跡見塾では子どもから大人までもが学ぶ生涯学習の機会を提供する役割をもっている。そこで、今回は毎年恒例となりつつある企画展にて、参加者の特性および企画展の評価、学習効果を検討するために、生涯学習に関する項目を含めた参加者アンケートを行った。本稿では、そのアンケートの結果に基づいて、菊坂跡見塾における企画展の生涯学習効果に関して考察したい。

2. データの概要

今回は、2023年度に跡見「学芸員」in菊坂が企画・開催をした企画展「質屋の記録～見えてくる昭和初期の暮らし～」および同時開催した「令和5年度文の京インタープリター養成講座成果報告会」の来場者を対象に実施した参加者アンケートのデータを用いる。これらのイベントは、2024年2月18日（土）から24日（日）の7日間で開催した。参加者アンケートは、7日間の全来場者283名に対してアンケート用紙を配布し、その場で自記式で記入していただき、242名から回答を得た（回収率86%）。

会場で記入・回収を行ったため高い回収率であった。しかし、各質問に対する回答状況を見てみると、アンケート前半で尋ねた「企画展に関する評価」についての回答率は高かったが、アンケートの後半に設けた「生涯学習」に関する質問については「無回答」が多い結果であった。それは、企画展の来場者アンケートとしては質問数が多かったこと、会場で記入できるスペースが限られていたことなどが影響したものと考えられる。

アンケートでは、大きく分けて「基本属性」「生涯学習」「企画展の評価」について28問を尋ねた。今回のアンケートを設計するにあたり、博物館での学習および生涯学習の効果を測ることを目指して、先

行研究として内閣府が実施した「生涯学習に関する世論調査」(内閣府2022) および歴史系博物館の事前・事後学習効果に関する研究(井上2006)を参考にした。

井上(2006)では、博物館を訪れる子どもを対象として、事前と事後の2回に分けたアンケート調査を行い、博物館を訪れた子どもの学びの評価を行っている。本アンケートにおいても企画展の見学前後で調査をすることが望ましかったが、今回は企画展参加者アンケートであることを鑑みて、事前・事後ではなく、事後アンケートのみを実施した。ただし、旧伊勢屋質店のイメージについて、訪れる前のことも回顧して回答してもらい、企画展訪問前後の変化を記入してもらった。

また、生涯学習に関する項目は、「生涯学習に関する世論調査」を参考にして設定した。この世論調査の全質問項目を尋ねることはできないため、今回のアンケートでは設問数を絞って質問項目を設定した。具体的な項目は以下の通りである。紙幅の都合上、すべての項目を取り上げることはできないため、本稿では特に企画展での学びを評価するうえで重要な項目に限って分析をする。

「質屋の記録」～見てくる昭和初期の暮らし～ アンケート

この度は本企画展にご来館いただき、誠にありがとうございます。

企画展の改善と今後の企画のため下記アンケートにご協力をお願いいたします。2ページ(裏表) ございます。

■本企画展についてお聞きします。

Q1 どこで本企画展のことを知りましたか。(〇はいくつでも)

1. サラシ 2. 大学の掲示 3. 大学HP 4. 跡見塾「学芸員」in 朝坂のSNS
5. 地域の掲示板 6. 質屋展 7. 友人・知人からの紹介 8. その他()

Q2 今回の企画展の満足度を教えてください。(〇は1つ)

1. 満足 2. どちらかという満足 3. どちらかという不満 4. 不満

Q3 旧伊勢屋質店に行くのは何回目ですか。

1. はじめて 2. 前に行ったことがある

Q4 本日は誰と来ましたか。(〇は1つ)

1. 友人と 2. 家族と 3. 学校で 4. 一人で 5. その他()

Q5 旧伊勢屋質店はどこなところだと思ってきましたか。

Q6 東西に訪れてみて、旧伊勢屋質店はどこなところだと思いましたか。

Q7 今回の展示が一番気に入った展示物は何ですか。

Q8 その展示のどこなところが気に入りましたか。

Q9 もっと見てほしいところがあったら教えてください。

Q10 今回の企画展に行くことをお友達やお家の人にすすめますか。

1. すずめ 2. どちらかといえはすすめない 3. どちらかといえはすすめる 4. すずめない

Q11 お友達やお家の人に今回の企画展がどこなところか教えてあげるとしたら、どんなふうに言いますか。

Q12 このような企画展にまた行きたいと思いませんか。

1. 行きたい 2. どちらかといえは行かない 3. どちらかといえは行きたい 4. 行きたい

Q13 次に旧伊勢屋質店に行ったら、どんなことを知りたい/やりたいですか。

Q14 博物館や美術館に行くのは好きですか。

1. とても好き 2. どちらかといえは好き 3. どちらかといえは好き 4. 好き

Q15 歴史の勉強は好きですか。

1. とても好き 2. どちらかといえは好き 3. どちらかといえは好き 4. 好き

Q16 いつどこかで歴史の勉強をしますか。

1. 学校 2. 図書館 3. 博物館 4. 自分の家 5. その他()

Q17 その他、本企画展に関する意見・ご感想を自由に書いてください。

★裏面★

図1 アンケート用紙(表面)

■あなた自身のことについてお聞きします。

Q18 あなたは、この1年くらいに、月に1日以上どのようなことを学習しましたか。学生の場合は、学業での学習を漏れてお答えください。(〇はいくつでも)

1. 仕事に必要な知識・技能や資格に関すること 2. インターネットの知識・技能に関すること
3. ボランティア活動に必要な知識・技能に関すること 4. 自然体験や生活体験等の体験活動に関すること
5. 人口減少や地域高齢化などの社会問題に関すること 6. 健康やスポーツに関すること
7. 料理や裁縫などの家庭生活に関すること 8. 育児や教育に関すること
9. 音楽や美術、レクリエーション活動等の趣味に関すること 10. 文学や歴史、語学などの教養に関すること
11. その他() 12. 学習していない

Q19 学習した理由は何かですか。(〇はいくつでも)

1. 現在または将来の仕事において必要性を感じたため 2. 就職や転職のために必要性を感じたため
3. 勤務先などから勧められたため 4. 地域や社会における活動に参加するため
5. 家庭や日常生活に生かすため 6. 健康の維持・増進のため
7. 他の方との親睦を深めたり、友人を誘ったりするため 8. 人生を豊かにするため
9. 教養を深めるため 10. その他()
11. 学習していない

Q20 学習した成果をどのように生かしている/生かせると思いますか。(〇はいくつでも)

1. 仕事や就職の上で生かしている/生かせる 2. 地域や社会での活動に生かしている/生かせる
3. 家庭・日常の生活に生かしている/生かせる 4. 健康の維持・増進に役立っている/役立てられる
5. 自分の人生を豊かにしている。または豊かにできる 6. その他()
7. 生かしていない。または生かさない

Q21 Q19およびQ20で「学習していない」と答えた方への質問。(〇はいくつでも)

1. 仕事や就職に時間がない 2. 家事・育児・介護などが忙しくて時間がない
3. 学習より優先したいことがある 4. 時間帯が希望に合わない
5. 一緒に学習する仲間がない 6. 身近なところに学習する場がない
7. 学習するための費用がかかる 8. 学習したい内容の講師が開設されていない
9. 学習するために必要なプログラムや費用などの負担が大きい 10. 学習しても職場などから評価されない
11. きっかけがつかぬ 12. 特に必要がない

Q22 あなたは、これから学習したいと思う場合、どのようなことを学習したいと思いませんか。(〇はいくつでも)

1. 仕事に必要な知識・技能や資格に関すること 2. インターネットの知識・技能に関すること
3. ボランティア活動に必要な知識・技能に関すること 4. 自然体験や生活体験等の体験活動に関すること
5. 人口減少や地域高齢化などの社会問題に関すること 6. 健康やスポーツに関すること
7. 料理や裁縫などの家庭生活に関すること 8. 育児や教育に関すること
9. 音楽や美術、レクリエーション活動等の趣味に関すること 10. 文学や歴史、語学などの教養に関すること
11. その他()

Q23 今後はどのような立場でいらっしゃいますか。(〇は1つ)

1. 一般職 2. 学生 3. 教職 4. その他()

Q24 お住まいの地域をお選びください。(〇は1つ)

1. 文京区内 2. 東京都内(文京区を除く) 3. その他()

Q25 あなたのお仕事についてお答えください。あなたは、この中のどれに当たりますか。(〇は1つ)

1. 主税の職員・従業員(役員含む) 2. 非主税の職員・従業員 3. 自営業主・自由業 4. 家族従業員
5. 主婦・主夫 6. 学生 7. 無職 8. その他()

Q26 あなたが最後に卒業した学校。または現在在学中の学校はどれですか。(〇は1つ)

1. 中学校 2. 高等学校 3. 専門学校・短大・専門学校 4. 大学 5. 大学院

Q27 性別

1. 女性 2. 男性 3. その他

Q28 年齢をお書きください。()歳

ご回答ありがとうございます！

図2 アンケート用紙(裏面)

3. 参加者アンケートの結果

(1) 回答者の基本的データ

まず、アンケート回答者の属性について確認しよう。「年齢」は、多い順から「50代」が29%、「20代」および「70代」が16%、「60代」が15%と続き、約6割が50歳以上であった。「性別」は、「女性」68%、「男性」32%、「その他」1%であった。「最終学歴」は、回答が多かった順に「大学」が55%、「大

学院」および「高等学校」がともに15%、「専門学校・短大」が14%、「中学校」が1%であり、全体の84%が高等教育を受けており、全体的に学歴が高い参加者が多かった。「居住地」については、「文京区」が41%、「東京都（文京区外）」が42%、「その他」17%であり、地元の文京区在住の来場者が多く、約8割が「東京都」内在住であった。

また、アンケートでは、今回の企画展を訪れた状況についても尋ねる質問を設けた。旧伊勢屋質店への訪問経験については、「旧伊勢屋質店に行くのは何回目ですか」と尋ね、「はじめて」と「前に行ったことがある」の2項目から答えてもらったところ、「はじめて」が70%、「前に来たことがある」が30%であった。当日の同行者については、「本日は誰と来ましたか」と尋ね、「友人と」「家族と」「学校で」「一人で」「その他」から選択してもらった。もっとも多かった回答は「一人」（55%）であり、「家族で」（27%）、「友人と」（13%）、「学校で」（3%）、「その他（2%）」と続いた。これらの回答から、「一人で」「初めてきた」という人が今回の企画展来場者に多かったことが明らかとなった。

（2）生涯学習に関する回答結果

では、博物館的役割を持つ旧伊勢屋質店であるが、今回の企画展に来場された人々は、普段どの程度、どのような学習を行っているのだろうか。以下では生涯学習に関する質問項目についてみてみよう。

博物館や美術館への関心について、「博物館・美術館に行くのは好きですか」と尋ね、「とても好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえばきらい」「きらい」の4択から選択してもらった。「とても好き」（59%）と「どちらかといえば好き」（41%）を合わせると、「好き」が100%であり、もともと博物館や美術館を訪問することが好きな人が今回の企画展に訪れていたことが分かる。

また、歴史の学習についても「歴史の勉強は好きですか」と尋ね、「とても好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえばきらい」「きらい」の4択から選択してもらった。その結果、「とても好き」が55%、「どちらかといえば好き」が39%、「どちらかといえばきらい」が6%であり、9割以上の人々が歴史の勉強好きであることが分かった。

勉強する場所についても尋ねたところ、回答は「自分の家」（38%）、「博物館」（26%）、「図書館」（20%）「学校」（8%）と続いた（図3）。博物館や図書館など、普段から自宅や学校以外の学びの場に自ら赴いて勉強している人も多いことがわかった。

学習内容については、内閣府の「生涯学習に関する世論調査」（以下、世論調査）の調査票を参考に質問した。以下ではアンケートの結果と世論調査の結果を併記して分析を行う。

最初に、「あなたは、この1年くらいの間に、月に1日以上どのようなことを学習しましたか。学生の場合は、学業での学習を除いてお答えください」と尋ねたところ、「学習していない」と答えたのは7.9%で、約9割は普段から何らの学習をしていることが明らかとなった（図4）。その内容を見てみると、「文学や歴史、語学などの教養に関すること」（36%）

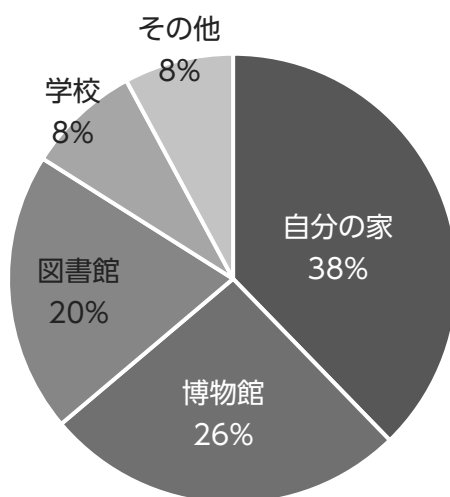


図3 「勉強する場所はどこですか」への回答
（有効回答216）

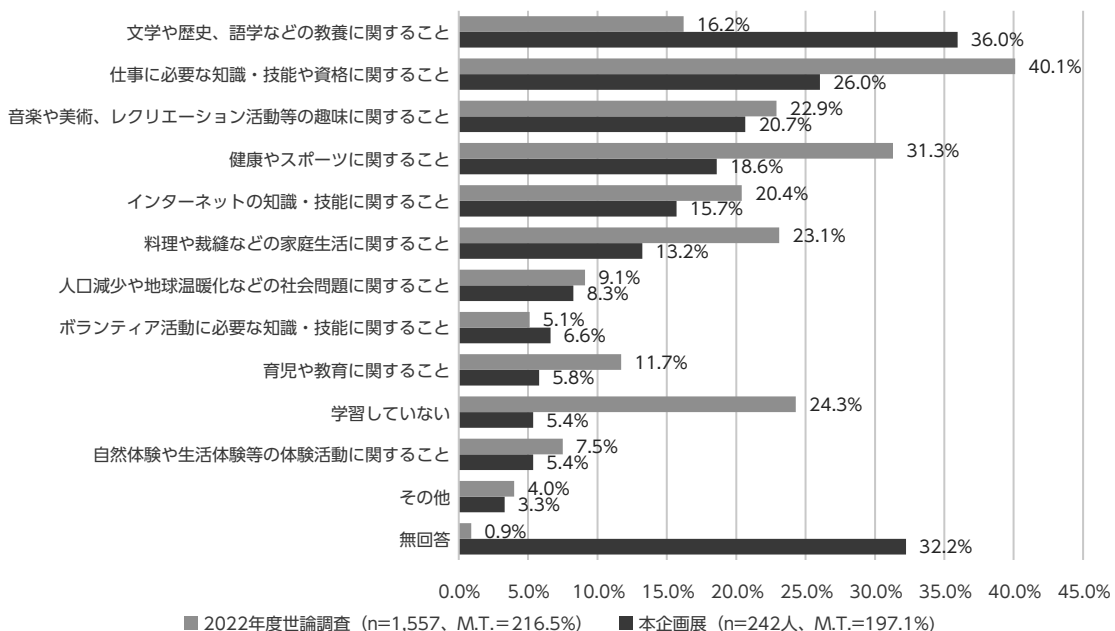


図4 この1年間の月1日以上学習状況 (M.A.)

が最も多かった。次に多かったのは「仕事に必要な知識・技術や資格に関すること」であり、26.0%であった。世論調査においては、「文学や歴史、語学などの教養に関すること」を選んだのは16.2%であり、本企画展アンケートの結果と20ポイントも差がある。逆に、世論調査で最も多かったのは「仕事に必要な知識・技術や資格に関すること」で40.1%、次に「健康・スポーツに関すること」が31.3%、「料理や裁縫などの家庭生活に関すること」が23.1%と続いている。

続いて、「学習をした」と回答した人を対象に、「学習した理由は何ですか。」と尋ね、11カテゴリーから選んでもらった(図5)。その結果、本企画展来場者の場合には「教養を深めるため」が31.0%、次に「人生を豊かにするため」が29.8%、「現在または当時の仕事において必要と感じたため」が25.2%、「家庭や日常生活に活かすため」が16.1%、「健康の維持・増進のため」が14.0%と続いた。世論調査では、「仕事において必要性を感じたため」が53.5%と最も多く、「人生を豊かにするため」「家庭や日常生活に活かすため」「健康維持・増進のため」がそれぞれ4割から5割を占めている。

次に、「学習した成果をどのように生かしている／生かせると思いますか」という質問を尋ね、7つの選択肢から選んでもらった(図6)。特に多かったのは「自分の人生を豊かにしている、また豊かにできる」(42%)、「仕事や就職の上で生かしている」(28.9%)、「家庭・日常の生活に生かしている／生かせる」(23.6%)であった。他方で、世論調査の結果では、「仕事や就職の上で生かしている」(54%)が最も多く、次に「自分の人生を豊かにしている、または豊かにできる」(53.8%)、「家庭・日常の生活に生かしている／生かせる」(53.2%)となっており、この3つの活用状況はそれぞれ5割を超えている。

以上3つの質問項目の結果から、世論調査では「仕事」「健康・スポーツ」「家庭生活」など仕事や生活に求められる内容を学習している人が多いのに対して、本企画展アンケートでは「仕事」に関連する学習も少なくないが、「教養」や「レクリエーション」など暮らしをより豊かにするための学習を行っている人が多い傾向がみられた。

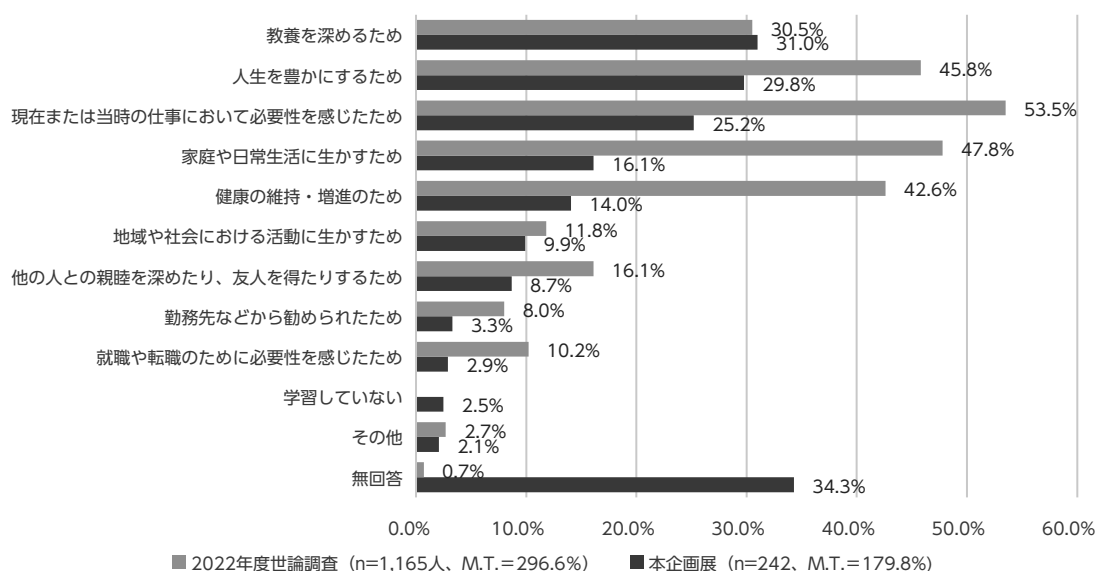


図5 学習をした理由 (M.A.)

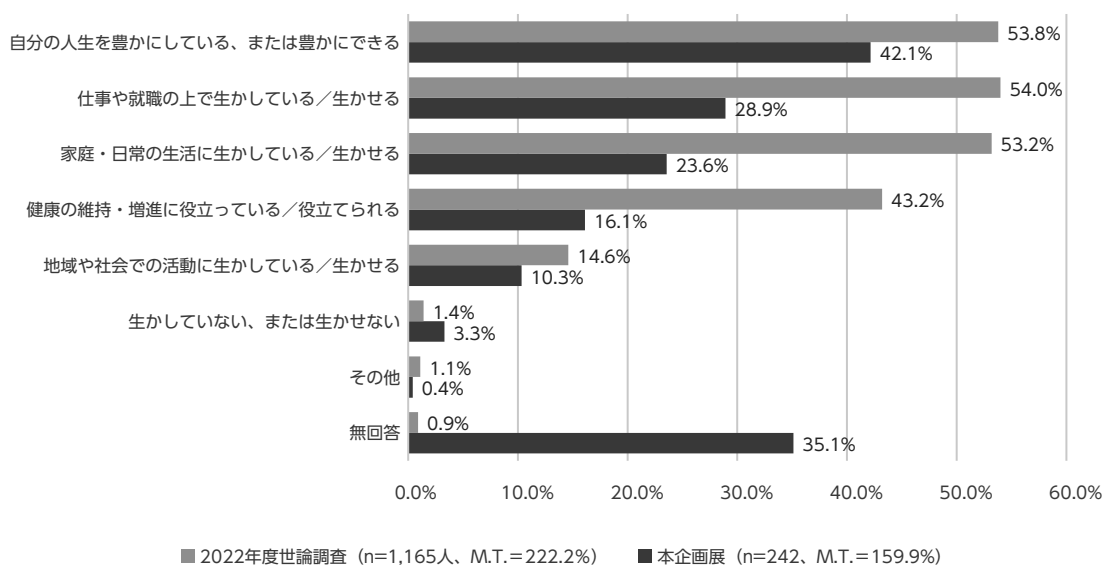


図6 学習成果の活用状況 (M.A.)

さらに、Q19およびQ20で「学習していない」と答えた方には、「学習しない理由を教えてください」と尋ね、12カテゴリーから選択してもらった(図7)。その結果、「仕事が忙しくて時間がない」が30.8%で最も多く、続いて「きっかけがつかめない」が23.1%、「学習より優先したいことがある」「特に必要がない」「家事・育児・介護などが忙しくて時間がない」がそれぞれ約15%と並んだ。他方、世論調査では、約半数にあたる45.5%が「特に必要がない」と回答し、「きっかけがつかめない」29.1%、「仕事が忙しくて時間がない」が27.5%であった。世論調査では、必要性を感じないために学習していない人が多いのに対して、本企画展では、仕事や家事・育児・介護による多忙と費用負担が理由で学習していない人が多く、学習しない理由には異なる傾向が見られた。

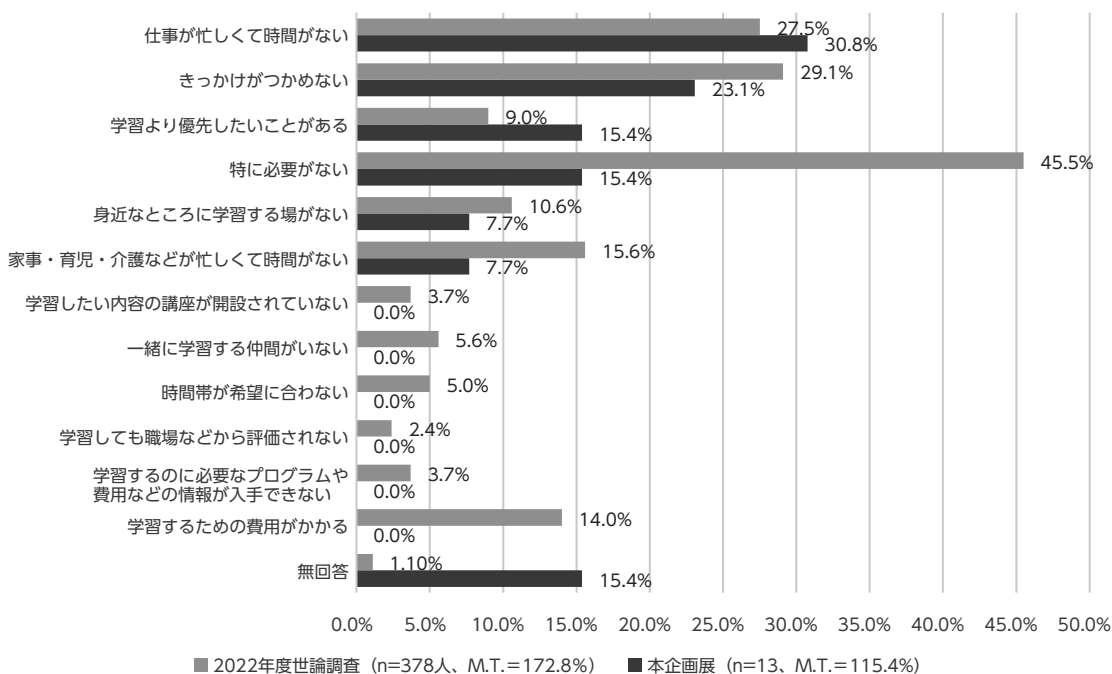


図7 学習しない理由 (M.A.)

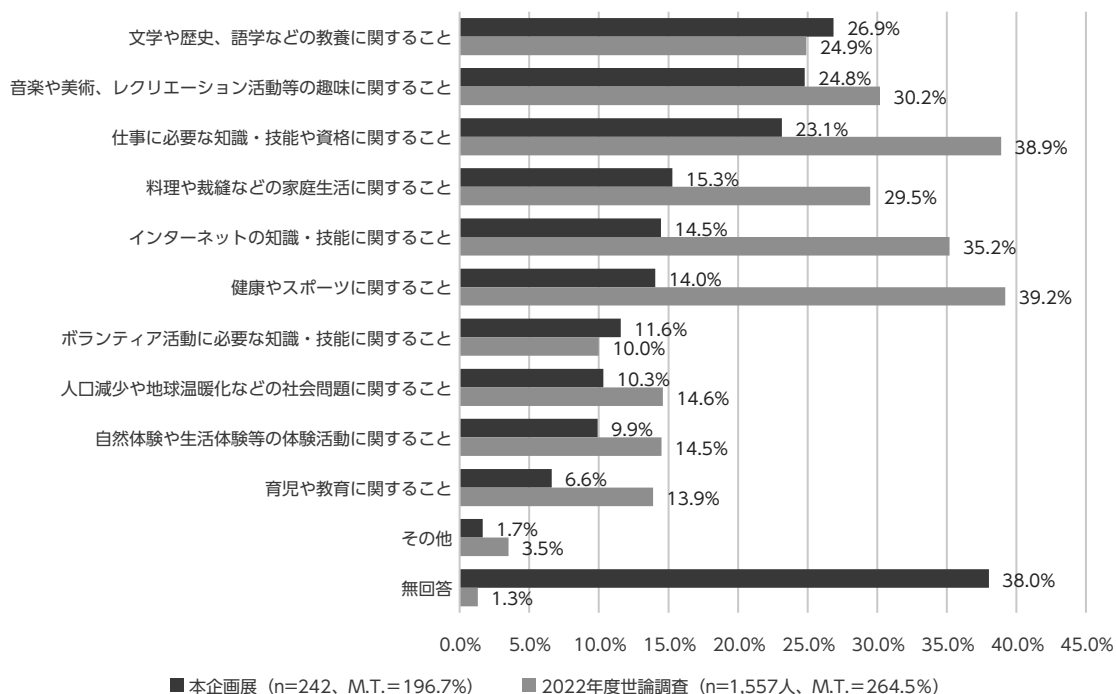


図8 今後学習したい内容 (M.A.)

今後学習したい内容については、「あなたは、これから学習するとした場合、どのようなことを学習したいと思いますか」と尋ね、11カテゴリーから選んでもらった(図8)。本企画展のアンケートでは、「文学や歴史、語学などの教養に関すること」が26.9%で最も多く、次に「音楽や美術、レクリエーショ

ン活動等の趣味に関すること」が24.8%、「仕事に必要な知識・技能や資格に関すること」が23.1%と続いた。他方で、世論調査の結果はこれと大きく異なっており、多い順に「健康やスポーツに関すること」39.2%、「仕事に必要な知識・技術や資格に関すること」が38.9%、「インターネットの知識・技能に関すること」が35.2%であった。

以上の結果から、本企画展の来場者は日頃から学習し、博物館や図書館などを利用している人が多いことがわかった。また、学習内容については、世論調査の結果では仕事や生活に求められる学習内容への関心が高い人が多いのに対して、本企画展アンケートにおいては仕事に関する学習への関心も少なくはないが、文学や歴史などの教養やレクリエーションなど、暮らしをより豊かにするための学習への関心が高い傾向がみられることが明らかとなった。

(3) 企画展に関する回答結果

ここからは、本企画展に関する項目を見てみよう。まずは、来訪前後での旧伊勢屋質店のイメージの変化について確認する。先述したように、井上(2006)を参考にして、旧伊勢屋質店のイメージが企画展訪問前後でどのように変化したかを検討するために、「旧伊勢屋質店はどんなところだと思ってきましたか?」(事前イメージ)および「実際に訪れてみて、旧伊勢屋質店はどんなところだと思いましたか?」(事後イメージ)という質問を設けた。ここではそれぞれの設問で得られた回答をKJ法で分類した後、アフターコーディングをして整理した(表1)。

事前イメージを見てみると、多くの人が「一葉が通った質屋」「質屋」「古い建物」といった3つのイメージを抱えていることがわかる。そして「イメージなし」という人も一定数いた。このことから、企画展参加者は旧伊勢屋質店についてあまり知ることなく特にイメージは持たずに訪れているか、上記3つの固定的なイメージをもって企画展を訪れていることが分かった。

次に事後イメージを見てみると、企画展に参加したことで旧伊勢屋質店のイメージが多様化し、より具体的なイメージが形成されたことがわかる。多かったのは「昔の生活を感じる」「歴史的価値がある場所」といった回答であり、旧伊勢屋質店内部に実際に足を踏み入れ、古い建物を体感することで昔の生活を感じ、旧伊勢屋質店が歴史的価値を有する場所であるという理解に結び付いたことがわかる。また、「保存状態がよい」「こじんまりしていた」という具体的なイメージが生まれたことも、実際に建

表1 事前事後イメージの変化

事前イメージ	事後イメージ
一葉が通った質屋 (48)	昔の生活を感じる (34)
質屋 (46)	歴史的価値がある場所 (32)
古い建物 (40)	保存状態がよい (18)
その他 (22)	質屋を理解できた (16)
イメージなし (18)	こじんまりしていた (9)
	イメージ通りである (7)
	学生の研究発表の場である (6)
	建物に魅力がある (6)
	樋口一葉と関係がある (5)
	文化財である (3)

※()内は回答数

表2 一番気に入った展示物

着物の展示 (38)
台帳 (25)
建物 (21)
ハンズオン (14)
パネルの内容 (8)
その他 (7)

※()内は回答数

物を細かに見学した結果であるといえよう。さらに、「学生の研究発表の場である」「樋口一葉との関係がある」「文化財である」といった理解は、企画展のパネルを通して得られたものと考えられる。

そして、「今回の展示で一番気に入った展示物は何ですか」と尋ね、自由回答で答えてもらったところ、表2の通りの結果となった。好評だったものは、「着物の展示」および「台帳」といった具体的な展示物であった。こうした展示物の存在が、パネルの内容理解を補助する役割を持ったのではないだろうか。次に評価されたのは「建物」であり、実際に文化財として保存されている建物を、外から眺めるだけではなく内部に入り込んで建具等の細部まで見ることができ、空間を体感することができることは、来館者にとって貴重な経験となったようである。当時の着物の理解を深めてもらおうと設置した着物のハンズオンコーナーも好評であった。

「次に旧伊勢屋質店に行ったら、どんなことを知りたい・やりたいですか」と尋ね、自由記述で回答してもらった。その結果、「2階を見たい」「蔵の内部の再現が見たい」という建物見学に関する意見や、「蔵で演奏会を開催する」といった建物の活用方法に関する意見が出された。また、さらに知りたいこととして、「当時の庶民の生活」「一葉のこと」「跡見学園と地域の関わり」「質屋の仕事」「永瀬家のこと」「台帳のこと」が挙げられた。

結果として、企画展の満足度については、「満足」が64%、「どちらかという満足」35%、「どちらかという不満」が1%であり、「満足」と「どちらかという満足」を合わせると99%が満足した結果であった。

4. おわりに

本稿では、2023年度に跡見「学芸員」in 菊坂が企画・開催をした企画展「質屋の記録～見えてくる昭和初期の暮らし～」および同時開催した「令和5年度文の京インタープリター養成講座成果報告会」の来場者を対象に実施した参加者アンケートのデータを用いて、来場者の生涯学習の状況および企画展の学習効果について検討してきた。その結果、来場者は、学歴が高く、学ぶ意識が高い層が多かったことが分かった。とりわけ文学や歴史に関する関心が高い特徴を持っていた。そして、企画展に参加した生涯学習効果に関しては、参加前は旧伊勢屋質店に対してイメージがない、あるいは限定された固定的イメージを抱いていたが、参加後は旧伊勢屋質店を通して、歴史や文学、社会に関して学び、旧伊勢屋質店のイメージがより多様化し、具体化したことが明らかとなった。

以上の結果から、改めて旧伊勢屋質店が博物館という機能や生涯学習効果を持つ場であることが確認されたといえよう。今後は、来場者の関心や特性を理解したうえで、より関心を持ってもらえるような、そして、より多くの方に来場してもらえるような企画展を目指していきたい。

謝辞

本研究は、一般財団法人生涯学習開発財団の研究助成を受けて行った活動・研究成果の一部である。

参考文献

- ・井上由佳、2006、「歴史系博物館における子どもの学びの評価：事前・事後調査を中心に」『博物館額雑誌』31(2) :pp.75-100.
- ・内閣府政府広報室、2022、『生涯学習に関する世論調査』.

メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）〈紹介日順〉

〈テレビ・配信〉

- (1) TOKYO MX「ぐるり東京 江戸散歩」

放送日時：2024年6月8日（土）17時00分～19時00分

〈新聞・雑誌等〉

- (1) 「一日乗車券でめぐる東京」

発行：旺文社

- (2) 「文京区観光ガイドブック」2025年度版

発行：一般社団法人文京区観光協会

- (3) 「まち歩き地図東京さんぽ」2025－改訂版－

発行：朝日新聞出版

- (4) 「歩く地図 東京散歩 2026」

発行：成美堂出版

2024年度の地域交流関連活動記録

地域交流センター

跡見学園女子大学における「地域交流事業」の運営体制

1. 跡見学園女子大学地域交流センターについて

跡見学園女子大学地域交流センターは、本学に所属する教員や学生が地域交流活動を組織的・積極的に行えるように地域交流活動の支援を行い、そのために必要な環境整備を行うことを目的に、附属教育研究組織として平成31年度より設立されました。（「地域交流センター規程」）

具体的な活動は、下記の通りです。

- ①地域交流活動の企画立案・実施
- ②本学の地域交流活動についての情報収集及び成果の公表
- ③本学の地域交流活動に対する人的支援・財政的補助

（本学の「正課」「正課以外」、本学教員の地域における調査・研究、本学人材の地域への提供等）

- ④地域交流活動への本学施設の開放
- ⑤自治体との包括連携協定の推進と協定締結自治体との連携事業の実施・支援

2. 地域交流センター運営委員会について

地域交流センター運営委員会は、地域交流センターの上記の具体的活動に関する事項を審議することを目的に、委員長たるセンター長と各学部より選出された委員および、若干名の専門委員により組織されています。（「地域交流センター運営委員会規程」）

3. 地域交流センター運営委員会開催一覧

令和6年度運営委員会

- 第1回（令和6年 4月24日〈水〉）15時10分～16時50分〈新座キャンパス 1号館 1130会議室〉
- 第2回（令和6年 5月22日〈水〉）13時20分～15時00分〈Teams使用〉
- 第3回（令和6年 6月26日〈水〉）13時20分～15時00分〈Teams使用〉
- 第4回（令和6年 7月24日〈水〉）13時20分～15時00分〈Teams使用〉
- 第5回（令和6年 9月25日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第6回（令和6年10月23日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第7回（令和6年11月20日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第8回（令和7年 1月22日〈水〉）13時20分～15時00分〈Teams使用〉
- 第9回（令和7年 2月26日〈水〉）13時20分～15時00分〈Teams使用〉

令和6年度 連携地域・企業（提携日順）

跡見学園女子大学 自治体等 協定締結先一覧（令和7年1月現在）

※締結順

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
埼玉県	彩の国大学コンソーシアム友好交流に関する協定	H13(2001) 10.15締結 H17(2005) 4.1改訂		自動更新	・教育交流 「単位互換」プログラム、教養教育の共有化、リメディアル教育、インターネット等を利用した遠隔事業、「編入生」受け入れ・交換プログラム ・研究交流 学生、教員における研究プログラム ・学生交流 学生交流、「スポーツ・リクリエーション活動」の共同開催プログラム ・教職員交流 FD研究・フォーラム等の開催、事務職員研修 ・地域交流 「公開講座」共同開催プログラム、「生涯学習」プログラム、「地域への便益還元・奉仕活動」プログラム ・その他 入試広報、WBT（Web Base Training）
埼玉県新座市	新座市と跡見学園女子大学との連携協力に関する包括協定	H20(2008) 4.10	H22(2010) 4.10	自動更新	・社会福祉の充実に関する事項 ・教育・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全・回復・創出に関する事項 ・防災に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
東京都文京区	学校法人跡見学園 跡見学園女子大学と文京区との相互協力に関する包括協定	H23(2011) 5.17	H26(2014) 3.31	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施
埼玉県新座市・埼玉県新座警察署	新座市における女子学生安全対策協定	H23(2011) 7.29	H25(2013) 7.28	自動更新	・女子学生に対する防犯指導 ・安全情報の提供及び情報交換 ・学生防犯リーダーによる啓発活動への支援
福島県会津若松市	学校法人跡見学園 跡見学園女子大学と会津若松市とのパートナーシップ協定	H24(2012) 7.25	H27(2015) 7.24	自動更新	・学術研究の成果、地域施策の充実及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
東京都文京区	災害時における母子救護所の提供に関する協定	H24(2012) 9.7			・災害時における文京キャンパスの提供
埼玉県和光市	和光市と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H24(2012) 11.22	H27(2015) 11.21	自動更新	・社会福祉の充実に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全、創造に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
埼玉県新座市	災害時における施設の使用に関する覚書	H25(2013) 1.10締結 H26(2014) 2.13改訂			・新座市内に災害が発生した場合に、本学を避難場所としてグラウンドや体育館の提供及び避難所等の開設を行う ・避難者の安全を確保することを目的とする ・物品資材等の設置や土地の使用に関する事項を追加（平成26年2月13日に再締結）
一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会		H26(2014) 6.23	R2(2020) 12.31		・人的分野及び教育的分野での連携 ・オリンピック・パラリンピック競技大会に関わる研究分野での連携 ・オリンピック・パラリンピック競技大会の国内PR活動での連携 ・オリンピックムーブメントの推進及びオリンピックレガシーの継承に関する連携
全国「道の駅」連絡会	「道の駅」就労体験型実習の実施に関する基本協定	H27(2015) 3.10			・「道の駅」就労体験型実習の実施
長野県	学校法人跡見学園 跡見学園女子大学と長野県との相互協力に関する協定	H27(2015) 6.22	H29(2017) 3.31	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・学生の就職支援 ・インターンシップの実施
警視庁大塚警察署	災害及び防犯ボランティア等に関する協定	H27(2015) 9.1	H28(2016) 8.31	自動更新	・防災及び防犯等各種広報活動に対する共同活動 ・発災時に文京区が設置する避難所等における災害警備活動
秋田県男鹿市	秋田県男鹿市と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H27(2015) 12.21	H30(2018) 12.21	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・人材育成に関する事項
山形県西川町	山形県西川町と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H27(2015) 12.22	H30(2018) 12.22	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
群馬県長野原町	学校法人跡見学園女子大学と長野原町との相互協力に関する包括協定	H28(2016) 4.19	H31(2019) 4.19	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・その他前条の目的を達成するために甲及び乙が必要であると認めたこと
埼玉県三郷市	三郷市と学校法人跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H29(2017) 3.6	H30(2018) 3.6	自動更新	・社会福祉に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツに関する事項 ・地域環境に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティに関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他前条の目的を達成するために甲及び乙が必要であると認める事項
富山県立山町	富山県立山町と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H29(2017) 5.22	R2(2020) 5.22	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他上記の目的に関して、両者が協議して必要と認められる事項
長野原町	長野原町と跡見学園女子大学観光コミュニティ学部との観光振興プロジェクトに関する覚書	H29(2017) 6.1	H29(2017) 11.19		・長野原町八ツ場地区における調査研究活動への協力 ・学生による調査研究結果の提供、及び研究成果の地域での活用
和光市文化振興公社	公益財団法人和光市文化振興公社と跡見学園女子大学との相互協力協定書	H29(2017) 6.23	R3(2021) 3.31	自動更新	・文化更新に関する事業 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・地域文化資源に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他、甲と乙が相互に必要と認める事項
千葉県いすみ市	いすみ市と跡見学園女子大学における域学連携に関する協定書	R1(2019) 6.1	H31(2019) 3.31		・いすみ市における地域創生をテーマに共同で研究、実践活動を行うことを目的とする
静岡県東伊豆町	東伊豆町と跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	R1(2019) 11.19	R4(2022) 11.18	自動更新	・活力ある地域づくり ・観光振興 ・情報発信 ・人材育成 ・研究教育
株式会社ジャルパック	跡見学園女子大学と株式会社ジャルパックとの連携に関する協定	R2(2020) 2.4	R3(2021) 2.3	自動更新	・教育、研究、文化の発展・向上に関わる相互支援 ・学生・教職員と社員の相互交流 ・人材育成・キャリア形成 ・学生・教職員の研究成果・活動を業務に活かす ・地域社会の発展・活性化

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
公益財団法人角川文化振興財団	跡見学園女子大学と公益財団角川文化振興財団との連携に関する協定書	R2(2020) 8.1			・教育、研究、文化の発展・向上にかかわる相互支援に関する事 ・学生及び教職員と社員の相互交流に関する事 ・本学の人材育成・キャリア形成に資する支援に関する事24 ・学生及び教職員の研究成果・活動と角川文化振興財団の文化活動の成果を互いに活かすこと ・地域社会の発展・活性化に関する事 ・その他、相互に連携・協力が必要と認められる事項
エーザイ株式会社	コミュニティスペース運営協力に関する協定書	R2(2020) 9.24			・千石三丁目居場所作りプロジェクト実行委員会の準備・運営するコミュニティスペース（所在：文京区千石三丁目三番七号）への協力（知的資源の提供・人材の派遣等） ・前1項及び2項の目的達成のための相互交流、研究成果・知識の交換 ・その他地域社会の発展・活性化に関する取組み
埼玉東上地域大学	埼玉東上地域大学教育プラットフォーム協定	R2(2020) 12.1		自動更新	・自治体及び企業・団体と連携して、当該地域の少子高齢化問題の解決及び地域活性化の推進に向けた「多様な高等教育の提供」「生活しやすい地域づくり」及び「地域産業の活性化」等の活動を柱として当該地域社会の継続的な発展に寄与することを目的とする
岩手県盛岡市	盛岡市と跡見学園女子大学との連携・協力に関する包括協定	R4(2022) 3.24		自動更新	・産業及び文化の振興に関する事 ・交流人口の拡大に関する事 ・人材育成及び振興に関する事 ・地域課題の解決に関する事 など
埼玉県富士見市	包括連携協定	R5(2023) 4.6			・学校教育、生涯学習、文化・スポーツに関する事項 ・社会福祉に関する事項 ・商業及び観光の振興に関する事項 ・地域コミュニティに関する事項 ・国際交流に関する事項 ・地域の環境に関する事項 ・学術研究及び人材育成の振興に関する事項 ・その他上記の目的に関して、甲及び乙が協議して必要と認められる事項

令和6年度 文京区受託事業

事業名	令和6年度 文の京ゆかりの文化人顕彰事業『朗読コンテスト』
主催	文京区 主管・運営：跡見学園女子大学
日時	令和6(2024)年11月3日(日) 本選13時～16時
場所	跡見学園女子大学 ブロッサムホール(文京区大塚)

文京区ふみ みやこの文の京ゆかりの文化人顕彰事業のひとつで、今年度で13回目となるコンテストである文京区と連携をして朗読者に発表の場を提供するとともに、区民の文化活動の一層の促進、特に青少年部門においては朗読への関心を醸成することを目的としている。文京区が主催し、本学が主管して平成24年度から開催されているものである。

課題作家と作品

文京区と金沢市にゆかりのある作家の6作品(文京区・金沢市友好交流都市協定締結5周年)

泉鏡花「化鳥」

徳田秋声「蛭のゆくえ」

室生犀星「幼年時代」

五木寛之「私が哀号と呟くとき」

井上靖「しろばんば」

桐野夏生「桜」

1. 事前録音審査応募総数

274人(一般148名、青少年126名)

※事前録音審査 267名(一般141名、青少年126名)

※審査対象外 7名(一般7名、青少年0名)

※本選出場者数 青少年の部 7名 ※内1名は体調不良により欠席
一般の部 8名

2. 録音審査応募期間

8月19日(月)から8月23日(金)

3. 録音審査

9月4日(水)から6日(金)

NHK財団ことばコミュニケーションセンター

4. 本選観覧者

応募数（含：当日申込）：115名

来場者数：89名

5. 審査結果

賞	青少年の部入賞者一覧		一般の部入賞者一覧	
	氏名	朗読作品	氏名	朗読作品
最優秀賞	池中あおい	しろばんば	柏崎陽子	桜
優秀賞	田崎友梨	蛍のゆくえ	古澤寿実	私が哀号と呟くとき
優秀賞	沈場陽	桜	空代絵三子	幼年時代

※青少年の部は23歳以下の方

6. 審査員

氏名	肩書
広瀬 修子 氏	元跡見学園女子大学教授、元NHKアナウンサー
高橋 淳之 氏	NHK 財団ことばコミュニケーションセンター専門委員
上野 義博 氏	文京区教育委員会教育推進部教育指導課 指導主事



本選出場者（青少年の部）



本選出場者（一般の部）

事業名 旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）一般公開事業

主催 文京区

受託 跡見学園女子大学

令和6年4月から令和7年3月まで、旧伊勢屋質店一般公開を行った。

令和6年度一般公開日

4月	日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30				

月合計6日

5月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30	31	

月合計6日

6月							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
	30						

月合計8日

7月		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30	31			

月合計4日

8月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	31

月合計3日

9月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30					

月合計5日

10月	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30	31		

月合計6日

11月						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30

月合計5日

12月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				

月合計4日

1月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30	31	

月合計4日

2月							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	

月合計6日

3月							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
	30	31					

月合計3日

年合計60日

●令和6年度 旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）一般公開について

年間来館者数 1,589人（令和7年3月10日現在）

令和6年度 文京アカデミー受託事業

事業名	文京アカデミア講座
主催	公益財団法人文京アカデミー
受託	跡見学園女子大学

文京区内在住・在勤・在学者（15歳以上、中学生除く）を対象として、本学の教員が講座講師を務めた。

1. 文京アカデミア講座前期

- (1) 講師：文学部 横田恭三教授
- (2) タイトル：私も書ける“木簡”に挑戦！
- (3) 日程：全7回（5月9日（木）～7月4日（木）10：30～12：00）
- (4) 受講者：20名
- (5) 会場：本学文京キャンパス
- (6) その他：第5回 文^{ふみ}の京書道展に受講生の書作品を展示、講師による講評を行った。
（主催 跡見学園女子大学）
会場：大塚地域活動センター オープンスペース
日程：7月2日（火）9：00開場～7月12日（金）12：00終了

2. 文京アカデミア講座後期

- (1) 講師：文学部 アダム・クリストファー准教授
- (2) タイトル：異文化コミュニケーションのための英語
- (3) 日程：全8回（10月11日（金）～12月6日（金）10：30～12：00）
- (4) 受講者：20名
- (5) 会場：本学文京キャンパス

以上

令和6年度 地域交流・企業連携活動（地域・実施日順）

文京区等

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
区内大学学生支援担当者会議	地域交流センター	①② 2か月に1回 ／通年 ③ 2025(R7) 3.10(月)	①② 各大学、フミコム ③日本女子大学	①地域連携ステーションフミコムの呼びかけにより区内大学の地域関係の担当者有志が定例会合を実施・関係性を構築。 ②銭湯振興プロジェクトを共同で実施した。 ③会議参加大学の学生を集めた活動報告・交流会が日本女子大学で開催された。
NPO 法人日本成人病予防協会主催の食育講師育成事業による小学校への食育出張事業	石渡ゼミゼミ学生	2024(R6) 4.11(木) ～ 2025(R7) 3.31(月)	東京都内の小学校	・NPO 法人日本成人病予防協会が次世代へと健康の大切さを伝えていく若い世代の指導者を育成するプログラムを実施。 ・昨年度に引き続き、石渡ゼミの学生（健康管理能力検定2級の取得と日本成人病予防協会講師による実施試験に合格した者）が食育講師として、10月以降認定食育講師として都内の小学校で授業を行った。
小日向台町小学校ボランティア（放課後学習教室および子どもひろば）	ポータル公募学生	2024(R6) 4.22(月) ～ 2025(R7) 3.31(月)	文京区立小日向台町小学校	・小日向台小学校の放課後学習教室および子どもひろばの有償ボランティア活動である。 ・放課後学習支援では、小学校低学年を対象として宿題やドリルを使った学習支援を行った。 ・子どもひろばでは、小学校全学年および未就学児を対象に、校庭を開放し、遊具の出し入れや子どもたちと遊びながら見守りを行った。
文京ハッピーベジタブルフェスタ2024	石渡ゼミゼミ学生	2024(R6) 4.22(月) ～ 9.25(水)	学内および文京シビックセンター1階展示室	・文京保健所健康推進課主催の「文京ハッピーベジタブルフェスタ2024」にゼミとして出展した(11年目)。 ・開催日：9月25日(水) 開催内容：野菜の食育に関するパネル展示、体験コーナー、食育講座等 サブテーマ：「和食で野菜をおいしく！」
文京区での銭湯活性化に関する地域活動	ポータル公募学生	2024(R6) 5.20(月) ～ 2025(R7) 3.31(月)	大黒湯、ふくの湯、豊川浴泉、白山浴場	・文京浴場組合からの依頼を受け、大学生の力によって「浴場を地域の居場所にする」「浴場を若い世代にも知ってもらう」ことを目標に立ち上げたプロジェクトである。 ・具体的な活動として、銭湯で行われるイベント内容の案内、営業情報をSNSで発信、定例会の開催等を行った。
大塚小学校での水泳指導補助員	石渡ゼミゼミ学生	2024(R6) 6.14(金)～ 7.18(木)	文京区立大塚小学校	・大塚小学校から、ゼミ学生に水泳指導補助員としての協力依頼があった。 ・期間中は、ゼミ学生が水泳指導補助や見守り、プールの環境整備(片付け・掃除等)を行った。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
①第5回『文(ふみ)の京(みやこ)書道展』の開催 ②『文(ふみ)の京(みやこ)書道特別展』の開催	文学部 横田恭三教授	①② 2024(R6) 7.2(火)～ 7.12(金)	①②大塚地域活動センター	①本学の書道を愛好する学生の育成と発表機会の提供 ・本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供 ・本学書道実習受講者および本学書道愛好者で出品を希望する者の書作品の展示 ②本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供 ・関東を中心とする主な高等学校に対する本学教職課程(書道)の認知 ・文京区との連携による生涯教育推進及び社会貢献
株式会社エムアイフードスタイル「クイーンズ伊勢丹」との産学連携による商品開発【第2弾】	石渡ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 7.3(水) ～ 2025(R7) 2.28(金)	文京キャンパス内・(株)エムアイフードスタイル本社、クイーンズ伊勢丹各店舗	・昨年度に続き、高品位スーパー「クイーンズ伊勢丹」を中心にフードビジネスを展開する(株)エムアイフードスタイル(三越伊勢丹グループ)と協働し、産学連携プロジェクトを実施した。 ・学生は、クイーンズ伊勢丹のプライベート商品となる新たな食品の開発と販売促進活動を行った。
企業地域連携推進ネットワーク会議	地域交流センター	① 2024(R6) 7.17(水) ② 2025(R7) 2.20(木)	①株式会社シード ②株式会社良品計画	・区内企業と地域活動団体の連携事例紹介 ・意見交換 ・区内企業が本業を生かして地域団体とどう連携しているかについて事例紹介を通じて知り、今後の取り組みのヒントが得られるような機会が提供された。
第39回文京朝顔・ほおずき市運営への協力・出展	土居ゼミ ゼミ学生 ＋ ポータル 公募学生	2024(R6) 7.20(土)～ 7.21(日)	傳通院	・39回目を迎える「文京朝顔・ほおずき市」。例年行われている文京区の祭事である本イベントについて、学生が運営協力・出展を行った。 ・当日はオープニングセレモニーでのボランティア活動、ゼミ学生によるブース出展を行い、地域の方々と共に活動することで地域活性の支援と協調性の力を養うことができた。
文京区大学生ワークショップ～「ゼロカーボンシティ」を実現するために文京区地球温暖化対策地域推進計画の見直しに向けて～	安藤ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 8.9(金)	文京シビックセンター	・文京区資源環境課では、地球温暖化対策地域推進計画について、計画策定以降の世界的・日本的な動向を受け、今年度計画の見直しを行っている。見直しにあたり、これからの時代を担う若い世代の意見を取り入れるため、大学生を対象としたワークショップが行われ、ゼミ学生が参加した。
文京区クールアースフェア	安藤ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 8.10(土)	文京シビックセンター	・文京区資源環境部主催で開催されている、環境系啓発イベント「クールアースフェア」にゼミとして出展した。
動坂町会子ども祭り&動坂テラス子ども食堂ボランティア	ポータル 公募学生	2024(R6) 8.25(日)	動坂テラス	・動坂町会主催の子ども祭りおよび動坂テラス(子ども食堂)での活動を行った。当日は学生が、子ども食堂で配付するカレーの準備・配付、縁日の手伝いなどを行った。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
小石川表町会 白山神社例大祭への参加	土居ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 9.21(土)～ 9.22(日)	小石川こわ保育園	・文京朝顔ほおずき市の開催エリアにある小石川表町会では、例年、白山神社の例大祭にあわせて町会の祭礼行事を行っている。今回、文京朝顔ほおずき市にてブース出店したご縁で、同町会より祭礼行事への参加依頼があった。 ・当日は、山車・神輿の巡幸時の交通誘導、町会でのふれあいイベントの手伝いを行った。
妊産婦・乳児救護所開設訓練	文京区防災課、 跡見学園女子 大学	2024(R6) 9.28(土)	文京キャンパス	・妊産婦・乳児救護所の実際の開設手順の確認および活動の確認を行った。 ・特に発災時の初期対応に重点を置き実効性のある訓練を行った。
大塚仲町町会・菊坂町会 ハロウィンイベントのボランティア	跡見「学芸員」 in 菊坂	2024(R6) 10.26(土)	窪町東公園ちびっこ広場、 たかざわや、 旧伊勢屋質店周辺 地域	・文京区内の町会主催で行われる子ども向けハロウィンイベントに、学生がボランティアとして参加した。当日は町内会や地域の子どもたちとの交流を通して、地域活動を行った。
跡見ひきこもり等地域支援事業	板東ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 11.7(木) ～ 2025(R7) 3.31(月)	特定非営利活動法人サンカクシャ、 任意団体さきちゃんちほか	・各支援団体との協同事業。 ・ゼミ生がボランティアとして若者の居場所に関わった。 ・学生にとっては支援の現場に触れることで、座学で習得した知識を現実的に活用する方法を、その困難さとともに体験することができた。地域社会に関わることで社会性を学び、人間力の向上に繋がった。 ・大学にとっては、地域連携の展開、信頼度を高めることができた。
文京博覧会	地域交流 センター	2024(R6) 11.15(金)、 11.16(土)	文京区役所	・文京シビックセンター地下2階を会場に、区内の企業が出展・物販などを行うとともに区内の大学が出展しているイベント。 ・地域交流センターとしてポスター展示と学科関連の資料を提供した。
「いきいきシニアの集い」への書道作品出展	跡見学園女子 大学 書道部	2024(R6) 11.23(土)～ 11.24(日)	文京シビックセンター	・文京区高齢福祉課、文京区高齢者連合会主催の「いきいきシニアの集い」へ学生の書道作品を出展した。 ・多世代交流の機会となった。
礫川マラソン	地域交流センター	2024(R6) 11.24(日)	文京区内走路	・主催：礫川青少年健全育成会の地域のマラソンイベント。 ・宣伝水「あと水」の提供を行った。
菊坂子ども歴史探検イベント	跡見「学芸員」 in 菊坂	2025(R7) 1.26(日)	菊坂跡見塾(旧伊勢屋質店)	・文化庁と消防庁が定める文化財防火デーに合わせて、学生たちが文化財の防災について学んできた内容の実践訓練を行った。 ・消防署による消火器訓練。 ・参加者：本郷消防署、菊坂町会会員とその子供ほか

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
文京まちたいわフェス 2025	土居センター長 地域交流 センター	2024(R7) 2.11(火)	文京キャンパス	・文京まちたいわフェス実行委員会／文京区まちづくり関係者有志が集う、区内地域活動等の発表イベント。本学まちづくり学科の学生も運営に協力した。 ・文京区まちづくり関係団体によるポスター展示や、交流イベント(基調講演および交流ワークショップ、音楽パフォーマンス、子ども縁日等)が行われた。
文京区コミュニティバスB-ぐる活性化プロジェクト	松浦ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 10.1(火) ～ 2025(R7) 3.31(月)	文京区民センター ほか	・文京区のコミュニティバス“B-ぐる”の車内で流す映像制作プロジェクト。 ・松浦ゼミの学生がプロジェクト第2弾として、10月～12月で映像制作を行い、1月にバス車内で映像が公開された。 ・「B-ぐるバス沿線協議会」との連携。 ・活動を通じて、構成メンバーのチームでの行動力、外部との交渉力、コミュニティへの理解、映像制作・表現力、事業のマネジメント力等が向上した。
未来の健康を作る食育プロジェクト2024	石渡ゼミ ゼミ学生	2024年 秋学期 複数回	都内の小学校	・石渡ゼミでは、一般社団法人成人病予防協会の大学生食育講師として「バナナうんちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」というテーマの食育出張授業を都内小学校で行っている。このプロジェクトは今年度で3年目を迎えた。 ・12名のゼミ3年生は、春学期中に「健康管理能力検定2級(後援：文部科学省)」を取得し、実技試験にもパスして“食育講師”の認定を受けた。秋学期には3つのグループに分かれてそれぞれ3校ずつ、合計9校の小学校で食育授業を実施し、多くの児童に、健康的な排便習慣を身につけるためのコツを伝えた。
春日忌への参加	基礎ゼミ インターン生、 ボランティア学生、 地域交流 センター	2024(R6) 10.19(土)・ 20日(日)	麟祥院	・春日局の追善供養の行事である春日忌は、2018年度より一般公開もされ地域イベントとしてスタートした。 ・春日忌の運営に関わる会社には、例年、就職課で行っている「ATOMIインターンシップ」や観光コミュニティ学部の「基礎ゼミインターンシップ・学外実習」で学生がインターン等を行ってきた。 ・インターンの実施および春日忌配布・販売物品の企画制作が行われ、当日は学生が春日忌の跡見学園女子大学ブースの運営を行った。 ・パンフレットへの広告掲載と協賛金の協力を行った。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
菊坂跡見塾での「菊坂ひなまつり」イベント実施	跡見「学芸員」 in 菊坂 連携先： MIRATZ本郷 第二保育園	2025(R7) 3.3(月)	菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）、 MIRATZ本郷第二 保育園	・文京区内の保育園「MIRATZ本郷第二保育園」にて、学生企画による工作、演奏を行い、保育園の園児とひなまつりイベントを実施した。

新座市等

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
新座子育てネットワーク「子どもひろば」	ポータル 公募学生	通年・ 不定期開催	新座市内集会所、 高齢者福祉施設	・NPO法人新座子育てネットワークが行う小学生対象「子どもひろば」事業に地域交流センターの呼びかけで学生がボランティアで参加した。 ・令和6年度からは高齢者福祉施設での「子どもひろば」を新規開設し、高齢者と一緒に子どもの見守りをする活動に学生が参加した。
みんなのわこらぼまつり2024	ポータル 公募学生	2024(R6) 5.25(土)	和光市役所市民広場	・和光市市民活動推進課主催の「みんなのわこらぼまつり2024」に、本学学生が企画運営を担うスタッフとして参加した。 ・学生たちは企画の検討および準備において、複数回の打ち合わせを行い、当日はスタンプラリーの受付や誘導・案内、ステージパフォーマンス等を行った。
ちびっこふるさと探検隊	ポータル 公募学生	2024(R6) 8.6(火)～ 8.7(水)	新座市	・埼玉県新座市と栃木県那須塩原市との友好姉妹都市交流事業として行われている、小学生対象「ちびっこふるさと探検隊」に本学学生がボランティアとして参加した。 ・本番までに計3回の学生会議を実施し、学生のアイディアで交流事業内容の企画・検討を行った。
にいざプラスカレッジ	栗田秀法教授	2024(R6) 9.28(土)、 10.12(土)、 10.19(土)、 11.9(土)、 11.16(土)、 11.30(土)、 12.14(土)	本学新座キャンパス	・新座市生涯学習スポーツ課が主催する市民向け公開講座として実施した。 ・新座市内3大学（跡見、十文字、立教）が1コースずつ実施し、本学は「教養コース」を担当した。 ・講師は、文学部 栗田秀法 教授が務め「アート・コミュニケーター講座～対話による鑑賞を通じて美術鑑賞の楽しさを共有しよう～」という内容で実施した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
市内3大学学生と市長との懇談会	赤松ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 11.11(月)	本学新座キャンパス コモンルーム	・新座市では広聴制度の一環として「市内3大学学生と市長との懇談会」を実施している。今回、赤松ゼミ生が「大学生から住み始めて、子どもと一緒に住み続けられる新座市へ」というテーマで自然体験イベント企画、住まい体験、送迎保育ステーションの設立といった提言を行った。
和光市家庭教育支援事業「朗読をもっと身近に“はじめての朗読講座”」	渡部英美教授	2025(R7) 2.6(木) および 2.20(木)	和光市南公民館	・本学と和光市の包括協定に基づき、家庭教育支援事業の一環として講座を開催した。 ・講師は、文学部 渡部英美教授が務め、朗読初心者を対象として全2回構成で行った。
和光市南公民館およびTJUP共催による家庭教育支援事業「ちはやふる～はじめての百人一首～」	加美甲多准教授 かるた部	2025(R7) 3.22(土)	和光市南公民館	・TJUP共催による家庭教育支援事業として講座を開催した。 講師は、文学部 加美甲多准教授とかるた部学生が担当し、百人一首のミニレクチャーおよび実技・体験を実施した。

その他の地域

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
花の実園 第6回さくらまつり2024 ボランティア参加	松井ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 4.7(日)	社会福祉法人習愛会 花の実園	・花の実園が主催する「さくらまつり」に学生がボランティア参加をした。参加学生は、催事に参加する団体の誘導や模擬店補助等を担当し、社会福祉施設と地域社会の関係について考察するきっかけを得ることができた。
天王洲・キャナルサイド活性化協会「水辺とアートの街天王洲」2024春フェスへの参加	篠原ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 6.1(土)～ 6.2(日)	一般財団法人天王洲・キャナルサイド活性化協会	・「水辺とアートの街 天王洲」をテーマに地域活性化事業に取り組んでいる『天王洲・キャナルサイド活性化協会』と連携し、春フェスイベントの運営企画に参加した。 ・本イベントでは、パナソニック観光DX開発チームと観光庁とコラボレーションし、未来型観光ガイドシステムの開発に取り組んだ。天王洲運河アートクルーズの船上ガイドを学生が担当した。
静岡県東伊豆町の産官学地域活性化事業	塩月ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 7.1(月) ～ 2025(R7) 3.31(月)	静岡県東伊豆町	・塩月ゼミでは、静岡県東伊豆町と本学で2019年11月に地域連携協定を締結して以降、ゼミ生の有志により地域活性化事業に携わってきた。 ・現地調査では、東伊豆町の観光資源の視察、雛のつるし飾りの発信と継承、および特産品を用いた商品開発事業を実施した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
農林水産省 農山漁業 発イノベーション推進 事業《地域活性化型》 補助事業 山形県西村山郡西川町 大井沢 地域づくり活 動計画策定・実証事業 への協力	土居ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 7.27(土) ～ 2025(R7) 3.31(月)	山形県西川町大井沢	・土居ゼミナールと山形県西川町大井沢との協働事業として、学生がまちづくり支援に参加した。 ・住民組織が中心となり、農水省の補助事業が採択され、地域づくり計画の策定と、実証事業を行った。
第14回清瀬ひまわり フェスティバルボラン ティアへの参加	ポータル 公募学生	2024(R6) 8.6(火)～ 8.13(火)	清瀬市	・都市農地の重要性をPRすることと、清瀬市の観光スポットとして地域活性化を図ることを目的としたお祭りで、公募した学生がボランティアとして参加した。
文京区学生と創るアグ リイノベーション事業	篠崎ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 9.2(月)～ 9.4(水)、 2025(R7) 2.21(金)～ 2.22(土)	岩手県盛岡市内	・盛岡市との地域連携協定に基づき、「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」の一環として、今年度より新たなテーマとして「岩手畜産農家のグループ化に関する調査研究」をテーマとして実施した。現地でのヒアリング調査を行った。また、2月下旬には成果報告会に参加し、終了後は市長や参加大学等の懇親会が実施された。
東伊豆町フィールド ワーク	塩月ゼミ ゼミ学生	2024(R6) 9.11(水)～ 9.12(木)、 2025(R7) 1.18(土)～ 1.19(日)	静岡県東伊豆町	・塩月ゼミでは、静岡県東伊豆町と本学で2019年11月に地域連携協定を締結して以降、ゼミ生の有志により地域活性化事業に携わってきた。 ・今回の現地調査は、令和4年度から継続している「サッポロビール×跡見学園女子大学×静岡県東伊豆町 オリジナルカクテルレシピ開発事業」の一環として、地元特産品等の情報収集・新たなカクテル開発のため、現地でのフィールドワークを実施した。
農山漁村発イノベー ション推進事業《地域 活性化型》補助事業 山形県西村山郡西川 町大井沢 地域づくり 実証事業 大井沢地域でのイベ ントへの協力	土居ゼミ ゼミ学生	2025(R7) 2.28(金)～ 3.1(土)	大井沢自然と匠館	・土居ゼミでは、設立当初から山形県西川町大井沢との協働事業に取り組んでおり、日常的な連携の活動に加え、移住促進ガイドブックの制作(2017年度)、新規お土産品の制作(2021年度)、観光マップ制作(2022年度)を行ってきた。2023年度に大井沢では住民組織が中心となり、農水省の農林漁業発イノベーション推進事業の地域活性化型の補助事業が採択され、今後3年間かけて地域づくり計画の策定と、実証事業を行う予定である。 ・土居ゼミでは、コミュニティデザインの実践の恰好の機会ととらえ、本事業に協力した活動を展開している。2024年度は、3月1日に大井沢自然と匠館にて行われる「第2回囲炉裏の周りでいろいろイイナ 昔語りと炉端焼き」の事前準備(2月28日)と当日のイベント運営(3月1日)に協力した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
銚子市の空き家活用と地域活性化に関するフィールドワーク	松井ゼミ ゼミ学生	2025 (R7) 3.4(火)～ 3.5(水)	千葉県銚子市外川町	・ 古民家をリノベーションした宿泊施設に宿泊し、外川町一帯、および周辺の観光スポットをフィールドワークした。その成果を、外川町の古民家リノベーションをけん引する「リレイル株式会社」の代表と共有し、フィールドバックをもらい、さらに活動に対するアドバイスを受けた。 ・ 以上の活動を通じて、外川町、さらには銚子で展開される地域活性化についての理解を深めることができた。

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 『ゆかり』に関する規程

第一条 この規程は、跡見学園女子大学学則第一条の二第3項に基づき、地域交流センター年次報告書『ゆかり』（以下『ゆかり』という。）の発行と編集に関する必要な事項を定める。

第二条 『ゆかり』は、原則として毎年一回発行する。ただし、必要な場合には、臨時号や合併号を発行することができる。

第三条 『ゆかり』に成果を発表することができるのは、原則として跡見学園女子大学（以下「本学」という。）の専任教員とする。ただし、以下の者は、地域交流センター長（以下「センター長」という。）が認める場合には、成果を発表することができる。

- 一 本学兼任講師
- 二 本学事務職員（学芸員・司書等）
- 三 本学に在籍する学生
- 四 本学の地域交流活動に関与する者
- 五 地域交流センター運営委員会（以下「センター運営委員会」という。）の議を経て、センター長が許可する者

第四条 『ゆかり』の編集及び発行については、地域交流センター（以下センターという。）がこれを行う。

第五条 投稿を希望する者は、センターが指定する期日までに「投稿申込書」に必要な事項を記入の上、届け出るものとする。また、原稿は、センターの指定した期日までに提出することとする。

第六条 原稿を依頼する者に対し、センターは「原稿依頼」を送付する。

第七条 投稿原稿は、センター運営委員会において審査を行い、採否を決定する。ただし、必要に応じて、投稿原稿の内容に関わる専門家に意見を徴することがある。

第八条 採用原稿が多数にのぼり、全編の掲載が困難な場合には、センター運営委員会が協議し対処する。

第九条 掲載原稿の著作権は執筆者に属し、センターは編集著作権を持つものとする。掲載原稿の複製権及び公衆送信権を含む著作権は、大学が参加するインターネット上の論文公開システムの中で無償公開されることを前提としたうえで、原則として執筆者に帰属する。それぞれの執筆者が学術的寄与のために複製または転用等を行う場合は、これを妨げないものとし、また、センターに許諾を求めることを要しないものとする。ただし、転用等を行う場合は、その内容が『ゆかり』に掲載済である旨を明記しなければならない。

第十条 この規程を実施するに当たり、必要な細則を定めることができる。

第十一条 この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、センター長がこれを行う。

附 則 本規程は、令和3年4月1日より施行する。

ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書6

発行日：2025 年3 月31 日

発行者：跡見学園女子大学地域交流センター

〒112-8687 東京都文京区大塚1 丁目5-2

電 話：03-3941-7420

印 刷：セントラル印刷（株）

ISSN：2435-516X

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 6

ゆかり

「ゆかり」巻頭言	小仲信孝
地域交流活動の再興とその新しい形態	
—2024年度 跡見学園女子大学の地域交流活動の概況—	土居洋平
跡見学園女子大学との地域連携活動と跡見生に期待すること	那須晴吾
「行こうよ！ 文京浴場♨ ～学生プロジェクト～」	
文京区浴場組合と跡見学園女子大学、跡見大学生の連携に期待する事 ...	岡嶋良太
静岡県東伊豆町 跡見学園女子大学の学生との取り組みについて	太田裕介
「跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて」	
——TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）活動報告	照沼 愛
跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について	
—2024年度の活動状況と課題の分析—	川副早央里
特集 2024年度の地域交流活動	跡見学園女子大学地域交流センター
第5回「文の京書道展」開催報告	横田恭三
菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（5）	川副早央里・新井美鈴・大迫陽毬・ 黒木真悠・小玉采奈・小山凧咲・ 佐藤葵・鈴木未来・鈴木みづき・ 津島誇乃佳・土田芽依・弘真生・ 増田えみり・松井優花
旧伊勢屋質店特別企画展	
「質屋と女性～一葉も通った伊勢屋質店～」開催の記録	小玉采奈・川副早央里・津島誇乃佳・ 新井美鈴・大迫陽毬・大屋恵実子・ 黒木真悠・小山凧咲・佐藤葵・ 清水菜摘・鈴木未来・鈴木みづき・ 長根旭美・西川綾菜・松井優花
2024年度菊坂子ども歴史探検隊	
「どうやって質屋を守る!? 防災の秘密を探してみよう！」開催報告	川副早央里・小玉采奈・小山凧咲・ 磯田みづき・鈴木みづき・ 津島誇乃佳・増田えみり
菊坂跡見塾における企画展の生涯学習効果に関する考察	
—2023年度企画展参加者アンケートの分析—	川副早央里
メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）〈紹介日順〉	地域交流センター
2024年度の地域交流関連活動記録	地域交流センター
跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程	